

《はじめに》

この本は、静岡県のローカル民放SBS静岡放送で1973年入社から2009年の定年退社までアナウンサーとして勤務した、國本良博という人間のアナウンス回顧録です。

2009年、定年退社を目前にした夏、ある出版社からアナウンサー時代を振り返った本を書いてみないかという話がありました。その時は、一介のローカルアナウンサーが本を書いてみたところで出版社に迷惑をかけるだけではないかと、いう遠慮もあって、即答しませんでした。

それが2011年7月TBSテレビの特番で、私がニュース番組で鼻血を流した昔のシーンが流されたことから、再びアプローチがあったのです。私も少し考えが変わり、こんなことでもなければ半生を振り返ることもないであろう、いいきっかけを与えていただいたのかもしれないと思うようになりました。

とは言うものの、本というものを書いたことの無かった私には、どう構成すれば良いのか、どう書けば良いのか皆目検討がつきません。ですが、とにかく書き始めました。残しておいた新聞記事、写真、台本、雑誌、録音、ビデオなどをその都度見ては、確認できる事実だけを書こうと努力しました。

しかし直に壁にぶつかりました。具体的な資料や記録のない、つまり記憶にしかない大事な出来事の記述という問題です。資料や記録の多くは結果です。大事なのはそこに至る過程であるという厳然たる事実が壁として立ちはだかりました。この時の事実関係はこれで正しいのだろうか。結果はああだったけれど、あのときのあの人は本当はどう思っていたのだろう。自分の曖昧な記憶や、勝手な思いだけで書き進んで良いものだろうか。

ええい！ こうなったら関わった人に直接聞くしかない！ 片っ端からハガキと電話とメールでの確認作業が始まりました。もちろん連絡先が分からない人もいらして、近しかった方をたどりながら調べました。

大変な作業でしたが、聞いているうちに当時が鮮明に浮かび上がって「そうだったのか！」と思うことがたくさんありました。

残っている録音録画も大きな助けになりました。録音録画をほぼそのまま文字化した部分もあります。

とにかく、悪戦苦闘・無我夢中の3ヶ月でした。

この本が、時代と一緒に駆け抜けた(当時中高生の)皆さんには思い出の再確認を、そしてこれからアナウンサーを目指そうという方には、温故知新、新しい

時代のアナウンサー像を作り出していく参考になれば幸いです。

《そもそも》

大学1、2年は演劇部に属し、結構本気で演劇の世界を目指していました。学生演劇ですから新劇です。2年の時、清水邦夫さんの戯曲【狂人なおもて往生をとぐ】を上演することになりました。私は演出でした。戯曲の解釈から始まり侃々諤々の議論をしながらのスタートでした。

議論が行き詰まる中、著者の清水邦夫さんに話を聴きできたらと図々しくもお願ひしてみました。すると「会っても良いですよ」との返事。交渉はしてみるものだと思いました。

清水さんはとても親切且つ具体的にお話をして下さいました。それで十分だと思いましたが、清水さんから、劇団俳優座での作品の一つ後の戯曲【あなたのためのレッスン】を公演するという話が出ました。【狂人なおもて…】【あなた自身の…】の二つの作品は共に俳優座のために清水さんが書き下ろした作品、しかも同じ「家族崩壊」をテーマにしたものでした。そしてまさに今、舞台稽古中だというのです。そうなれば見たくなるのは当然でしょう。すると清水さんは、「俳優座に頼んでみてあげるよ。」とおっしゃって下さったのです。

やっぱり作者の言葉は強い！ 「OK」が出たのです。見学に行った日付は覚えていません。何人かと俳優座劇場に行き、舞台稽古を見ました。原田芳雄さん、菅貫太郎さん、市原悦子さんが演じていらっしゃいました。

「学生演劇とは違う！」

発声が違うせいもあるのでしょうか。ド迫力でした。演出のやり方を根本的に変えよう、と決心したのを覚えています。

昼食のための休憩になりました。役者の方の話しが何としても聞きたくなりました。皆さんはまとまって移動するわけではなく、舞台からバラバラに解散していました。その中の一人が舞台から客席に飛び降りて、こちらの出入り口を目指してきました。原田芳雄さんでした。

当時原田さんはNETテレビ(現在のテレビ朝日)で放映された「五番目の刑事」で売り出し中の俳優でした。思わず、

「あの、お話を聞きたいのですが」と声を掛けてしまいました。すると、

「メシ食いながらで良ければいいよ。」

とあっさりした返事。仲間が「行っていいよ。」と言ってくれたので後を追いました。

近くのレストランで話を聴くことになりました。

「何か食べる？」

原田さんが声を掛けてくれました。

「いいえ、大丈夫です。」

本当はおなかペコペコだったのですが、申し訳ないと思いつつ答ました。

「じゃ、コーヒーでも頼もうか？」

原田さんは料理を豪快に食べながら、戯曲について自分なりの解釈を話してくれました。真摯に取り組んでいることがよく分かりました。最後に、

「芝居の世界に進みたいと思っているのですが…。」

と打ち明けると、

「いいけど、なかなか食えないよ。アルバイトしながら続いている人が圧倒的だ。良い位置にいる人はごく僅かだよ。それを承知で飛び込まないとね。」

【あなた自身のためのレッスン】は、1970年5月12日～18日俳優座第98回公演として上演されました。原田さんも菅さんも今は故人です。

《父と》

数ヶ月後、自分たちの公演も無事終了しました。2年の冬です。そろそろ進路を定めなくてはなりません。

「お父さん、実は卒業後なんだけど芝居の道に進みたいんだ。」

父は銀行マンでした。猛反対しました。そんな不安定な道に進むなんて許せなかつたのです。父は大志を抱いて満州銀行に入りましたが、日本の敗戦で命からがら引き揚げてきた人間です。それからの苦労を話してくれました。

「自分の子供たちには少しでも安全な道を歩んで欲しい。それでも人生何が起きるか分からんんだから。」

父の気持ちは痛いほど分かりました。でも芝居への夢は捨てきれずにいました。

ある日、ラジオを聴いていたら、

「君もアナウンサーを目指してみないか！ TBSはアナウンサー養成学校〈東京アナウンス学院〉をこの春開校します。」

とのコメントが耳に飛び込んできました。

その時私は中高生の時ラジオで聴いた、自分の言葉でしゃべっているDJ（ディスクジョッキー）と呼ばれる人たちを思い出したのです。DJになる手段は、タレントとしてどこかの事務所に所属し放送局に売り込んでもらうか、直接放送局のアナウンサーになるかのどちらかです。父にとって演劇人もタレントも同じです。残るのは一つ。自分と自分の主張を表現する手段として「演劇」を志した部分が大きかった私は（DJ≠アナウンサー）に希望を繋ぎました。

「アナウンサーなら会社員だ。父の言う（安定）した道の一つだろう。また自分のやりたい道からそう大きく外れてはいないかも知れない。芝居に向かってやってきたことも生かせるかも知れない。」

父にアナウンサー養成学校へ通いたいと申し出ました。父は、

「アナウンサー試験なんて、くじ引きみたいなものだぞ。自分はその方面に知り合いもいないから賛成はしかねるな。」

粘り強く説得を続けました。すると、

「ところで、おまえの学部で取れる資格は何だ？」

「教職とか司書なんかがあるよ。」

「そうか。教職はどんな科目が取れる？」

「たしか、社会と商業と職業の3科目だと思った。」

「よし、その3科目の教職を全部取りなさい。」

「えーっ！ 1、2年の教職に必要な単位をほとんど取っていないよ！」

「良博、それが条件だ。もしアナウンサー試験にすべても教職の道が選択肢として残るじゃないか。」

私の将来を心から案じての条件だったのです。またそれを呑まない限り、アナウンス学校の学費を出してももらえません。ほかに方法はありませんでした。

1971年春、東京アナウンス学院に願書を提出し、一期生となりました。

《地獄の3、4年》

3年への進級オリエンテーションが始まりました。教職単位取得は至上命令です。3年からの専門科目に加え、1、2年の教養科目未取得単位授業を加えていくのですから、授業時間割の組み合わせは至難の業でした。当然ながらどうしてもバッティングするところが出てきます。そこで同じ教授の他学部での授業予定を調べ、研究室に行って事情を説明し頭を下げました。

当たって砕けろ、です。こちらが必死なのを見て取るとどの先生も「OK」を出し

てくれました。結果、月曜日～土曜日まですべての時間割が埋まっていました。それでも取り切れるわけがありません。大学側とも相談し、4年時も頑張れば網羅できるという結論になりました。

楽な3、4年を送れるつもりでいた自分でしたが、1、2年の時より遙かにハードな大学時代後半でした。

《アルバイト》

東京アナウンス学院は毎週日曜日の授業でしたから、休み無しに学校通いをしていましたことになります。通い始めて9ヶ月。基礎科・専攻科・研究科と進み、入学時300人いた同期生も15人に減っていました。研究科が終われば一応修了です。そろそろ就職試験の準備に入らなくてはと、繁くアナウンス学院に行っては情報を集めていました。そんなある時、先生から

「國本くん、TBSラジオ朝ワイドのアルバイトがあるんだけどやってみない？就職してから役に立つと思うよ。ただし半年だけ。この4月からなんだけど。」

やりたいのは当然です。以前、演劇部時代にフジテレビで大道具のアルバイトをしたことはありましたが、番組制作の現場を見ることはできませんでした。絶好の機会です。でも、やっぱり授業との兼ね合いが問題でした。

早速大学側と相談。先生の協力のもと、4年で履修予定の残り授業を午後時間帯に集めることに成功したのです。

こうしてTBSラジオ「おはよう片山竜二です」(月～金、7:25～9:15)のAD(アシスタント・ディレクター)のアルバイトをすることができました。一番バス～小田急線～地下鉄～TBS～大学の毎日が半年続いたわけです。このアルバイトの間に番組の組み立て、仕込み、テープ編集などを学ぶことができ、まさに先生のおっしゃるとおり就職後非常に役に立ちました。

《アナウンサーを目指す》

そのアルバイトの最中、就職試験と教育実習(教職用)もあって、どんな風に時間をやり繕りしていたのかはっきり覚えていません。無我夢中だったんですね。

アナウンサー採用試験は、父の言った「くじ引き」ではありませんでしたが、この放送局に入りたいなどとはとても言えるものではありませんでした。アナウンス学院に履歴書・卒業見込み証明書・健康診断書の3点を10数セット預け、「募

集があつたらすぐ送つて下さい。」とお願ひしたのです。

1972年5月、最初のアナウンサー試験に臨みました。その局が静岡放送でした。内定が出るまでの間、様々な局を受けました。

アナウンサー採用試験は精神的に過酷な試験の一つだと思います。やり方は違つても受験者を一人ずつ俎上に載せ、いろいろな角度から吟味することは変わりません。いずれにしても、受験者をスタジオで孤立無援の状態にして様々な課題を与えるわけですから、気後れ・萎縮しないわけはありません。また自分以外の人が皆、自分より自信ありげに見えてしまうものです。

でもそれは皆一緒です。不安そうな顔を一所懸命隠し、挑戦しているわけです。

採用する側に立った時に分かることがあります。アナウンサーは皆採用試験の洗礼を受けているわけですから、受験者の気持ちは痛いほど分かっています。多少噛んでもトチつても、それにとらわれることなく、その奥にあるものを探ろうとしています。完成品ではなくて、磨かれざる玉を探しているのです。多少しゃべりに難点があつても、研修で直せそうなものならあまり問題にしません。それより、のめり込んだものを持っているかどうかが問題です。普通の人が相手だったら絶対に負けない、と言えるくらいのものを持っているかどうかです。趣味でも何でも良いのです。人に負けないものがあるという自負は、自信の拠り所を作ります。それを自慢したりひけらかせることではなくて「拠り所がある」、それが一番大事なのです。それを聞き出そうとします。何か出てくると本物かどうか突っ込んで聞きます。それを熱心に説明し始められたら、「なかなか！」と試験をしていても楽しくなってきます。

もう一つ大事なことは、聞き分けられる「耳」を持っているかどうかです。「パーティ」を「パーティー」、「ディズニーランド」を「デズニーランド」と言ってしまうのは、聞き分けることができないからです。

以前、「アドバイスをください。」とアナウンサー志望の女子学生が訪ねてきました。話し始めてすぐ気になったことがありました。「カ行」と「ラ行」の音が不自然なのです。声帯から出た音が舌使いの加減で「脇漏れ音」混じりになるのです。舌の使い方の未熟な子供時代に多く見られる現象でもあります。成長するに従つて他人の発音に倣おうとし矯正していくわけですが、そのまま大人になつてしまう場合もあり、彼女もそれでした。問題は、そのことを指摘しても分からぬことです。

「ぼくの発音は、カ・キ・ク・ケ・コ・ラ・リ・ル・レ・ロですよね。」

「はあ。」

「あなたのは、…………となっています。」

「はあ。」

正しい発音と彼女の発音をまねた発音の区別がつかないのです。これは聞き分けられる「耳」が育っていないためなのです。では訓練で聞き分けられる「耳」にできるんでしょうか？ 無理なんですね。

一番大事な時期は、言葉を覚える乳幼児期です。その頃の子供の頭の中にはおとの発音や発声がしっかり刷り込まれていきます。ここで「耳」も作られていくわけです。でもまだ身体の器官の使い方はうまくないですから、しゃべりそのものはたどたどしい。それはそれで可愛いですから、思わず大人が

「そうね、タータ(靴下)はいてね。あっ、クック(靴)はどこでちゅか？」

などと俗に言う幼児言葉をしゃべると、子供は混乱します。子供本人は「くつした」「くつ」と言っているつもりなのです。ただ発達過程でうまく言えないだけなのです。育ちかけている「舌」や「耳」に良い影響はありません。

科学的根拠はありませんが、小学生の段階でほぼ決まってしまうような気がします。ただこれは、あくまでアナウンサーとしての発音・発声適性に限定した話です。当然ながらその方の人間としての能力の話ではありません。

魅力のある何かを持っていても、聞き分けられる耳を持っていても、採用を躊躇してしまうのは「作られたしゃべり」を感じる場合です。誰かの真似のようなしゃべり、ウェーヴ(リズムに乗せたような)を感じるしゃべり、いろいろあります。「学ぶ」は「真似ぶ」からきているわけですから、真似そのものは基礎を学ぶスタートとして大きな意味を持っています。ただ、そこから脱却できない「頑固な真似」が問題なのです。

「作られたしゃべり」をする人は概して思い込みの強い人が多く、研修などで修正することは極めて難しいと思います。

《アナウンサー採用試験》

静岡放送の試験で思い出すことは、身上書に書いた趣味の「SF」について

「SFというのは、空想科学小説のことかね？」

「はい。日本語としてはかつてそう訳されていました。」

「今は違うのかい？」

「現在は、文壇として確立されています。ヒューゴー賞という、芥川賞・直木賞のような権威のある賞もあります。その賞を受けた作品にロバート・A・ハインラインの「異星の客」があります。ヒッピーに大きな影響を与えた〈ヒッピーのバイブル〉と言われた本です。」

ヒッピーは、1960年代アメリカの若者を中心に起こった「反戦争・反体制・自然賛美」思想を提唱した若者たちのムーブメントで、日本の若者にも多くのヒッピー族が現れました。

「結構影響力があるんだね。」

「というか私は自分の考え方にはSFから大きな影響を受けました。もし差し支えなかつたら、お手元のメモ用紙などの端で細長い短冊を作っていましたが、その短冊を半ひねりして端同士をセロテープなどで接着するとへんてこな輪ができます。それを道と見立てて自転車か何かで走るとします。

すると表になっている部分を走っていたはずが、いつの間にか裏を走っているという不思議な輪で〈メビウスの輪〉と言います。」

「聞いたことがあるような気がするよ。」

「では、その輪の紙の真ん中をはさみで切っていったらどうなるでしょう？」

「二つの輪になるんじゃないかな？」

「実は、元の輪の倍の大きさの一つの輪になります。」

「本当かね？」

実際に作っている試験官もいました。

「ではもう半ひねり、つまり一ひねりした輪を作って同じように切ったらどうなるでしょう？」

「どうなるんだい？」

「鎖のようにながった二つの輪になります。」

価値観は実に多様であり、思い込みや、想像力の欠如を原因とする偏った考え方の怖さをSFに教えられた、と言いたかったんですね。ただ、メビウスの輪が適切な例だったかどうかは分かりません。

《静岡放送入社》

静岡放送には、1973年4月に入社。正確には研修のために3月1日から出社しました。アナウンサーの同期は、上原孝男アナ、山仲宣城アナ、飯島佐智世アナ、野川照代アナ、山田清子アナの5人でした。

「あいさつ」で終わったような初日。夕方「業務日誌」用ノートを渡され、記入して一日が終わりました。

翌日です。出社すると机の上に業務日誌が置いてありました。何気なく開いてみると赤い線と×印が目に飛び込んできました。「入社第一日目」という文字列に赤いアンダーラインが引かれ、その上に大きな×印が書かれていたのです。同僚に言うと皆「自分たちも同じだ。」と言います。

「何でだろう？」

その疑問に誰も答えられません。アナウンス研修の先生であり、直属の上司は
神村敏行アナウンス課長でした。神村さんに

「これのどこが間違いなんでしょうか？」

「分からぬのなら、調べなさい。」

早速、国語辞典で調べようとしているが、どう調べて良いのかが分かりません。再度尋ねても、「分かるまで調べなさい。」だけです。そこで絶対間違いではないものを消去していくことにしました。「入社」は辞書にちゃんとあるから間違いではない。「一日」も間違いであるわけがない。すると、「第」と「目」？

広辞苑を引いてみると、

「第=接頭辞。数詞に冠して物の順序を数える語。」

「目=接尾辞。その順番であることを表す。」

そうか！ 数詞の前に付けるか後ろに付けるかの違いで、意味は同じだ！

神村さんがニコニコ笑いながら、

「やっと分かったか。馬から落馬だよ。重複表現だ。」

自分で調べたものは忘れません。辞書は必携アイテムになりました。

《アナウンス研修》

アナウンス研修初日、当然ながら一人一人音読します。私の番です。一所懸命読みました。神村さんが途中で止めます。

「はい、ここまで。ところで國本くん、君の国籍はどこかね？」

「えっ？ 今戸籍は神奈川県にありますから…、日本のはずです。」

あっ、すみません。すぐ静岡に移しますから。」

「いや、そんな問題じゃない。国籍が日本なら、きちんと日本語をしゃべりなさい。そんな読み方では伝わらない。もう一つ、そんな読みではお葬式だ。」
何を言いたいのか、さっぱり分かりません。日本語以外の何をしゃべっている

というのか、馬鹿なことを言わないで欲しい！ ちょっと「ムツ」としている自分がいました。

神村さんは示唆に富んだ言い方や、比喩的な表現をなさる方です。かなり後になって何をおっしゃりたかったのかを理解しました。未熟な私は、

- ・こう読んだ方が格好良く聞こえるんじゃないかな。
- ・こういう発音の方が聴いた耳に上手そうに聞こえるんじゃないかな。

大きな誤解の中で、恥ずかしいくらいの小賢しい読み方をしていたのです。日本語の一番洗練された使い手であらねばならぬアナウンサーが、作為の感じられるいやらしい読み方をしていたとしたら…、それは日本語ではありません。伝わる読みとは何か。それを常に意識して読むこと、しゃべること。研修の大目標でした。

神村さんの研修は、すぐ脱線します。研修用にコピーしたニュース原稿などの中から、話題を引っ張り出したりするのです。地震の原稿の時、

「といえば、震度とマグニチュードの違いが分かるかな？」

から始まって、マグニチュードは値が1違うとエネルギーは32倍、値が2違うとエネルギーは1000倍以上になること、さらには地震のメカニズムなどについて教えてくださいました。東海地震説が発表される3年前のことです。

研修期間中の雑談が、後々非常に役に立ちました。当然それは計算の上だったに違いありません。

ある時、神村さんは、

「うちの伝統なんだが、役職名では呼ばないんだよ。深沢局長ではなくて深沢さん、菅本局次長ではなくて菅本さん。<sup>ふかざわ
すがもと</sup>理由は特にないんだけどね。それだけ家族的な雰囲気を大事にする社風と言えるかな。もちろん私も課長をつけなくて結構。」

「じゃ、神村さん、縮めて〈神さん〉と呼んでもいいですか？」

「いいよ。」

その日から、神さんと呼ぶようになり、しばらくすると名前が敏行さんとしゆきですから〈トシ〉とも呼ぶようになりました。失礼な話です。

神村さんはアナウンス課長でいる間ずっと部下の大きな盾になり、大きな心ですべて包み込んでくださっていました。最高の上司でした。

《初鳴き》

新人アナウンサーが初めて放送で声を出すことを「初鳴き」と言います。その日までは「卵」、それ以降は「プロ」の仲間入りです。大きく越えなければならぬ壁です。前の日からドキドキ・ソワソワ落ち着かないこと、この上ありません。

初鳴きに適したプログラムなんてものはなく、デイリーの天気予報・インフォメーション・ニュース・コールサインなどが割り当てられました。コールサインというのは、自局がどこかを表すもので「お聴きの放送は、JOVR静岡・JOVO浜松・J OVE三島、SBSラジオです。」や、もう少し短く「お聴きの放送はSBSラジオです。」、もっと短く「SBS」だけの時もありました。

私は、1973年7月16日(月)19:59:00～20:00:00の1分ニュースでした。直前に何回下読みしたか分かりません。それだけ読めばそらんじても良さそうですが、何も頭に入ってきません。覚えられないのです。もっともニュースは暗記して記憶で讀んではいけないのですが…。10分以上前にスタジオに入ってスタンバイ。膝から下に何も力が入りません。まさに地に足が着いていない状態。隣に先輩アナがついていてくれるのですが、何かあってもおいそれとは代われません。スタジオランプがスタンバイの緑から赤に変わった瞬間からオンエアです。

「3、2、1、赤！」

もう無我夢中です。何をしゃべっているのかもほとんど分かっていない状態です。覚えているのは、始まったと思ったら終わっていたということです。

とにかく、アナウンサーとしての本当の生活が始まりました。

《始末書》

仕事に少し慣れ始めた頃からミスが出てくるものです。私もご多分に漏れずミスしていました。一番多かったのが、「アナ戻を切る」(オンエア時間終了時にコメントを読み終えられなかった)というものです。原因は2つ。コメント量が多いか、終了時間の誤認です。コメント量が多ければ削れば良いし、終了時間は再確認すれば良いだけです。それができないのは「油断」があるからです。

ミスをする度に書くのが「始末書」。関係者へ不体裁のお詫びと今後の再発防止への決心などを書くものです。

ミスが重なって始末書の枚数が増えた時は、さすがに自己嫌悪に陥りました。半ばやけ気味に神村課長に向かって、

「これ何枚たまつたらハワイに行けます？」

と訳の分からぬ馬鹿なことを言いました。すると神村さんは落ち着いた声で、
「20枚だ。」

本当に20枚になった日がきました。馬鹿な私はヤケッパチになって、
「達成したのでハワイに行けますか？」

と恥の上塗りのようなことを言いました。やはり神村さんは落ち着いた声で、
「ああ、行けるよ。ただし自費でな。そして帰ってきてもデスクはないぞ。」
神村さんは心理状態をすべて見通していたのです。

《神村さん、そして伊豆半島沖地震》

その神村さんのアナウンサーとしてのすごさを見たのが、1974年5月9日の伊豆半島沖地震でした。午前8時半過ぎ、夜勤の多かった私は夢うつでその揺れを感じていました。出社すると、会社内は喧騒の渦でした。入社2年目に入ったばかりの私は何をどうして良いのか分かりません。

「通った！ 通った！ 特番いけるぞ！」

現場からの電波が通ったので、特番が可能になったのです。16時、一番被害の大きかった南伊豆町中木地区からの映像が全国に向けて放送されました。中継アナウンサーは神村さん。^{なかぎ}山崩れに22戸が飲み込まれ27人が行方不明になった現場で、神村さんは冷静に中継していきます。でも冷たいしゃべりではありません。家族の安否が分からず不安な面持ちの人に、「つらいですね。」「怖かったでしょう。」と声をかけながらインタビューしていきます。55分の特番を見事に仕切り、しゃべりきったのです。

後で聞いたら、地震の規模から考えて陸路をあきらめ、モーター艇で荒れる海から中木港に入ったそうです。中継車が別番組の取材で伊豆にいたため可能になった特番でした。自分があの現場で自分を失わずにしゃべることができるかどうか…。神村さんの中継リポートを目の前にしながら、カケラも自信を持てない自分がいました。

この後、神村さんが災害や事故現場から中継することはありませんでした。部下に任せたのです。

《忘れられない失敗》

今でも冷や汗の出る失敗があります。太平洋・大西洋を家族4人で横断されたことで有名なご一家が清水区(この時点では清水市)にいらっしゃいます。最初

の太平洋横断挑戦は1978年のことでした。そのご家族のニュースは横断のポイントポイントで報道されてきました。

横断のどの時点でのことか忘れましたが、担当テレビニュースのラスト項目にそのニュースがありました。放送枠は2分40秒。その時の項目は3本。当然ながら下読みをします。その時点で合計がピッタリ2分40秒でした。一見問題ないようです。

しかし、ニュース番組にはコメント量プラス α が必要です。開始の挨拶、項目間の区切りのためのインターバル、終了後の余韻です。特にテレビは項目ごとの画面切り替えにも合わせなければいけません。今回のような2分40秒枠の場合、理想は50秒ニュース3本(2分30秒) + クッション10秒です。

その基本を踏まえればとても入りません。3本のニュースをどんどん読み繋いでいく訳にはいかないです。

「とても入らないよ。何とか切ってくれない？」

切るというのは、コメントを削って短くして欲しいという意味です。

「いやあ、くんちやんもう切るところがないんだよ。何とか入れてくれない？」

「すごく早口になっちゃって、視聴者に不親切な読みになっちゃうよ。」

「何とかうまくやってよ。」

「じゃ、とにかく素材の切り替えを素早くやってね。」

「OK！」

すぐ本番です。

「ここにちは、県内ニュースです。まず、……」

一本目が終わりました。あれっ、VTRから顔への切り替えが遅い！ 取り返さなくちゃ！ 二本目。あっ、顔からVTRへの切り替えがもたついた！

ただでさえギリギリの原稿量なのに少しずつ時間が押していっています。いよいよ最後の項目の最終ブロック。ざっと20秒はかかる量が残っています。残り時間は、…10秒！ 原稿は、「清水市のUさん一家は、このあと…」、でも間に合いそうもない！ 端折るしかない！ 思わず、

「清水一家は、このあと…」

と読んでしまったのです。端折るにもほどがあります。あへっ、やってしまった！ 他の部分もとっさに端折って短くしたのでアナウンスを切ることはありませんでしたが、清水一家では意味が全く変わってきます。スタジオから出られなくなってしまいました。

何分スタジオにいたでしょうか。いつまでもいるわけにはいきません。そうとスタジオの扉を開けました。すると、扉を囲むように人の輪ができていました。神村さんと同僚たちです。

「申し訳ありません！」

深々と頭を下げました。真ん中にいた神村さんが一步前に出て言いました。

「國本くん。君は知らないかもしれないが、清水一家は…解散したよ。」
参りました。

《ので事件》

台風のため一夏に2回の徹夜放送をしたことがあります。台風情報は、だいたい30分おきに10分～15分の中身で放送していきます。そのうちの一つ、午前3時頃の台風情報のことでした。

それまでと同じように最新の勢力や推定位置、推定進路、雨量、風速、これまでの被害状況、警戒の呼びかけなどを放送しました。そして最後に、

「SBSテレビでは、このあとも台風情報を引き続きお伝えして参りますので」と、なぜか「ので」を付けてしまったのです。

「…引き続きお伝えして参ります。このあとは3時30分の予定です。」
と締めれば何のことはなかったのに「ので」を付けてしまった…。さあ、どうしよう。
このあと、どう着地させよう。悩んだ末、

「よろしくお願ひします。」
と言ってしまいました。直後、先輩の今村政司アナウンサーが「くんちゃん、疲れただね。代わろうか？」と声を掛けてくれました。…甘えました。

《国鉄の富士川鉄橋が流される》

愛知県渥美半島に上陸した台風10号で徹夜になった、1982年8月2日のことです。夜が明けて一段落し、通常番組にバトンタッチして帰宅しようとしていた時でした。午前7時頃だったと思います。

「くんちゃん、富士へ行ってくれ！」

「どうしたんですか？」

「鉄橋が落ちた、という一報が入った。」

国鉄(当時)の富士川鉄橋が流されたというのです。その台風は雨量が非常に多く、被害も心配されていましたが現実になってしまいました。

ただ、どうやって現場まで行くかということが問題でした。交通情報も放送していましたから、清水一富士間の東名・国道などの道路が通行止めになっていることは分かっていました。

「どうやって？」

「大丈夫。たぶん行けるから、出発してくれ。」

半信半疑、とにかく中継車に乗りました。一番の問題箇所は、東海道五十三次の宿で有名な由比と興津の間に位置する薩埵峠さつたとうげです。今も昔も難所。しかもその時は東名高速道路・国道一号線のみならず旧道も通行止めです。

こういう時に頼りになるのが技術さんです。技術の皆さんには、スタジオ放送や中継放送だけでなく、機材の保守管理、放送塔や各地に置かれた情報カメラのメンテナンスも担当しています。放送電波や中継電波の届く地域と届かない地域、届き具合、有効なカメラ位置など、静岡県内の地理情報に精通しているのです。

問題の薩埵峠の下まで来たところで、中継車は狭い急な坂道を登り始めました。普段は一般車の入らない農道です。道幅は狭く、台風の影響で折れた枝や石が散乱しています。知らなければとても通る気にならない道でした。障害物をよけながらやっとの思いで進み、最終的に峠を越えることができたのです。

富士川にたどり着いて見たら、国鉄東海道線鉄橋の一部の橋脚と橋桁が押し流されていました。すぐに中継準備。目の前の状況をリポートするしかありません。徹夜で朦朧とした頭でしたが、とにかく夢中でしゃべりました。

技術さんのおかげでできた中継でした。

《初めての番組》

話が前後しましたが、初めて番組を担当したのは入社半年後の1973年10月秋編成でした。「ヤマハ・コッキー・タウン」(日22:00~22:30)という番組で、先輩の今村さんからのバトンタッチでした。

当時ヤマハは「ポピュラーソングコンテスト(ポップコン)」というプロミュージシャンへの登竜門イベントを実施していました。NSP(ニュー・サディスティック・ピンク)、中島みゆき、因幡晃、世良公則&ツイスト、長渕剛、円広志、チャゲ&飛鳥、クリスタルキング、あみんといったアーティストを輩出したコンテストでした。

その情報と楽曲を紹介することと、ポップコンの地区大会の仕切りが目的の番組だったのです。私の仕事は毎週の番組をしゃべることと、県下7会場のポップコン

地区大会から東海大会までの8つのステージMC(司会)でした。

ラジオ番組進行の勉強はもちろんですが、ステージMCの基本はこの番組で鍛えられたと言っても過言ではありません。前述した8つのステージが、年2回ずつあるのです。そして、登場バンドの演奏がおわるごとにインタビューしなくてはならない、休みのない司会です。バンドによってセッティングが変わるため、そのつなぎをする必要があったからです。ゲスト演奏も含めて、毎回3時間半から4時間のステージ。足の感覚がおかしくなり、全身の疲れも半端ではありませんでした。

《長老カモメの伝説》

ポップコンの司会はコッキータウンの担当終了後も続きました。後述する「1400デンリクアワー」担当時、1978年3月5日に開催された「第15回ポピュラーソングコンテスト東海大会」では司会をしながら唄も歌うという役割が求められました。その時歌ったエントリー曲が「長老カモメの伝説」でした。^{くろやなぎしの}作曲は畔柳志乃さん。^{すずきかずのぶ}作詞は鈴木和信さん。当時のパンフレットを見ると、畔柳さんはこの時高校1年で、中学2年の時に作った曲だそうです。

「海鳥たちの楽園は水平線を少しだけ飛び越えたところにある。」という長老カモメの言葉を信じて、群れから離れ水平線を目指した若いアホウドリ。飛べども飛べども水平線は空の果て。結局、翼疲れて海に落ちて死んでしまうという曲。切ない中にも、夢を追い続けることの大切さは忘れたくないという作品でした。

会場は浜松市民会館。朝からリハーサルがあるため、会場近くのホテルに前泊しました。同室になったスタッフが「寝言で長老カモメを歌っていましたよ。」と笑いながら言います。そう言えば妻も同じことを言っていたのを思い出しました。そのくらい緊張していたのです。

本番は2曲程前から司会をサブ司会でいらした方にお任せしてスタンバイ。本当に心臓が飛び出そうでした。いよいよ自分の番。ステージには椅子が一脚。1本のスポットが照らします。司会でスポットを浴びるのとは大違いです。歌い始めました。緊張で音程が定まりません。震える声で、何とか歌いきりました。頭の中は真っ白で、よく歌詞を間違えなかつたなと思います。

この東海大会でグランプリを取ると、全国大会である「つま恋本選会」に出場出来る権利と、非売品ながらライブ音源をレコードにするという特典が与えられました。「長老カモメの伝説」は審査員特別賞になりました。レコードには、グラン

プリと準グランプリの2曲だけが入る予定でしたが、もう1曲、観客の皆さんのお望の多い曲を収録しようと言うことになりました。どういう選定方法だったかは忘れてしましましたが、この曲が選ばれ、レコードに入ることになったのです。ライブ音源ですからその時の自分の様子がありありと分かります。声が震えているのが、その時の緊張を良く表していました。放送に乗せるのが恥ずかしかったのを覚えています。

やはり後述する「ケッタウェイズ」でステージに上がる数ヶ月前でした。

《馬鹿野郎事件》

コッキータウンはバトンタッチした時、ポエムを読みながら曲をかけていく静かな番組でした。FM東京「ジェットストリーム」の城達也さんのナレーションが大好きでしたから、抵抗なく気持ちよくしゃべっていました。

ある日、一人の若者が詩というよりは気持ちの発露のような作品を送ってきました。それまで意見を挟むことはなかったんですが、ちょっとどうかな？と思うような内容だったので、一言だけ意見を述べてみました。「君の考えは分からぬでもないが、ぼくはこう思う。」って。

すると翌週、彼は「司会者が意見するとは何だ。承服できない。」と書いてきました。私は「意見したわけじゃない。考え方にもいろいろある、ということが言いたかったんだよ。」と返しました。

その翌週、彼は「馬鹿野郎！」と書いてきました。驚きましたが、そこまで書くからには相当な覚悟を持って送ってきたのだろうからと思い、「何回も言うけど人の数だけ考え方はあるもんだ。ぼくも敢えて言わせてもらうが、聴く耳を持たない君こそ馬鹿野郎だ。」と返しました。

その翌週つまり4週目、ハガキや手紙が百数十通も届きました。それまではせいぜい30通来るかどうかだったのにです。この3週間、彼の発言と私の反応に對して、黙って聴いていたリスナーが思いの丈をぶつけた文面の数々でした。

この思いがけない反応に、曲を削ってできる限り紹介しました。これを境にハガキの量がふくれ上がっていきました。と同時に番組の性格も変わっていきました。相談の場であり、議論の場でもあるようになっていったのです。

よし、この際腹を決めてしゃべろう。私もディレクターも決心しました。真剣に話ををして、返ってきたハガキにも真剣に答える。コッキータウンは、その後のアナウンサーとしての姿勢の基本を作ってくれました。

《スケバングループ》

コッキータウンに女子中学生から封書が届きました。「高校生のスケバングループに入っているのだけれど、だんだん嫌気がさしてきた。自分は何をしているのだろう。このままでいたらどうなるんだろう。不安に駆られてならない。でも抜けたい、と言ったら何をされるか分からぬ。怖い。」

とりあえず番組で読みました。いざとなったらグループのリーダーと話し合いをするしかないかもしれない、とも思いました。一緒に番組を作ってきた堀西睦夫・ほりにしむつお大塩正直ディレクターも同意見でした。「腹をくくって番組作りしよう」と従前話し合ってきていたからです。「話をする必要が生じた時には3人で行く」。ちょっぴり安心しました。

さまざまな反響がありました。なかなかこれだという解決策のないまま2週間が経ちました。3週目に、元番長だったという男性から「自分が話をしてやるから、連絡先を教えて欲しい。」という内容のハガキが届きました。番組内で紹介しながらも「ただ、何かあっても困るので教えるわけにはいかない。」と話しました。

4週目。あまり時間をかけても彼女のためにならない、とグループとの話し合いに臨む方向に考えが固まってきた。と、そこへ当の女子中学生から連絡が入りました。事態が急変したというのです。時間を決めて電話をしてもらいました。

「呼び出しがかかっていたんです。さつき、その集まる場所に行って…。

たいして話はしなかったんだけど、一応手を切らしてくれました。みんなで相談したらしいんですけど、一枚の紙があって、それにみんなの名前が書いてあって、さらに一つマスがあって…。<やめても良い>ということを証明するために親指に針を刺して血を出して…いわゆる血判になるんだけど…。

手を切ることが出来ました。」

なんと血判状を作ったというのです。

「彼らはこの番組を聴いてたの？」

「聴いてたらしいんです。次に行った時、それらしい話をしてそれっきり連絡無しだったから…。」

そのスケバングループと呼ばれている女の子たちの心の内を垣間見たような気がしました。

自分もそうであったように、若者たちは親や先生には恥ずかしかったり照れく

さかつたりして言えないことを、ラジオにぶつけてくる。中途半端なことを言ってはいけない。ちょっとした一言が大きな波紋を呼ぶかもしれない。考え無しの一言に何人も傷つく恐れがある。

改めてラジオの力を感じました。そして、そこで働くことに大いに感謝したのです。

《シャナナしずおか》

コッキータウンが始まって半年。1974年4月に、東芝一社提供の土曜夜の若者向け生放送番組「シャナナしずおか」が始まりました。土曜夜10時から50分の生放送で、制作担当は、「コッキータウン」と同じ堀西ディレクターと大塩ディレクター。洋楽・邦楽ベストテン、映画紹介を始め、後述する「ギャラントメン」、「シャナナ・ドントコイ」といったコーナーなど盛りだくさんの内容でした。

《ギャラントメン》

事前収録のチャレンジものの結果をクイズにし、電話で解答を受けるコーナーでした。例えば、

- ・プールで25mを手だけで平泳ぎし、何分何秒かかるか。足だけでは？
- ・絶叫マシンに乗りながら番組タイトルを何回叫べるか。
- ・自動車に何人乗り込めるか…など。

くだらないと言えば、実にくだらないコーナーでした。

「自動車に何人」は、番組リスナーの中高生に呼びかけて静岡市のメインストリート呉服町商店街にバンタイプの社有車を持ち込んで収録。集まった人たちには番組グッズや局のシールなどを配り、「結果は放送が終わるまで内緒。自ら解答参加はしない。」ことを約束してもらいました。

結果、約束破りは出なかったと思います。電話解答でズバリは出ませんでしたので。

何かに挑戦する場合、客観的な証明というのが必要になってきます。特にラジオでは明らかに音で分かるものを除けば、非常に重要です。そこで「ジャッジ」という名の判定員を置こうということになりました。番組ディレクターがそのまま担当しても良いわけですが、堀西ディレクターが「我々よりも適任者がいる」と白羽の矢を立てたのが中野 泉なかの いずみさんでした。中野さんは当時、テレビ番組制作会社のディレクターとしてSBSとの付き合いがありました。懇意だった堀西ディレクター

がそのキャラクターと、しっかりしたしゃべりに惚れ込んだわけです。

ギャラントメンはクイズの回答を電話で受けて、正解者にはおめでとう電話をかけていましたから、電話担当が必要でした。5台ありましたので5人。中野さんは電話受けメンバーのチーフにもなってもらいました。

中野さんはその後の番組にも参加協力。電話受けの若者たちと共に、私の応援隊K J S (カトンボーズ・ジュニア・スペシャル)というキャラクターのリーダーとして親しまれ、番組を盛り上げてくださいました。細身の私が一時期「カトンボ」と呼ばれたことからのネーミングでした。中野さんは自作の歌も発表し、私たちが後に結成するバンド「ケッタウェイズ」との共演も果たしています。

ギャラントメンは、その後も私の番組の核となっていました。

「コッキータウン」「シャナナしずおか」とSBSでの私の基礎を築いてくださった堀西ディレクターは私の入社からおよそ8年後、33才で亡くなりました。癌でした。あまりにも若すぎました…。

《時間が止まった》

日本ランドスキー場からの生放送では、500mほどのコースにポールを立て、それをくぐりながら、上から下まで滑って何秒かかるか？ というギャラントメン・クイズにしました。

いわゆる回転競技の簡易版を問題にしたわけです。生放送ですから秒まで正確な時計が必要です。しかし当時はまだ電波時計などというものはなく、ディレクターがスタジオと連絡を取りながら正確な時間を把握していました。私はニュース用のストップウォッチをポケットに入れて、都度出しては実時間を確認していました。

いよいよギャラントメン、挑戦コーナーです。ラジオですから音が命です。しかもスキーで滑っているシーンがクイズになっているですから、滑走音が効果的に聴こえなくてはいけません。事前にテストをしてみたら、全体の音と声は胸の中心につけたマイクが拾っていましたが、肝心の雪面を滑走するスキー音は、マイクを足首あたりにセットしないと、クリアに音がとれないことも分かりました。

夜になり温度が下がって、雪面も固くしまっています。思ったよりスピードが出るのは必至です。ポールをくぐりきれずに不通過となつてしまったら、前提が崩れてしまうのですから、クイズが成立しないことになります。そんなに斜度のあるゲレンデではありませんでしたが本当に緊張しました。

無事コーナーを乗り切り、番組自体の終了時間が迫ってきた頃、現在時間の確認のためにポケットからストップウォッチを取り出しました。そして見た時、驚愕しました。止まっていました。凍っていたのです。

焦りました。スタジオには同期の山田清子アナがいますが、自分自身も時間が分かっていなければとんでもないエンディングになってしまふかもしれません。どうしよう…。しばらく待っていればディレクターが何らかの手を打ってくれるはずです。でも、とにかく残り時間を把握したかった私は放送の中で叫びました。

「業務連絡！ キーボー、今何時何分何秒？」

キーボーとは、山田アナの愛称でした。名前が「きよこ」だったからです。そのあとは、ひたすらディレクターの時間指示に頼りながらの放送になりました。

腕時計ならば直接身につけているので凍ることはありません。しかし当時の主流の腕時計は秒単位の放送には使えませんでした。一ヶ月誤差±15秒というクオーツ腕時計は、一般には出始めたばかり。まだまだ高嶺の花だったのです。

《アクロバット飛行に挑戦》

シャナナしずおかの終了直前の1976年3月、ギャラントメンは制作費を奮発してアクロバット飛行に挑戦しました。清水の三保にある飛行場で、零戦パイロットでいらした航空免許取得指導教官の方の操縦での体験でした。

高度3000mまで上昇。眼下は駿河湾です。

「では行きますよ。」

の声がしたかと思うと、いきなり何か変な態勢になりました。

「現在、背面飛行をしています。」

すごいスピードで飛んでいるので、上下さかさまになった感があまりないので。でも落ち着いてみると腰は浮き、頭の上は確かに海です。4点シートベルトのありがたさが分かりました。

「では、次は宙返りです。」

上下正しい姿勢に戻ったかと思うと急上昇し始めました。持っているマイクがグーッと重くなってきました。顔の皮膚も後頭部の方へ引っ張られる感じです。と、次の瞬間マイクの重さが無くなりました。腰も浮きました。背面飛行とは違う感覚です。

「宙返りは、上昇中に3Gかかります。」

地上で普段我々が受けている重力が1G。その3倍だというのです。

「そのマイクが500gだとすると、最高で1.5kgになるということです。そして、頂点以降の後半部分では無重力に近い状態になります。」

なるほど。で、こんな質問もしてみました。

「これはプロペラ機ですが、もしプロペラが止まってしまったらどうするんですか？」

「こうですか？」

そう言うと教官はエンジンのスイッチを切ったのです！ パタンパタンパタ。プロペラが回転をやめました。風切り音しかしません。滑空状態です。

「あっ、あの、飛び続けてはいますね。」

「そう言えばそうですが、本当は姿勢を保ったまま落ちているというのが正確だと思います。」

「万が一、エンジンがかからなかつたらどうします？」

「大丈夫。安全に着陸できると思います。そういう訓練をしてきましたから。」
シューといふ風切り音を除くと静かです。

「も、もうそろそろエンジンをかけても良いのでは…。」

教官は笑いながら、エンジンキーを回しました。…かかりました。良かった。

「よく聞く〈きりもみ〉というのは、危険なんでしょうね？」

「これですか？」

「え…一っ！！！」

機首がいきなり真下を向き、機体全体がかなりの速度で回転を始めました。清水港がぐるぐる回っています。でも教官への信頼が増してたせいでしょうか、不安感はほとんどありませんでした。教官が操縦桿をグッと引いたかと思うと、当然のようにすぐ正常な水平飛行に戻ったのです。

「四つ葉のクローバーいきます。」

「はい？」

機体が急上昇を始めました。

「四つ葉のクローバーって？」

「空に四つ葉のクローバーを描きます。」

「え…一っ！！！」

つまり4連続宙返りということだったのです。3G→無重力を4回繰り返すわけです。終わって水平飛行に戻っても、感覚はバラバラです。コメントも、クレイジ

一・キヤツではありませんが「ハラホロヒレハレ」でした。

すべてのメニューが終わり、30分後に無事着陸。会社に戻り、スタジオで録音テープを確認再生しました。

「とつ、飛んでる！」

テープ自体が飛ぶわけはありません。録音されていた音が飛んでいた、つまり飛び飛び音の状態になっていたということです。何故だ？ 堀西ディレクターと首をひねりました。

録音機材は、通称デンスケと呼ばれるソニー製の業務用モノラル録音機でした。どこの放送局でも使っている標準機でした。15分テープ以下しかかけられないで、空の上で一回テープ交換をしたのだけれどおかしなことはなかったはず。

じつとデンスケをみているうちに…、分かったのです。

「テープ押さえがないのが原因だ！」

テープが録音ヘッドをこする時に録音されるのが基本です。録音ヘッドをこすらなければ録音はできません。すなわちテープが録音ヘッドから浮いてはいけないのです。そのためテープの進行方向とは逆方向にテンションが少しあります。普段ならそれで十分なのですが、問題は宙返りを始めとするアクロバット飛行そのものでした。3G→無重力の繰り返しなどテープがヘッドから浮く要素が一杯だったのです。

どうしようか。このままでは放送できない。教官に電話をかけて事情を説明しました。「明日なら、もう一度できますよ。」との回答。でもデンスケは使えない…。

「そうだ！ カセットレコーダーを使おう。カセットテープならフェルトのテープ押さえが、カセット自身についている。」

カセットテープには、もう一つのメリットがありました。30分テープでも60分テープでも、それ以上のものもありました。上空でテープ交換する必要はないのです。

こうして翌日、もう一度アクロバット飛行リポートをしました。何をギャラントメン・クイズにしたのかは残念ながら覚えていません。

《ギャラントメンについてもう少し》

この挑戦シリーズ「ギャラントメン」は後に続くデンリクアワー・ぶっちゃけ・フリステ各番組の中で生き続け、パート5まで放送されました。記録のミスでパート3と

銘打ったコーナーを2回やってしまったため、パート4が存在しないというシリーズになってしまいました。

いろんな挑戦がありました。

- ・18階建ての静岡放送ビルの1階から最上階の屋上出口まで階段を駆け上がり、何分何秒かかるか。
- ・海水浴場の砂浜で直径50cm、深さ膝頭の穴掘りに何分何秒かかるか。
- ・洗面所で顔つけ。何秒我慢できるか。タイムキーパー荻島アナ。
- ・未経験者國本がサックスを、「ソ」を中心に上下何音まで吹けるか。
- ・梨の皮をむき、芯だけ残して食べきるまでのタイム…などなど。

本当にくだらない挑戦でした。でも何より、リスナーが自宅から参加できるコーナーとして成立していたのです。それぞれは真剣に挑戦した内容を放送していました。

今ではちょっと出来ないのが「逆立ち電話シリーズ」です。クイズに正解、もしくは正解に近い解答をした人と電話で話すわけですが、ただ話すだけでは面白くないと、お互い逆立ちしながら話をするという企画でした。

ラジオで逆立ちしているかどうかをどう確認するか、という話が出ましたが、やってみれば分かること。明らかに声が変わります。ごまかしようがありません。これが結構つらい。頭に血が上ってしまいますので、今やったら血管が切れてしまいかねません(笑)。もちろん無理はしませんでした。勝ち負けにはしなかったのです。正解プレゼントを送る条件にしただけでした。私だけじゃなく、若いリスナーも何があるか分かりませんから、絶対に無理をしないというのが鉄則でした。

最大の問題が受話器をどうするか、でした。体操選手ではないですから、自分では持てません。仕方ありません。私はスタッフの手を借りました。では、リスナーはどうしたか。結果は、親兄弟の協力を仰いでいました。当然ですね。手伝って下さった家族の皆さんにも電話に出でもらい、楽しいコーナーになったことを思い出します。当時は携帯電話など無く、電話もコードレスではなく、置いてあるのは玄関。これが一般的でした。私はスタジオでスタッフに受話器を耳に当ててもらいながら逆立ちし、リスナーは玄関で家族に受話器を耳に当ててもらいながら逆立ちしてしゃべっている姿。想像するだけでほのぼのしてきませんか。

《シャナナ・ドントコイ》

亡くなられましたが、清水の郷土史の大家で江戸時代の庶民具の収集家井出孝さんが、人生の師「ドクター井出」として出演され若者たちの相談に答えました。放送日の夕方18:00～19:00の一時間電話を解放し、スタジオで私と井出さんが応対しました。その抜粋を放送するというもので、恋の悩み、身体の悩み、学校・友達の悩み、家庭の悩みなどたくさんきました。

「天然パーマを、パーマをかけて直してこいと言われた」

「先生のアレダメ！コレダメ！が我慢できない。いっそコエダメにでも放り込んでやりたい。」など。

ある時、中学3年生の男子生徒からかかってきました。最初の応対は私です。

「あのう、お尻に毛が生えてきたのですが異常ですか？」

「えっ？お尻のどの辺？」

「だから周りです。」

「お尻の周り？お尻のほっぺた？」

「いや、だから肛門です。」

「…。」

「異常ですか？」

元気がありません。声は深刻です。ドクター井出に投げかけます。

「井出先生、どう答えましょう？」

「いやあ、大変な質問だね。」

「井出先生は、どうですか？肛門の周り。」

「逆にクニさんはどうなの？」

当時はクニさんとか、クニちゃんなどと呼ばれていました。「くんちゃん」という愛称はこの数年後からです。

「こういう問題は年長者から答えるものではないでしょうか。」

「そんなことはない。若い人から率先して答えるものだよ。」

少し押し問答した後、ドクター井出が

「しようがないな。ぼくは…、生えているよ。クニさんは？」

「えっ？あの…、ぼくも生えてます。」

「どうやって確かめた？」

「鏡で、…何を言わせるんですか！」

そんなやりとりの後、

「ねえ君、異常か異常でないかは分からないが、少なくともぼくと井出先生と

君の3人は肛門の周りに毛が生えている。ぼくらは仲間だ。」
すると少年は

「本当ですか！　ありがとう！」
と、打って変わった明るい声で電話を切りました。

後で男性スタッフ全員も仲間だったことが判明したのは言うまでもありません。
もっとも女性スタッフはいませんでしたが。

《ジョン・ウェイン》

小さい頃「ジョン・ウェイン西部劇」というテレビシリーズがありました。本当に大好きで、ある時「きょうは、ジョン・ウェイン＜にしぶげき＞があるよ！」と叫んで笑われたことが忘れられません。調べたら、ジョン・ウェインが有名になる前の作品13本を1957年に「ジョン・ウェイン西部劇」というタイトルで放映したということです。小学校低学年でテレビが家庭に入った頃ですから影響は強烈です。ジョン・ウェインというスターの顔は目の奥に焼き付いていました。

そのジョン・ウェインが映画「マック Q」のキャンペーンのため来日するという情報が映画配給会社から入り、共同記者会見の案内が送られてきました。映画紹介のコーナーがあったためです。小さい頃から映像で親しんできたあのジョン・ウェインを直接見ることのできる絶好のチャンスです。ディレクターに「行きたい」と伝えました。

ディレクターが上司と掛け合った結果、「行っても良いがディレクターは別の仕事について行けない。一人でも良ければ行ってこい。単独インタビューでもとれれば最高だけだな。」とのこと。行きたい一心だった私は大喜びで、デンスケと15分テープ6本を持ち単身東京へ向かいました。

場所はたしか帝国ホテルだったような気がします。かなり早く着いた私は記者会見用マイクを立てようとしましたが、会見テーブルは結構横長でどこにジョン・ウェインが座るのかが分かりません。他の取材陣もまだいません。要領の全く分かっていない私はとりあえず真ん中に設置しました。

気が遠くなるほど待って、やっとジョン・ウェイン本人が入ってきました。「本物だ！」心の中で叫んだ私。次の瞬間「ず、ずれてる！」マイクの位置が微妙に違っていたのです。始まろうとする中、位置を直そうとテーブルにじり寄る私…。妙だったでしょうね。

小一時間ほどの会見をテープを掛け替えながら録音。頭の中では、どうやつ

て単独インタビューをとろうかと思案していました。「よし、会見が終わりそうになったらテーブルのマイクを回収して短いコードでデンスケに繋ぎ、会見場を出るジョン・ウェインをつかまえてインタビューしよう。」自分の中で結論を出したところでインタビューの中身に思いを馳せた瞬間、通訳がいないことに初めて不安を感じました。今思えば、英語がしゃべれるわけでもないのに無謀でした。

でももう後には引けません。会見が終わりジョン・ウェインが会場を出ます。予定通りコードを繋ぎ換えた私はデンスケを肩に担いで突進していました。扉を出たところは隣の部屋でした。驚いたことにそこにもかなりの人がいました。ジョン・ウェインが囮まれています。さすがジョン・ウェイン、デカイ！周りから頭一つ出ています。見失うわけがない。「とにかくそばまで行かなくちゃ！」

人をかき分けかき分け一所懸命進みます。

「ちょっとちょっと、どこの人？」

「静岡放送です。」

「何なの？」

「あの、インタビューを…。」

「アポとつてあんの？」

「あ、ぼ？」

「何言ってんだよ。アポとつてなきやダメだよ。」

「で、でも。インタビューがとりたいんです。」

「バッカじゃないの！」

ルールを知らない若造の突進は周りの大ひんしゅくを買いました。これも今思えば当然です。何も分からぬまま飛び込んでいった私が悪かったわけです。配給会社と連絡を取って、単独インタビューができるかどうか、できるとしたら通訳はどうするか、時間は、などなど事前に確認することを何もしていなかったのです。

未熟な私にも事態が飲み込めてきました。だめかと思った瞬間、頭の上に声が飛んできました。英語でした。周りが静かになりました。「ジョンがそのボーイが何を言っているのかを聞きたいそうです。」と通訳の方。見たら、ジョン・ウェインが手招きをしています。主役がそう言うのですから周囲も道を開けました。

「どうしたのですか？」と通訳。訳を話し、一言でも良いので静岡のファンにメッセージがいただければ嬉しいと伝えました。ジョンが「何という名前の都市？」というようなことを通訳の方に聞いています。「しづおか」と通訳。するとジョンがマ

イクを自分に向けるとジェスチャーで示します。急いで向けると、「今回は時間がないので行けませんが、次回来日する時には必ず静岡を訪れたいと思っています。」という内容のコメントをしゃべってくれました。「サンキュー！サンキュー！」しか言えない私。

ジョンは通訳にさらに何か言っています。通訳が
「映画資料に同封されている宣材写真を出せと言っていますよ。」
訳が分からぬまま、資料封筒の中から写真を出しました。すると中の1枚を
選び、胸ポケットからペンを取り出してサラサラっと何か書いたのです。

「サインをプレゼントします、と言っています。」
ジョンを見たら、にっこり笑って何か言っています。「ボーイ」と「プレゼント」の2語は状況から分かりました。またまた「サンキュー！サンキュー！」しか言えない私。ジョンが手を差し出しました。思わずその手を握りました。グローブのような大きい手、ジョンの「グッバイ！」が最後の言葉でした。

その場から離れて、その写真を眺めました。確かに「John Wayne」と書いてあるようです。帰りの新幹線の車内でもう一度眺めました。何であろうと私の目の前でジョン・ウェイン本人が書いてくれたものです。短いけど長かったあの時間を振り返ると自然と涙が出てきました。初老の外人男性の写真を見ながら泣いている若者。知らない方が見たら変だったでしょうね。

ジョンは、見るからに経験不足の若造が周りの人たちに文句を言われて立ち往生し、途方に暮れている姿が不憫だったのでしょう。周りより頭一つ高い分、状況がしっかり見えたのだと思います。

政治的にはタカ派と呼ばれたジョン・ウェイン、大スターなのに傲慢さも頑固さも感じさせない優しい素顔でした。ジョンの手は、温かくてサラサラしていました。

1974年、入社2年目のことでした。(「マックQ」は直後の6月29日公開)

《サイン》

サインと言えば、自分で求めたサインは1つだけです。1978年12月3日、会社にお見えになった赤塚不二夫さんでした。目の前で「バカボンのパパ」が描かれしていくことに感動しました。書き方は本当に丁寧で、ボールペンの試し書きみたいな誰のサインか分からないようなものではなく、ちゃんと「赤塚不二夫」と

読めるサインでした。

ジョン・ウェインと赤塚不二夫さんのサインは私の宝物になりました。

ジョン・ウェインは1979年、赤塚不二夫さんは2008年、共に72才で亡くなりました。

《第1回アノンシスト賞最優秀賞受賞》

18時台のニュース番組「SBSテレビ夕刊」の中に60秒CMがありました。「S&B」のカレーやシチューのコマーシャルでした。シャナナしづおか時代に並行して担当しました。^{いけたにまさこ}池谷正子アナウンサーとのコンビで、真面目な中にもオチャメな表現を入れたCMを目指しました。ただ枠がニュース番組でしたから限度はありました。

その年、JNN・JRN系列のアナウンサー対象の「アノンシスト賞」が創設されました。「アナウンサー」を意味するエスペラントが語源となっています。番組部門、CM部門などに分けて審査し、表彰するもので現在も続いている。

神村さんが、「國本くん、あのCMを提出するからね。」と言われましたが、その賞自体を知らなかつた私は「ありがとうございます。」と言って忘れていました。

1976年2月、まさにその「S&B」のCM収録をしていた日でした。何本かを一日で録画します。何本目かの収録用の着替えをしていた時、神村さんが化粧室に入ってきました。

「國本くん、おめでとう！」

「えっ？ 何ですか？」

「S&BのCMが賞を取ったよ。」

「えっ？ 何の賞ですか？」

「第1回アノンシスト賞だよ。しかも最優秀賞だ！ 第1位だよ！」

入社以来、初めていただいた賞。そののちの精神的な大きな支えとなりました。

その神村さんの媒妁で、翌月3月7日に結婚しました。

《RBC琉球放送》

結婚が決まった時、アナウンス学院同期で沖縄のRBC琉球放送に入社した
^{はたえたかふみ}波多江孝文アナに報告電話をしました。すると彼が、「新婚旅行はどこにするんだい？」と聞いてきました。その時は、新婚旅行自体考えてもいなかったので

「まだ何にも。」と答えました。すると「沖縄にしなよ。そして沖縄で飲もう！」との誘い。結局、そうなりました。

那覇空港に到着すると波多江アナの後輩、小山康昭アナが空港まで出迎えてくれていました。波多江アナのプランは、那覇→石垣島(含む竹富島)→ムーンビーチ→那覇でした。

《八重山で二番目の味》

那覇に一泊し、石垣島に向かいました。夕食は現地を味わうのが鉄則ですから、ホテルに予約はしていません。観光ガイドに頼るのもやめました。どうしたか？

メインストリートに出て、地元と思われる方に聞いてみたのです。

「あの、海の幸を堪能したいのですが、どのお店が良いでしょうか？」

一目で観光客と分かる私たち。地元の人たちは親切に答えてくれます。合計5の方に伺いましたが、何と全員同じ答えでした。「やっこ」という店でした。

道すがら瀟洒なたずまいの磯料理店を見かけたので、通りがかりの中年男性に、

「石垣島の海の幸を味わいたいのですが、ここのお店はどうでしょうか？」

「見てくればっかりだからやめなさい。この先にある〈やっこ〉に行くといい。」

やっぱりそうか。もう迷う余地はないな、と〈やっこ〉に入りました。カウンターに座るとすぐ、自分たちは静岡から新婚旅行で来たということと、この店を選んだいきさつを話しました。板さんは笑って、

「いやいや、ありがとう。でもうちは一番じゃないよ。一番は何と言ってもおふくろの味さ。」

ニコニコしながらおっしゃいました。

料理は、すべてお任せしました。すると出てくるわ出てくるわ、新鮮な磯料理の数々が…。大きくてカラフルなゴシキエビを見た時は本当に驚きました。ただゆでると赤くなり、イセエビと変わりなくなります。板さんが、

「足の先まで食べてやってね。」

と足の身の出し方も教えてくれて、本当に堪能しました。そろそろ終わりかと思ったところで、

「最後はウナ重だからね。」

「えーっ！ 僕たち静岡から来たんですよ。うなぎではそこそこ有名だと思っ

ていますし、それにもうお腹いっぱいに入りそうにありません。」

「静岡が産地なのは知ってるよ。でも石垣のうなぎもおいしいよ。まあ、食べてみて。」

もう入らないと言っていた私たちでしたが、気が付くとペロリと平らげていました。本当においしいうなぎ、というかタレといい焼きといい素晴らしい調理でした。道行く地元の皆さんにお聞きして、本当に正解だったと思いました。代金も驚くほど安価だったことも忘れられません。

2日目は焼き肉を食べたり、同じように町の人に聞くとやはり異口同音に「東京亭」。「とうきょうてい」？ 何で石垣島で？ …結果、美味しくいただきました、ロース9人前。最後に出て下さったのアイスのさらに美味しいかったこと…。今から35年前のことです。でも最近、石垣島在住の方に伺つたらまだあるそうで、今でも大人気の店だそうです。何か嬉しい。で、「やっこ」はあるのでしょうか？

《シャナナ静岡に入り中》

沖縄本島に戻り、プライベートビーチを持つホテルムーンビーチに到着。一足先に結婚していた波多江アナは、我々の隣の部屋を夫婦でリザーブしていました。彼の素敵な「はからい」でした。友との久しぶりの語らいで夜が更けていったのは言うまでもありません。

1976年3月13日（土）、翌日は帰静する日。同時に「シャナナ静岡」の放送日です。休みをとっていましたが、生放送スタジオに電話を入れる約束になっていました。代わりに放送を担当してくれたのは、日本ランドスキー場からの生放送時と同じ山田アナです。

電話はRBC琉球放送のスタジオから入れました。

《ご存知！深夜大学》

当時、RBCラジオには土曜深夜「ご存知！深夜大学」という沖縄の中高生に絶大な人気を誇った名物番組がありました。担当は波多江アナ、小山アナ、柳卓アナの若手トリオ。個性豊かな3人の織りなす番組です。そう、那覇空港に迎えに来てくれた小山アナは、その一人でした。

放送はシャナナと同じ土曜日。RBCのスタジオを見学した後、そこからシャナナへ電話入り中することになったのです。3人と番組スタッフが

「それが終わったら、近くの店で飲みましょう！」

との提案。

「でも、深夜大学は生放送でしょ？」

「そうですよ。」

「3人いるんだから交代で放送すればいいし、どうしても3人必要な部分は録音しちゃいましょう。そうだ！國本さんも出演しちゃえばいい！」

本当に良き時代でした。その frankさと自由さ大胆さが、沖縄の中高生の圧倒的な支持を得た原動力だったに違いありません。

何かあつたら駆け付けられるよう、RBCのすぐそばの店でラジオを聴きながらの深夜の食事会＆飲み会になりました。本当に愉快な3人とスタッフでした。

奇しくもこの本を執筆している年(2011年)の5月「復活、ご存知！深夜大学」の放送があり、沖縄のその世代に大きな話題を呼んだそうです。3人が久々に集まつたのは言うまでもありません。

波多江アナは翌年、ニッポン放送の「飛び出せ！全国DJ諸君」という番組でグランプリを獲得し、ニッポン放送に移籍しました。

《お昼のチャッキリ大放送》

この3月一杯で「シャナナしずおか」が終了しました。結婚したのだから、大人向けの番組も良いのではと、4月から藤原弘子アナとのコンビで午後ワイド「お昼のチャッキリ大放送」(12:30～16:00)担当となりました。

この番組で一番の思い出は、富士登山生中継です。1976年6月30日、山開きの前日に登りながら生中継しました。最初は、五合目あたりからの登山かと思っていたましたが、登ったことのない私には判断のしようもなく、ただただスタッフの放送登山計画が出来るのを待っていました。

その結果、3時間30分の放送時間内に山頂に着き、さらに山頂からのリポートをするには相当上からスタートしなければ無理という結論に達したのです。山頂では、リスナーの「富士山へのお願ひ」を読み上げるという役割も担っていました。放送との兼ね合いを考えると、スタート地点は「九合五勺」あたりではなかろうかという結論になりました。では「九合五勺」まではどう行くか？ 答えはブルドーザー。ブルドーザーに乗り、先端にあるブレード部分に機材を乗せて運んでもらいました。

《試練の富士登山生中継》

富士登山で怖いものの一つに「高山病」があります。3000m以上の山に登った場合、酸素不足から頭痛や吐き気などの症状を引き起こすというものです。回避するためには、五合目あたりから自分の足でゆっくり登って、徐々に身体を慣らしていくことが大事だそうです。従って、いきなり九合五勺から登るというのは無謀なことだったのです。そんなことは知りませんでした。

当日は曇り。ブルドーザーで運ばれていくと霧で周りは何も見えません。植物も生えていないので、道の状況にも何も変化がありません。荒涼とした石ころと岩があるだけです。ただひたすらブルドーザー専用の道を進んでいきました。気温が下がっていくのが分かります。空気もだんだん薄くなっていくのを感じ始めていました。やがて、ブルは停止し降ろされました。今までの道と何も変わらず荒涼とした場所です。「九合五勺」とはどこにも書いてありません。相変わらず霧で何も見えません。こんなに描写するものない中継はありませんでした。

でも放送時間はやってきました。

「霧で何も見えないんですよ。草も生えていませんしね。見えるのは石ころと岩だけで、何とも殺風景です。」

それ以上描写するものがないので、スタジオの藤原アナからリスナーの方のメッセージを紹介してもらっては、それに反応していくという放送になっていきました。そして次第に酸素不足を感じ始めました。

「クニちゃん、何かしゃべりがもたついていますよ。もうちょっとシャキッと！」
藤原アナが呼びかけてきます。

「そんなこと…言ったって。…いつものように…しゃべれないんだよ。」

「どんどん、しゃべる速度が落ちてる感じ。」

「あん…た、今…度…ここから…しゃべって…み！」

どのくらい経ったのか覚えてませんが、いきなり目の前が開けた！と思ったところが山頂のお釜の縁でした。つらかっただけに感動しました。

山頂に着いてしばらくすると霧が徐々に薄れてくれました。もう歩いていませんのでしゃべりも楽になっています。下の景色がうっすらと見えてきました。

「三島方面だと思います！思ったより近くに見える！」

「クニちゃん、…………。」

「えっ？ 良く聞こえない！」

山頂の視界が良くなるのと反比例するように、スタジオとやりとりがしにくくなっています。スタジオには私の声はしっかりと届いているのですが、スタジオの藤

原アナの声が聞こえたり聞こえなかつたりで不安定なのです。原因はすぐ分かりました。私の声は専用回線でスタジオに届きます。しかし私は放送電波 자체をモニターラジオで受けてイヤホンで聞きながらしゃべっていました。富士山山頂はその高さから、遠くの電波も届いているのです。それにはSBSラジオの周波数と同じものもあります。同じ周波数があれば打ち消し合って聞こえなくなります。北海道のHBCラジオ釧路放送局が1400kHzで同じでしたから、多分干渉し合つたのだと思います。モニターラジオの微妙な角度で聞こえたり聞こえなかつたりして、非常に苦労しました。

SBSラジオの周波数が1404kHzになるのはこの2年後、1978年のことです。HBCラジオ釧路放送局も同時に1404kHzになりました。

《高山病》

同行したのは米田 寛よねだひろし、小松正治こまつしょうじの両ディレクター、そしてのちに一緒に番組をやり、バンドも組むことになる荻島正己おぎしままさみアナの4人でした。荻島アナは翌朝の全国向けのテレビ中継担当として登つたのです。

私は山頂に着いて歩かなくなったら比較的楽になったのですが、3人は頭痛を訴えました。高山病でした。テレビ中継技術担当スタッフは山頂までブルドーザーで一気に登りましたから、もっとつらかったんだろうと思います。

私には高山病の症状は現れませんでした。…何故なのか？
みんなも不思議がりました。そして一つの推論が出たのです。

「しゃべりながら登つたせいではないか？」

生放送ですから苦しかろうが何だろうが、とにかくしゃべらなくてはいけません。山頂までの道のり、私は息苦しい中必死にしゃべっていました。結果、自然と酸素の取り込みがうまくいったのではないか…。

私以外は「九合五勺」付近から黙々と歩いていました。そばで生リポートしているわけですから声を出すのも合間を見ながらの連絡内容伝達だけ。故に3人は酸素の取り込みが効率的に出来なかつたのではないかと…。

本当のところは分かっていません。

《料治直矢さん》

山頂の山小屋で一泊しました。山小屋の布団の数が足りず、2人でひと組利用と言うことになりました。男同士での同衾は皆苦笑いでました。私は偶然一緒に

りょうじなおや
なったTBSの料治直矢キャスターと組むことになりました。当然全員着の身着のままです。最初は遠慮もあり離れて布団を掛けましたが、布団が小さい上に寒い。気温は摂氏2度～4度です。

「少しきつつきましょうか。」

と、どちらからともなく言い、背中をつけあって寝ました。料治さんはTBSのアナウンサーとして出発し、「JNN報道特集」のキャスターとして名を馳せました。決して素行が良いとは言えない容疑者事務所を訪れ、激しく殴られながらも冷静にインタビューをしようとした不屈の記者として今も記憶に残っています。本当に骨のある信念の人でした。尊敬できる人と富士山頂で一つ布団にくるまるなんて、本当に光栄だったと思います。料治さんは、1997年に61才の若さで亡くなりました。こわもての容貌でしたが纖細で優しい方でした。

《天の川と流れ星》

午前2時頃、トイレに行きたくなりました。料治さんを起こさないように、そつと布団を抜け出て、小屋を出ました。現在はどうか知りませんが、その時トイレという設備はありませんでした。当然、屋外での始末です。手も洗えません。持っていた水筒が頼りです。気温はどのくらいだったのでしょう。もう7月1日になったというのに、しんしんと冷える感じでした。同行した米田ディレクターも起きてきました。やはり、トイレです。米田さんが、

「冷えるよね。」

「そうですね。」

「ところでさ、知っている星座が見当たらないんだけど。」

「本当だ。」

そうです。いつも見慣れている有名な「オリオン座」「カシオペア座」「北斗七星」といった星座が見当たりません。

「そうか！ 見えすぎているんですよ。」

「なるほど、ここからだと空気もきれいだから暗い星も明るく見えるんだ！」

そうなんです。頭上には見たことのないような、満天の星空が広がっていました。「星降る夜」という表現がありますが、まさにその通りの夜空です。

「あっ！ 流れ星だ。しまった、願い事を唱えなかつた！」

それは、表現が適切かどうか分かりませんが「杞憂」でした。流れ星は次から次へと落ちていたのです。願い事があるなら、心に言葉を用意しながら待てば

そう間をおかずチャンスは訪れました。たまたま「～流星群」の時期に当たつていたのかもしれません。

笑いながらそんなことを話しているうちに、見える星の数の多さに圧倒されて見落としていた大きなものに気付きました。

「あっ！ 天の川だ！」

そうです。「天の川」が天空を見事に横切っていたのです。

「本当に川みたいですよね。」

「英語でも、ミルキーウェイというくらいで、やっぱり川に近い認識だよね。」

「それにしても、きれいですね。昔は下でもこのくらい見えてたってことですよね。」

「そうです。それが都市部はもちろん、地方でも、天の川自体が見えないという、悲しい現状になっています。」

「それが残念ですね。」

宇宙の計り知れない大きさを感じた時間でした。

《下山》

翌朝は快晴でした。素晴らしい眺望です。まわりの景色すべてを見たくて「お釜」を一周することにしました。お釜の周辺や中にはまだ雪が残っています。三浦雄一郎さんの「富士山大滑降」を思い出しました。本番前の試走にお釜の中を滑っていた映像が浮かんできたのです。

荻島アナの中継に立ち会った後、小松ディレクターと下山することになりました。小松ディレクターはまだ頭が痛いと言っています。下り始めたら目標の五合目がすぐ視界に入りました。目標が見えれば、その方向に一直線です。足下の細かい砂利の上をザラザラと滑るように下りていきました。

速い速い！ あつという間に八合目付近まで到着しました。高山病も気温も八合目が境と聞いてはいましたが、本当に実感しました。小松ディレクターが「頭痛が無くなった」と言い、私も急に気温の上昇を感じたのです。と同時に喉の渇きを覚えました。持ってきていた水筒の栓を開けました。中身は麦茶です。

「冷たい！ 美味しい！」

布に包まれたアルミ製の昔ながらの水筒です。山頂で冷やされたままの温度を保っていたわけです。改めて山頂は寒かったのだと思いました。

そこから五合目までもあつという間でした。快晴の7月1日、下界は夏。さつきま

で気温6度の世界にいたとは信じられません。改めて富士山の高さを実感した
ような気がしました。

《1400デンリクナイター》

その午後ワイド担当時の秋冬、ナイターオフの午後7時台のTBSラジオからのネット番組に静岡県の中高校生からのハガキが非常に多いという事実に注目しました。コッキータウンやシャナナでおなじみのペンネームがTBSから流れています。これは何とかしなきや、という思いに駆られました。

午後ワイドを担当するにはまだ若すぎると思っていた私は、若者向け番組への復帰を願っていました。そのことを口にもし、静岡県の若者の受け皿番組の必要性を必死に説いていました。

そんな時、4月編成でナイターのクッション番組を生放送で作るという話が持ち上がったのです。ラジオのナイター中継と言えば試合終了まで放送する、というのが約束でした。とにかく野球は終了時間が読めません。いつ終わっても成立する5分刻みの録音番組を購入し対応していましたが、生のクッション番組を作ることによって柔軟な対応ができるという理由です。

これはチャンス！と、制作の上司平山豊プロデューサーに若者向け番組の再開を願い出ました。しかし、「新しいクッション番組はあくまでもナイターの続き」という解釈だから、内容もその日のゲームの振り返りを中心に放送する」という答えが返ってきました。タイトルまで「^{いちよんまるまる}1400デンリクナイター」と既に決まっていたのです。がっかりした私に追い打ちをかけるように、午後ワイドからその1400デンリクナイターへの担当替えが告げられました。

これは別番組を企画して通すしかない。すぐに企画書を作成し提出しました。平山さんは私の気持ちを分かっていましたので、

「國本、土曜日の深夜0時からなら1時間枠が取れるがやるか？ ただし、ディレクターは付けられない。一人制作の録音番組なら認めるぞ。」

一も二もなく承諾しました。ただ、またもやタイトルが決められていました。「はばたけヤングアワー」。なんと古くさいタイトル！ せめてもの抵抗で「宵っぱりクニちゃんの夜はこれから」というサブタイトルを付けスタートしました。

すべては本格的な若者番組復活に向けた土台作りでした。

《はばたけヤングアワー》

半年間の録音番組でした。ハガキを読むことはもちろんでしたが、力を入れたのは映画紹介です。シャナナでもやっていたのですが、公開前の試写会などで映画の音を録らしてもらい、それを10～15分に編集してナレーションを付け、オンエアするのです。試写会などの予定がなければ、本編フィルムの到着を待ち早朝開場前、特別に試写してもらい録音しました。映画館の厚意なしでは出来ないことです。本当によく対応して下さったものだと感謝しています。

作業的にも、映画一本のダイジェストを毎週一人で作る訳ですからとてもなく大変でした。一番時間がかかったのは「八甲田山」でした。史実だけに中途半端な作りはできないような気がしたことと、セリフが日本語だったことが大きな理由でした。夕方から翌朝までの13時間の作業になってしまったのです。でも作らないことには番組テープを提出できません。でも、とても良い勉強になりました。基本的な切り貼り、一見繋がりそうもない音を繋ぐ技、逆転再生を使ったタイミングどり、…etc. テープ編集にかけては様々な工夫をこらしました。TBSでのアルバイト時代、映画の編集マン出身のディレクターが教えて下さったノウハウが本当の意味で身についた半年間でした。

《1400デンリクアワー》

ナイターシーズンが終盤にさしかかろうとする頃、ナイターオフの話になりました。会社の意向は、「そのまま野球ネタで来年のシーズンまで繋ぐ」というものでした。私を含め担当アナウンサーたち(河野憲了・山仲宣城・荻島正己・私の4人)がまとまって話に行きました。

「オフじゃ、ネタがありませんよ。」

「スポーツ紙を参考にすればいいじゃないか。」

「スポーツ紙の受け売りじや、パクリじゃないですか。それとも、独自取材を認めてくれますか？」

「そんな予算はないよ。」

ここで私はもう一度、昨シーズンのナイターオフにTBSラジオに寄せられていたハガキや手紙の話を持ち出しました。そして、絶対若者たちはついてきてくれるはずだと力説しました。何度も何度もあきらめずに交渉しました。ついに平山さんが「そんなにやりたいならやってみろ。ここまでできたらタイトルも大きく変えることはできないから〈1400デンリクアワー〉だ。」もうタイトルはどうでも良くなっていました。新編成スタートの一週間前だったのです。

こうして「1400デンリクアワー」は1977年10月スタートしました。

《25時間ラジソン》

翌月の11月1日、SBS開局25周年記念番組「八代英太の25時間チャリティーラジソン～車椅子の人々を太陽に～」の放送が決まっていました。深夜のパートは、デンリクアワー担当の4人に任せましたが、何せ放送開始からまだ日も浅い。何をやるか侃々諤々の議論を戦わせました。

- ・4人がうまくかみ合うようにできる企画は何か？
- ・リスナーの参加感を高めるためにはどうしたら良いのか？

結論がシナリオ公募のラジオドラマでした。何せ時間がない！必至に呼びかけ、4本のラジオドラマの放送にこぎつけたのです。ただ、手を入れる余裕はありませんでした。

これが1400デンリクアワーの人気を一気に押し上げる追い風となると同時に、1年後から毎年秋の放送改変期に放送されたデンリク恒例深夜(早朝?)特番「夜をぶつとばせ」の大きなきっかけになりました。

《爆発的なハガキ量》

予想は的中しました。開始数週で爆発的にハガキが来始めたのです。そしてラジソン。良い方へ良い方へと歯車が回っていきます。来るハガキには学校での様子が書き込まれています。いかに教室で話題になっているかを書いてきてください。ありがとうございます！ 良循環を願い、精力的にハガキを紹介し続けました。

教室で話題になり始めたら大成功です。読まれた中高生は教室で話題の中心を占める、それを見た同級生は自分も読まれて自慢したい。その連鎖が好結果を呼んでいきました。番組開始1ヶ月半、私だけで週3000通のハガキが来ました。嘘のようですが本当です。もっとも、読まれたいがために一人で何通も何通も出していたのも大きな要因でした。それもかなりの人数に上っていたのです。中には一語を一枚のハガキに書いて、文字数だけのハガキを送ってきた若者もいました。

「読まれるために目立とうとする気持ちは分かるけど、お金がもったいないから絶対やめてくれ。中身をちゃんと読んで選んでいるんだよ。」
と、放送しました。ただ、そのためにその例を番組で紹介したのですから彼は目的を達成できたわけですが…。

しばらくすると落ち着きましたが、週700通は下りませんでした。ニュース・天気予報など通常業務の合間はハガキに目を通すことが大きな仕事になりました。

番組ではきれいごとは一切言いませんでした。ついこの間まで中高生だった自分を思い出し、そこからちょっぴり成長した視点から素直にしゃべりました。そこにペンネームという匿名に助けられ、素直に悩みや意見を述べる裸の中高生がいたのです。

こうして〈1400デンリクアワー〉は、受験勉強という名の下に机に向かわされていました彼らの気持ちのはけ口になっていきました。事実、翌日の教室では番組での相談事などが必ずといっていいほど話題になっていたそうです。つい最近も50代男性が当時を思い出してそうおっしゃっていました。

《「くんちゃん」という愛称》

前述したように、私は「クニちゃん」や「クニさん」という呼ばれ方をしてきましたが、ある人物の意見で「くんちゃん」が一気に定着してしまいます。その人物はデンリクアワー水曜日担当の荻島正己アナでした。

「ねえねえ先輩、クニちゃんって言いにくくないですか？」

「そうは思わないけど…。」

「いや、絶対言いにくいです。だから、〈くんちゃん〉にしましょう！」

「くんちゃん？ 何だかくんくん嗅ぎ回っているようで嫌だな。」

「大丈夫！ すぐ慣れちゃいますよ。」

「燻製みたいなイメージも…。」

「何言ってるんですか、気にしない！ 気にしない！ アハハ。」

荻島アナは番組でそのことを発表し、その場で使い始めました。リスナーも面白がってハガキには「くんちゃん」とわざと書いてくる始末。番組内で私も抵抗はしたのですが多勢に無勢。あつという間に定着してしまいました。慣れとは恐ろしいもので、しばらく経つと

「いや、くんちゃんはそうは思わないな。」

と無意識に使っている自分に驚きました。

《荻島正己アナ》

荻島アナは、会社では2年後輩になります。「荻島眞一のいとこが入社するそ

うだ。」と入社前から話題になっていました。顔立ちは良いし、服装はファッショナブルでカッコイイ。周り中の注目を集めしていました。でも高級ブランドの何やらというのではなく、刺繡したシャツであったり、裾にもう一つポケットを付けたジーパンであったり、お母さんの手作りのファッションが多かったのです。

服装では私も結構言われましたが、その私に「荻島くんの服装はもう少しおとなしくならないものか。」と苦言を呈する人もいました。しかし決して奇天烈でも破天荒でも奇抜でもないファッションです。そのくらいの方が民放アナウンサーとしては多少なりとも目立って良いのではないか、と思っていましたからニコニコ笑って受け流していました。

デンリクアワーが爆発的な人気を獲得した要因の一つは、荻島アナの存在でした。特に女の子たちの人気は絶大で、番組の大きな支えとなったのです。またギターが上手く、ビートルズの曲はほとんど弾けました。これが後述する「ケッタウェイズ」結成の原動力になったのです。

彼とは本当にウマが合い、台本など何もなくても何時間でもしゃべっていられる、と二人とも思っていました。いや、事実そうでした。

自分のことを「ガラス細工のマミー」と呼んだりして、危うさを漂わせた青年を演じていましたが、実態は強靭な精神力を持った強者^{つわもの}アナでした。それは、ファンの女の子たちも「百も承知、二百も合点」していたのです。

今でも思います。彼がずっと静岡にいたらまた違っていたろうな…、と。

《イベント要請》

若者たちの反応に会社の営業部も反応しました。イベント要請が来たのです。今はもう無くなりましたが、その当時浜松市鍛冶町に西武デパート浜松店がありました。そこにはサテライトスタジオがあり、歌手などをゲストに迎えたラジオ番組を毎日生放送していました。そこで中高生との交流イベントを実施して欲しいとの要請でした。

その頃になると、担当アナ4人は誰言うともなく「デンリク四人衆」と呼ばれていました。その中の河野アナと私が行くことになりました。

そのイベントは1977年11月下旬、「デンリク集会」という名前で実施されました。私たちが西武デパートに近づくと、サテライトスタジオの周りは異様な空気に包まれています。

サテライトスタジオの前は番組や歌謡ショーを考えてそれなりのスペースがあり

ました。その先は歩道になっており広さは十分と思われていました。そこが中高生で埋まり、うねっています。開始時間が近づくにつれ人は増えていきました。そして遂に車道まで溢れだしたのです。

警察から「何か起きてからでは遅い」と中止要請が来ました。当然です。我々も言われるまでもなく、イベント中止を検討していたところでした。集まってくれた中高生には、近いうちに必ず埋め合わせすることを約束して終了しました。

仕切り直しは翌月12月に、西武デパート浜松店の屋上で実施されました。屋上であれば交通に支障をきたすことはありません。埋め合わせですから、デンリク四人衆全員が勢揃いしました。中止になった時より多くの中高生が集まつきました。どうなるんだろう、という興味も手伝ったと思います。屋上はどんどん人で埋まっていきました。気が付くと立錐の余地もない状態になっていく勢いです。本当にそうなってしまっては事故の恐れがあります。デパート側と協議し、階段規制することになりました。入れなくなつた中高生は可哀想です。デパート側が出した案は、館内放送の活用でした。イベントの模様は収録されると共に、デパートの中にもそのまま流されました。そのために来た中高生は良かったでしょうが、関係ない一般のお客さんには迷惑な話だったに違いありません。

のことから様々な場所でのイベント要請が舞い込むようになりました。最初の内は番組裏話トークや番組で放送しているゲームのステージ展開、アナそれぞれの隠し芸、大喜利、ラジオドラマなどを披露していました。しかし、ラジオドラマは公開ステージにはなじまず、隠し芸は数回やれば隠し芸ではなくなりました。はつきり言えば「ネタ切れ」になってしまった訳です。

《SBSに集まる中高生》

ローカルアナは勤務先である放送局に行けば、休みか取材で出かけていない限り必ずいます。そこがタレントとの大きな違いです。会って話がしたければ放送局に行けばいいのではないかと考えた中高生が、SBSを訪ねてくるようになりました。

直近の放送のリアクションもすぐ伝えられるし、パーソナリティの反応も直に見られる。相談事もできる。…これが理由でした。

最初は玄関で応対していました。しかし日に日に増えていきます。放送では「^{あお}煽る」ことになっては困るのでそのことについては言いません。口コミでした。

〈4人なのだから必ず誰かいる〉

〈生放送なのだから、担当曜日の夕方は絶対いる〉

それは確かにその通りでした。だんだん玄関に中高生の制服姿が多くなりました。最初は静岡市近辺だけでしたが、浜松や沼津方面の中高生の姿も見られるようになり、他部署の来客応対に支障をきたすようになりました。だからといって拒絶するわけにもいきません。そこで、大会議室を貸してもらえることになりました。ただし、時間を区切ってです。そうでないと、こちらの業務にも支障が出かねない状態だったのです。

また生放送のスタジオを見学したいという希望も多くなりました。夜の放送ですから最初は保護者同伴であれば認めましたが、次第に人数が増えて保護者の確認が困難になってきた時点でやめることにしました。

でもこのことは、デンリクアワーの社内認知を確固たるものにしました。デンリクアワー続行への大きな力となったのです。

集まってくれた中高生に感謝しました。

《ワニロバ》

1977年11月8日(火)デンリクアワー「サウンドクイズ」のコーナーでの出来事でした。「サウンドクイズ」は、出題の音が何の音かを当てるもので、実際に録音してきたり音素材レコードなどから出題していました。

動物の鳴き声当ての回のことです。生放送で電話を繋ぎ、正解が出るまでどんどん電話回答を放送していくものでした。何問目だったでしょうか。誰が出ても「ロバの鳴き声では?」「ロバにしか聞こえない。」との回答です。正解は聞いていましたが、私にもロバとしか思えません。

「私にもロバにしか聞こえないけど、ロバじゃないんだって。すごく意外な動物だよ。哺乳類ではない。」

答えは「ワニ」でした。私もワニの鳴き声というのは聞いたことがなかったので、「へエー」でした。番組が終了してから問題作成担当の佐藤ディレクターに、

「ワニの鳴き声ってロバに似てるんだね。どこからの出題?」

「このレコードだよ。」

そのレコードをターンテーブルに置き、再生してみました。

「えっ? この音?」

鼻を鳴らすような音がしました。さつきとは似ても似つかぬ音です。もう一度しつかり見てみました。各々の音ごとにレコードの溝が分けてあります。

「ねえ、溝を間違えてない？」

「そんなことは…。あーっ、一個ずれてる！」

悲鳴を上げる佐藤ディレクター。そうです。ひと溝間違えていたのです。問題とした音は…、やっぱり「ロバ」でした…。

問題はこの間違いをどうフォローするかです。次の放送日がやってきました。開口一番、

「前回のサウンドクイズで〈ワニの鳴き声〉というのがありました、申し訳ない、あれはみんなが答えてくれたように〈ロバ〉でした。」

放送後の顛末を話し、謝りました。かかってきた電話を次々に繋いでいるため、最初の正解者が誰かも特定できません。そこで、「とにかく許して欲しい。」と懇願した後で、

「どう聞いてもロバにしか聞こえない音を、ワニであると疑わなかつた佐藤ディレクターの一徹さに敬意を表して、あの音に限り〈ワニロバ〉という動物であった、と結論づけたい。」

と詭弁を弄しました。誰の耳にも明らかな図々しい大ウソでした。ところが、これが受けたのです。哀愁に満ちた鳴き声。カックンとするような話の時には必ず登場し、スタジオとリスナー全員を脱力感で一杯にする「ワニロバ」。命名のエピソードと共に今日まで、静岡県のデンリク・ぶっちゃけ・フリステ世代に親しまれています。

《1400デンリクアワー最終回＆前夜祭》

デンリクアワー放送開始から半年が経過し、そろそろナイターインを迎えようとしていました。そもそもデンリクアワーはナイターオフに限って許された企画です。春になればデンリクナイターに戻るのが当然でした。

でも、もう後戻りできない状況になっていました。営業的にもイベント要請は容赦なく来ます。会社も悩んだと思います。平山プロデューサーと何回も話し合いました。そしてついに平山さんが結論を出しました。

「よし！ デンリクアワーのままでいこう！」

快哉を叫びました。

次なる問題は放送上どう発表するか、でした。リスナーは半年経ったら終わるかもしれないことを知っていました。4月以降どうなるのか、心配するハガキが多く寄せられていたのです。

そこで一計を案じました。最終回はやろう、そして併せて新生デンリクアワー前夜祭を放送しよう、ということになったのです。デンリク四人衆が揃うのは25時間ラジソン以来です。きっと楽しんでもらえるだろうと企画しました。

編成替えの前の週、最終回を木曜日に放送すると告知しました。やっぱりそなんだ、とがっかりしたハガキが来る一方、月～金の番組なのに最終回が何故木曜日なのか、と鋭い指摘をしてくるハガキもありました。

こうして1978年3月30日(木)、本来なら山仲アナ担当日に最終回を放送しました。半年を振り返ったあと、いよいよ終了数分前になりました。「螢の光」のメロディが流れます。重ねて四人衆の決して上手いとは言えない歌声。「螢の光」が終わって登場したのは、平山プロデューサーでした。

「デンリクアワーは終了の予定でしたが、ラジオをお聴きの皆さんの大絶賛のご要望を考慮した結果、続行することを決定いたしました！ 来週以降もよろしくお願いします。」

そしてこのメッセージの直後、四人衆は叫びます。

「バンザイ！」

番組テーマ曲「踊ろうバランガ」が景気よく鳴りだして

「明日は1400デンリクアワー、前夜祭をお送りいたします」

というアナウンスで番組は終了しました。スタジオの電話は、しばらく鳴りっぱなしでした。

翌3月31日(金)は「新生1400デンリクアワー前夜祭」と題して、再び四人衆が揃いナ�이터인의番組内容紹介を放送しました。これが秋の編成替え時期の午前1:00～5:00に毎年放送されることになる、四人衆勢揃い「夜をぶつ飛ばせ！」(後述)の大きなきっかけになったのです。

《バンドの結成》

デンリクアワーの続行も決まり、いよいよイベント要請に対する対応を真剣に考えなくてはならないリミットが近づいてきました。悩みました。「繰り返しに強い〈出しどう〉は何だろう？」

またまた侃々諤々の議論が展開されました。最終的に出た結論は、

「そうだ、アナウンサーとディレクターでバンドを作ろう！」

そう、「音楽」だったのです。

次は、誰が何を担当するのかが問題でした。デンリク四人衆のうち荻島アナは

「ぼくはギターとヴォーカル。」河野アナは「ぼくはピアノが趣味なのでキーボード。」、山仲アナは「ぼくは楽器はやらないから司会進行を担当するよ。」、そして私はかねてやってみたかったベースに手を挙げました。でもその時佐藤信雄ディレクターがすでにベースギターを買ってきていたのです。ドラムは大学の軽音出身の鷹森泉ディレクター。結局私は高校時代少しだけかじったことのあるギターとヴォーカルになりました。

早速、練習。「上手にやれっこないから、コミックバンドを目指そう！」を合い言葉にスタートしました。ところがこれが大間違い。キチンとバンド演奏ができた上でなければ、コミカルな展開なんてできっこない。皆青くなりました。通常業務が終わってから集合し、スタジオに楽器を持ち込んでの練習。急ごしらえの5人編成素人バンドがうまくいく訳はありません。糸余曲折があり、最終的にギター2本にベースとドラムの基本的なビートルズ・スタイルの4人編成エレキバンドになりました。

《デンリクソング》

当時、静岡県の東部・中部・西部には静岡新聞・静岡放送主催の「フェスタぬまづ」、「フェスタしづおか」、「フェスタはままつ」という夏の祭りがありました。そして7月の「フェスタはままつ」がバンドお披露目の目標となりました。そしてとんでもないことを思いつきます。詞を公募しオリジナル曲を作って演奏しよう、という企画です。

たくさんの詞が寄せられました。これはあだやおろそかにできない…、ハガキの山にたじろいだのを覚えています。そして選んだのが沼津市の小笠若菜さんという女子高校生の「心の扉」でした。

とにかく時間ありません。お尻に火が付くと訳の分からぬ力が湧いてくるもので、比較的短時間で曲ができあがりました。青春のみずみずしさ溢れる詞で、年齢を重ねた今の方がジーンと胸にしみるような気がします。

心の扉

作詞 小笠若菜

作曲 國本良博

君の心の扉を 静かに開いてごらん

広がる青空にひかる 君の汗と涙

白い雲のような やさしさは

青春のかけらのひとつ
手をつなぐ輪の中に さわやかな風を送ろう

君の心の扉を 静かに開いてごらん
胸ふくらむあしたと さよならしたきのう
忘れられない 若い日々を
心に焼き付けて
この道の向こうの あしたへ出発(たびだ)とう

《ケッタウェイズの誕生》

そして、1978年7月22日（土）浜松産業展示館で開催された「フェスタはままつ」のステージで「心の扉」は初めて演奏されました。

実はこの時、バンド名はまだありませんでした。次の「フェスタしづおか」にはちゃんととしたバンド名で登場したい、とバンド名も公募することになりました。やはりたくさん寄せられましたが頭を抱えてしまいました。「お笑い四人組」「動物広場」「アニマルメイツ」などなど…。とても採用できそうもない名前が並んでいました。
そこで相談したのが直属の上司、神村さんでした。神村さんは問います。

「どんな名前のイメージ？」

「もうちょっとカッコイイ、というか流麗な名が良いです。」

「例えば？」

「スティーブ・マックイーン主演映画の<ゲッタウェイ>のような…。」

「じゃあ、テンテン取ればいい。かっこよくなりたいけどなれないケッタイな
バンド。蹴飛ばされてもへこたれないバンド。ピッタリじゃないか。」

こうして「ケッタウェイズ(Kettaways)」が誕生しました。

《ぶっちゃけスタジオCut in !》

この年1978年の秋の編成替えを迎えるに当たり、「1400デンリクアワー」という番組タイトルを変えようという話が持ち上がりました。11月にはSBSラジオの周波数が1400kHzから1404kHzに変更になると、「〇〇アワー」というネーミングはあまりにも古いイメージだったからです。

いろいろアイディアが出ますがまとまりません。それなら出た言葉をつなげてみたらどうかという話になり、当時はあまり一般的ではなかった「ぶっちゃけた話」

の「ぶっちゃけ」と「スタジオ」、それに曲をかける時の放送用語の一つ「カットイン」を併せて「ぶっちゃけスタジオCut in！」というタイトルが誕生しました。

忌憚のない話をスタジオから、最初からガンガン飛ばして放送するという意味を込めたのです。

《自転車コギコギゲーム》

「ぶっちゃけスタジオCut in！」のコーナーで忘れられないのが「自転車コギコギゲーム」です。ケッタウェイズのドрамーでもある鷹森ディレクターのアイディアでした。彼は小学校高学年か中学1年生の頃、ゲルマニウムラジオが景品で当たりました。そして〈雨どいとか有刺鉄線にワニ口クリップをはさんで接続するとよく聞こえる〉と聞き、電波のエネルギーだけで聞くラジオなのを忘れて

「電気をとっているんだ！」

と、今考えるとアンテナの話だったのを誤解。それなら自転車の発電機「ダイナモ」を利用して、走りながらラジオが聴けないものだろうかと思ったそうです。当然それは挫折したのですが、その記憶はしっかりと残っていて、おおはしまさゆきダイナモ発電の電力でラジカセが動かせないかと考えました。そこで制作技術の大橋正幸さんに相談をもちかけ、いざ実験。

夜間の走行時のように、ダイナモをタイヤに接触させて自転車をこぎます。ダイナモから出ている電線の先は前照灯ではなく、ラジカセに。結果、見事に駆動しました。あまりに見事、何の問題もなく正常に作動しきれいに再生します。でもこれは、期待した結果ではありませんでした。当初は、

「人間が自転車のタイヤを一定速度でこぐのは至難の業。となるとテープ再生にもムラが出るであろう。ムラのある再生を利用した楽しいゲームが出来ないだろうか。例えばカラオケテープをかけてフラつく音程に合わせながら歌つたらどうだろう。きっと面白い展開になるに違いない。」

との、もぐろみだったのです。そこで大橋さん、

「抵抗を入れよう！」

技術的にどうしたのか詳しいことは分かりませんが、タバコの箱ぐらいの電気抵抗をかえる装置を作って下さいました。それにはつまみがついていて、抵抗値が可変できる仕組みになっていたのです。

番組では挑戦者を募り、装置を挑戦者の自宅に持ち込みました。そして挑戦者自身の自転車を使ってこいでもらい、空回り状態の後輪に持ち込んだ装置

(のダイナモ部分)を押しつける形でテープ再生をしたのです。テープは挑戦者の選んだカラオケ。でも、まだ問題がありました。挑戦者が頑張って一定速度以上でこぐと再生ムラが無くなってしまうのです。これでは面白くありません。でも最初から大きな抵抗値に設定すると、再生の最初の立ち上がりに時間がかかる…。

番組では思い切って「汚い手」を使いました。収録に当たっていた鷹森ディレクターが横でつまみを操作し、わざと再生ムラを起こしたのです。挑戦者は「おかしい」とは思ったでしょうが、一所懸命歌いました。これが大爆笑を呼びます。とても楽しいコーナーになりました。

この「汚い手」を公言するのは初めてです。鷹森ディレクターも「時効ということで許して下さい。」と言っています。ちなみにこのコーナーに勝ち負けはなく、全員に挑戦記念品をプレゼントしていました。

《夜をぶっとばせ！》

番組タイトルの変更に伴い、もう一度「四人衆勢揃い」を企画しようということになりました。デンリクアワー最終回＆前夜祭の時のように、レギュラー枠で放送する手もありましたが、放送休止時間帯があることを思い出したのです。それは毎週月曜日の午前1:00～5:00の4時間でした。ラジオ放送機器のメンテナンスのために取つてある時間でした。早速交渉開始です。

予想通り最初は技術担当の方は躊躇されました。でも、フェスタはままつ、フェスタしづおかと一緒に乗り切った仲間もあります。最終的には、毎週というわけではなく該当日だけなのだから、と許可をくださいました。

こうしてレギュラーフレーズとは別に、特別番組「夜をぶっとばせ！」が誕生しました。「夜をぶっとばせ！」は、この年1978年だけの特番で終わりませんでした。1984年まで7回放送されたのです。この放送があった月曜日の中学高校の教室は大あくびとうたた寝のオンパレードで、先生たちから「何とかならないか」と苦言が出ました。今は昔、本当にラジオ黄金時代でした。そして、これがあつたからこそ元日午前1:00～7:00に放送された正月特番「おめでとう！ニューヨーステーション」(後述)ができたのです。

この「夜をぶっとばせ！」は社内的には、秋編成ラジオ番組紹介がメインでした。最初の1時間は各番組紹介。残りの3時間が我々の企画を生かせる時間となつたのです。大きく3本の柱から成り立っていました。

柱の一つは、ラジオドラマでした。スタジオ放送にはぴったりです。四人衆はもちろん、ディレクターも参加しての総出演イベントでした。もともと25時間ラジソンでの公募ラジオドラマが大きなきっかけでした。番組プレゼンテーションですから、脚本は公募せず主に私と荻島アナが書きました。脚本の仕上がりは、いつもぎりぎりで本番開始1時間前完成ということもありました。

全員がレギュラー番組で忙しい中での、イレギュラーな特番。アナもディレクターもありませんでした。いかにリスナーに楽しんでもらうか、そして話題の俎上に載せてもらうか。とにかく全員で分担しながら取り組んでいたのです。

「夜をぶつとばせ！」のもう一つの柱は、ケッタウェイズ・オン・ステージ。隣のテレビスタジオにバンドセットを組み、演奏しました。ケッタウェイズの演奏曲は、ほとんどオリジナル。新曲ができるたびに番組で発表。繰り返しかけて覚えてもらうことで、スタジオ・コンサートやホール・コンサートはいやが上にも盛り上がりました。ケッタウェイズは、「デンリクアワー」「ぶっちゃけスタジオCut in！」「夜をぶつとばせ！」を通して、一気に中高校生の人気者になっていったのです。

そして3本目の柱は「ぴったしチンチン」でした。

《ぴったしチンチン～「オゴンゴ」の誕生》

最初は過去の番組同録(自分たちの放送を同時録音したもの)の振り返りとしてスタートし、「夜をぶつとばせ PartⅢ」からレギュラー化したコーナーが、当時の人気番組「ぴったしカンカン」のパロディ「ぴったしチンチン」でした。アナウンサーとディレクターが組んで「ぴったしチーム」と「チンチンチーム」に分かれてクイズに答えるというもので、自分で放送したものなのに忘れていて、なかなか正解が出ない…。それがまた面白くて回を重ねていきました。

その「夜をぶつとばせ PartⅢ(1980年10月6日放送)」のことです。この時のぴったしチームは河野憲了アナと私。さわきひさお チンチンチームは澤木久雄アナと佐藤信雄ディレクター。司会は荻島正己アナでした。

問題は、3年前の(1400デンリクナイター)時代からの出題。当時デンリクナイター内にはニュースコーナーがあり、夜勤アナウンサーがニューススタジオから読んでいました。当然ながら自分の番組曜日でない日は、夜のニュース勤務も交代で担当していました。ワイド内ですから、比較的やわらかい内容のニュースを選んで口語に近い形で放送していたのです。

そんなある日、河野アナ担当の月曜日でした。夜勤は私。番組は外からの生

放送。河野アナがスタジオに戻りつつあるところからの録音再生です。生放送スタジオへの移動の間、私がニューススタジオから話題的なニュースを放送しています。

録音再生〔ニュージーラント沖でネッシー発見かと騒がれていましたが、カナダでは怪獣がいるという湖に大がかりな調査団が入り、怪獣探しに躍起となっているということです。問題の湖はブリティッシュコロニア州ケローナという所にあるオカナガン湖という湖なんですが…〕

ここで録音は止まり、司会の荻島アナが口を開きます。

「ではここで問題です。オカナガン湖という湖にいる怪獣の名前！
これはくんちやんに有利かな？ 覚えている訳ないと思いますが…。」

本当にきれいに忘れ去っていました。

「この怪獣の名前を当てていただきたいと思いますが、これはぴったしチーム、くんちやんからいこう。」

「オカッシー！」

「全然違う。はい、ケンちゃん。」

「ガンシー！」

どちらのチームもさっぱり見当が付きません。その様子に荻島アナが、

「ヒントを一つ。〈オ〉から始まる。」

「オカナン！」

「オカゴン！」

「オカチメン！」

むなしの時が流れます。さらに荻島アナからヒントが…、

「〈オ〉で始まって4文字…だけど、放送コードは守るように！」

「オ、オ、… オ…。」

危ない！ 荻島アナはたたみかけて、

「分かった。じゃ、〈オ〉の次まで言っちゃう〈オ、ゴ〉。」

「オ、ゴ…、オゴンタ！」

「オゴンタじゃない！ はい、ケンちゃん。」

「オゴンコ！」

…！ 全員大爆笑です。司会の荻島アナ、笑いながらも

「そ、そんな怖いこと言うな！ ぴったしチームにはペナルティを科します。」

危険な発言でしたので。」

「どこが危険なんだよ！」

と、私。事態は大紛糾…。対するチンチンチームも苦慮。

「オゴッソー！」

「じゃないんだ。じゃ、もう一つ。〈オゴ〉で始まって次は伏せとく。

〈オゴ〉ふにや〈ゴ〉！ 〈オゴ○ゴ〉！」

オゴ○ゴ？ 午前3時20分を回っています。頭も正常に働いているとは限りません。もともと日本語じゃないのですから想像すらできないわけです。みんなの頭の中はグジャグジャになっていました。そんな雰囲気を振り払うように、私が

「オゴリゴ！」

「〈リ〉じゃない。はい、ケンちゃん。」

「オゴモゴ！」

「〈オゴモゴ〉じゃないんだ。はい、澤ちゃん。」

「オゴンゴ！」

「さっきと同じじゃないか！」

事態はさらに紛糾。業を煮やした荻島アナから「清音ではない、濁音でもない」との最終ヒント、半濁音なら5つしかない！

「オゴピコ！」

「オゴポゴ！」

「オゴペゴ！」

「何で避けるんだ！ ぴったしチーム！」

私は叫びました。

「オゴパゴ！」

「はい！ ぴったしちんちん！！！」

やっとの思いで正解が出ました。

「じゃ、正解のテープを聴いてください。」

続きを再生すると私がすまして読んでいます。

録音再生〔百年も前から〈オゴパゴ〉と呼ばれる怪獣が棲みついていると言わされてきました。〕

この時点の日本のニュースでは「オゴパゴ」でしたが、現在は「オゴポゴ(Ogopogo)」というそうです。綴りから見ればそうですよね。「オゴポゴ」ならば澤木アナが正解だったということになります。

これがきっかけとなって、その後の私の番組にはキャラクター「オゴンゴ」が誕生しました。結構長生きして番組中の時報も担当したりしました。生みの親は澤木アナということになります。

月曜早朝のこの時間は、県外のラジオ局でも保守点検のため放送を休止しているところが多く、他県からも反応がありました。「やってる局がほとんど無いんだから、これは全国放送だ！」と訳の分からぬことを言つては大騒ぎの放送をしていたことを思い出します。因みに〈1400デンリクアワー〉ではニュースコーナーは無くなりました。

「ぶっちゃけスタジオCut in！」そして「夜をぶつとばせ！」。番組とケッタウェイズの黄金期を迎えます。

《ケッタウェイズモデルのギター製作》

ケッタウェイズ結成当時、ギターはそれぞれの個人所有がありましたが、ドラムとアンプがありませんでした。でもお金もありません。そこで相談したのが、自分のオーディオ環境のことでお世話になったカワイ楽器静岡店の小沢 勤さんでした。おざわつとむ
いわほりのりひで 小沢さんは楽器に詳しい同僚の岩堀則秀さんに声を掛け、試弾用だったドラムを探し出してくれました。アンプも予算を考慮したもの用意し、

「とりあえずステージで使ってください。お金はいつでもいいですよ。」
と渡してくれました。一同感激。そして、1978年7月の「フェスタはままつ」でバンドデビューしたのです。そのステージを小沢さん岩堀さんにも見ていただきました。ステージを見た小沢さんは、

「どうせなら、ギターとベースを揃えませんか？ スタイリッシュですよ。」
お金が無く、ドラムとアンプを月賦で支払い始めたばかりの我々は「とても無理です。」と言ったのですが、小沢さんは楽器工場の友人に製作を依頼していました。何ヶ月かが経ち、小沢さんから完成の連絡が入りました。

赤いボディに白のピックガードのフェンダー・ストラトキャスタータイプのギターとプレシジョンタイプのベースギターでした。恐る恐る、

「いくらですか？」
と問いかげますと、小沢さんは笑って、
「カワイ楽器からのプレゼントです。」
とおっしゃったのです！ いくらなんでもそれはいけない、と思いましたが先立つものがない。…甘えてしました。

こうしてできた「ケッウェイズモデルⅠ号」は、翌年の1stコンサートでお披露目されました。

《ケッタウェイズモデルⅡ号》

I号ということは、II号があるのか？ その通りです。ある時、小沢さんとケッタウェイズモデルの話になった時でした。私が、

「綴り〈Kettaways〉をそのままギターデザインにできたら最高ですよね。」
と冗談で言ったのです。すると、

「ギター工場に行ってみましょうか？ あのギターを作った職人もいますし。」
そこで、小沢さんと一緒に浜松のカワイ楽器新屋工場にお邪魔しました。フェルナンデス・ブランドのギターをすべて作っていたところです。紹介されたのが渡邊文彦さんでした。

小沢さんが下話をしてくれていたので、すぐ渡邊さんが、

「どんなデザインが希望なんですか？」

「例えば、ボディは〈K〉、ヘッドが〈S〉のようなデザインは可能でしょうか？」

「可能ですよ。オリジナルで削り出すわけですから時間がかかりますが。」

「ピックアップは、シングルコイルとハムバッキングの同居って可能ですか？」

「可能です。どうせならイフェクターも組み込んでしまいましょうか？」

話はスケールアップしていきます。渡邊さんもギター職人としての血が騒ぎ始めているかのような反応でした。あくまで私の個人的見解ですが…。

どのくらい経ったでしょうか。「ケッウェイズモデルⅡ号」が完成したのです。知らせを受けた我々は、新屋工場まで受け取りに行きました。目の前に運ばれてきたギターは見たこともないものでした。まさにボディは〈K〉、ヘッドは〈S〉をデザインしたもの。ピックガードはミラータイプ。ヘッドにはそれぞれの名前が入っており、色は指板以外は荻島アナ用がラメ入りブルー、佐藤ディレクター用のベースがラメ入りピンク、私用がラメ入りイエローでした。ピックアップも2種類が同居、指板のフレット間には白蝶貝で〈Kettaways〉の文字が埋め込まれていました。当時発売されて話題を呼んだボディが三日月のギター「ムーンサルト」に搭載されたプリアンプやフェイズスイッチの組み込みユニットも内蔵されていました。最強のギターが提供されたのです。最高グレードの完全オリジナルなので価格を出すことはとてもできない、と渡邊さんはおっしゃっていました。

渡邊さんはほどなくして独立され、現在は静岡市で「ミュージック・バーン」とい

うギターの製作・リペア専門店を営んでいらっしゃいます。また、中国へもギターの製作指導にも定期的に行かれています。

私自身今もバンド活動を楽しんでいますが、楽器のメンテナンスや改造・修理など、渡邊さんとのお付き合いはずっと続いています。

《ケッタウェイズ1stコンサートとPRスポット》

翌1979年3月22日(木)清水市民会館で「ケッタウェイズ・1stコンサート」が開催されました。1300人集まりました。その告知のために番組内で流すPRスポットも作りました。私と荻島アナがそれぞれ1本ずつ作りました。荻島アナは「ジョニーエンジェル」をバックに、女高生の先輩への淡い恋心を綴ったほのぼのの作品。私は映画のサントラを編集した音をバックに、映画の予告編のようなティストの作品でした。前者のナレーターは女性ディレクター、後者は私の尊敬する先輩、鈴木昭儀アナと、尊敬する上司、神村さんにお願いしました。このPRスポットは、再結成コンサートまでのすべてのコンサートについて作りました。

このころは、アナウンサーとディレクターは放送直前まで内容の別なく仕事をしていました。PRスポットや後述するラジオドラマなど、構成・執筆・ミキシング・編集、みんな何でもこなしました。因みにPRスポットは、私は読み手ではなくディレクター＆ミキサーでした。最後のコンサートまでそうでした。

《ケッタウェイズ、「アノンシスト賞」受賞》

JNN・JRN系列のアナウンサー対象の「アノンシスト賞」には「アナウンサー活動称揚部門」という部門があります。それにケッタウェイズを出したらどうか、という話が持ち上がりました。私たちに異論のある訳はありません。

ちょうどその頃2ndコンサートも決まり、荻島アナと私はその発表と結成からの振り返りの放送をしようとしていました。アノンシスト賞に応募するためには、当然ながら何らかの提出素材が必要です。そこで、ケッタウェイズを理解してもらうには、その放送を聴いてもらうのが一番という結論に達したのです。

「でも、しゃべりだけじゃ伝わらないかも…。」
という意見が出ました。

「放送はラジオだけど、その模様をビデオ収録して資料映像を挿入しよう！」
こうして、ラジオなのにビデオテープという面白い応募作品になりました。

1979年12月21日(金)放送のぶっちゃけスタジオCut in！は、ビデオ収録

しながらの生放送になりました。その映像に1stコンサートやフェスタしづおかの8mmフィルム映像・VTR映像をインサート。コーナー最後にかけた曲「風よ翼に」には後で演奏映像を収録し被せました。

この結果ケッタウェイズは、1979年度の第5回アノンシスト賞「アナウンサー活動称揚部門」で「放送活動賞」を受賞しました。

《2ndコンサート》

発表通り、翌年1980年3月16日（日）浜松市民会館で「2ndコンサート」を開催。ゲストに「番組ファミリー」ということで、当時私の担当日準レギュラーだった稻岡紅二さんを迎えてのコンサートになりました。稻岡さんは、さざなみけんじ訳の日本語バージョン「ミッキーマウスクラブ」を歌って話題になった人です。番組は夜の生放送ですから、出演した晩は我が家に泊まることが多かったの思い出します。泊まって一献酌み交わし、興にのると稻岡さんがギターを取り出し「ミッキーマウスクラブ」を熱唱。子供たちが大喜びしたものです。

ルックスも良い若者でしたので「全国的に大爆発して欲しい」と、番組あげて応援していました。今は良きお父さんです。

《大誤算》

この2ndコンサートで大誤算が生まれます。そもそもコンサート費用はスポンサー頼み。チケットは無料です。ファーストコンサートは文字通り初めての会館コンサートですから、チケットを手にした人はほとんど来るであろうと思われ、抽選で配布しました。でも2回目は歩留まりを考えた方が良い、という話になりました。通常の無料チケットの場合良くて6割の回収率だと言うのです。つまり100枚配っても60人しか来ない、という訳です。

結果、抽選はやめて応募者にすべて送りました。およそ2500人分です。浜松市民会館のキャパは1492人。歩留まり「6」ならピッタリという計算でした。当日、ステージ準備していた私たちにスタッフが青い顔をして飛んできました。ずっと並ばせておくのは可哀想なので整理券を発行していたのですが、その配布状況から集まってきた中高生の数が収容人数をオーバーすると言ってきたのです。

まさかの事態でした。すぐに対策を協議しました。結果、2時間半の予定のライブを1時間半ほどに短くして2回公演にすることにしたのです。最終的に集ま

ったのは2500人。ほとんどの人が来てくれたのです。

《卵と緞帳》

このコンサートではもう一つの事件がありました。当時のライブでは芯を抜いたテープを投げるのが当たり前でした。テープでは飽き足らなくなつたリスナーの中にはトイレットペーパーを投げる者も現れました。もちろん受け狙いです。そしてセカンドコンサートでは鶏卵を投げる者が現れたのです。しかも「生卵」。飛び散った中身の一部が会館の緞帳(どんちよう)にかかってしまったことから大問題になりました。

緞帳というのは非常に高価なものです。いくら未成年者であっても許されることではありません。すぐにそのことを放送しました。

「非常に残念なことがありました。(中略) もしこの放送を聞いている人たちの中にいたら、大いに反省してほしい。弁償に関しては現在協議中です。」

すると、パックを持ってきた若者・その卵を投げた若者が次々に名乗り出たのです。「名乗り出て欲しい」とは言っていないにもかかわらず。

その事実を踏まえて浜松市と話し合うことになりました。結果、名乗り出た勇気と正直さに「弁償なし」の裁定がでました。担当の方たちの寛大さに頭が下がりました。緞帳は卵のかかった跡がほとんど分からないほど一所懸命拭いたそうです。そのことを放送すると、投げた若者たちから感謝と再度の謝罪文が届きました。そのほかの若者たちからも安堵と感謝の葉書がたくさん届きました。

それからです。コンサートに来る若者たちの姿勢が変わりました。スムーズな進行の手伝いをしたいと申し出てくる若者。観客の中に車椅子の人がいたら優先させ、必要があれば押したり誘導したりする。終了後は手分けして会場内のごみを集める。警備のためのスタッフは事実上いらなくなつたのです。

こうした中高校生の姿は会館の人たちの大きな賞賛を浴びました。番組で紹介したのはもちろんです。

《上天丼ライス》

この頃は週2日夜の番組、加えてニュース夜勤などで夜会社にいることが多い時期でした。夕食はスタッフやアナ仲間と撮っていました。社内食堂にも行っていましたが外食も多く、近くの中華食堂「頂好てんこう」が行きつけでした。当時は本当によく食べました。ラーメン・ギョーザ・チャーハンは一時期定番で、良くあんな

に食べたな、と思います。効率の悪い「ヤセの大食い」だったんですね。

ある時、確か「頂好」が休みだったと思うのですが、天井の店に入った時のことです。景気良く

「上天井の大盛りください！」

と注文しました。すると、

「うちは大盛り、やってないんですよ。」

「えーっ！ ご飯を多くするだけいいんですけどね。」

「申し訳ありません。」

「じゃ、別途ライスを注文することはOKですか？」

「それは大丈夫です。」

「じゃ、ライスを付けてください。」

スタッフは大笑いです。揃ったところで一同、

「いただきまーす！」

「それにしても、計算して食べないと天井の天ぷらが無くなっちゃうよね。」

とスタッフ。私は、

「大丈夫。学生時代、演劇部の合宿で朝食の時、生卵1個でご飯5杯食べたことがあるんだ。」

と何の自慢にもならないことをしゃべっていました。見かねたご主人が、

「これ、おかげにしてください。」

と漬け物をそっと出してくれたのは、ありがたかったです。

これは早速同行した荻島アナの恰好のネタとなり、以来「上天井ライス事件」として番組を賑わすことになりました。

《番組パートナーの募集》

1980年夏、番組パートナーを募集しようという企画が持ち上がりました。番組内に乱入という形で他のアナウンサーが入ることは良くありましたが、レギュラーパートナーとのコンビネーションしゃべりは「お昼のチャッキリ大放送」以来ありません。番組に新しい風を入れる意味でも良いのでは、と皆賛成し公募することになりました。

しかし、選考の段になって「これは極めて難しい」と思い始めました。アナウンサー試験ではありません。ニュースを読んでもらう訳ではないのです。打てば響く「しゃべり」で楽しく放送でき、個人としても世の中の動きや趣味の世界などに

確かな視点を持った方を、と思っていましたが、応募してくる方の多くはそういう方でした。人間としても魅力のある応募者がたくさんいらしたのです。

スタッフ共々さんざん悩んで、^{さいとうみはる}斎藤美春さんという女性にお願いすることになりました。斎藤さんの加入で女性の立場からの意見が常に反映され、相談事への対応もバランスのとれたものになったと思います。斎藤さんとの放送は非常に勉強になりました。斎藤さんの自然な視点は番組の幅を広げてくれました。

《くんちやんのトークカプセル～朗読の世界》

私がアナウンス学院で模擬番組を作った時のことです。2種類作りました。1つは当時全盛だった土居まさるさん風の機関銃のような早いしゃべり。もう一つはジェットストリームの城達也さんのようなゆったりしたしゃべりでした。

提出したら、先生から「君はゆったりしゃべる方が合っているね。これを伸ばす努力をしてみたら。」と言われました。コッキータウンの項でも書いたように城達也さんのしゃべりが大好きでしたから、これは嬉しい一言でした。

自分のしゃべりの路線が前者に近くなっているのを感じていた私に、コッキータウン、シャナナと一緒に仕事をした大塩正直ディレクターが、ショート小説を朗読する番組「くんちやんのトークカプセル」の企画を持って来てくれたのです。時まさにナイターオフの1400デンリクナイターをどうするかでもめていた頃。

何か偏っていく不安が自分の中で無きにしも非ずだった私。二つ返事でOKでした。その企画は通りました。そして奇しくも1400デンリクアワーと同時にスタートしたのです。自分の中でのバランスが取れたような気がしました。おかげでデンリクアワーが思いつきりしゃべれるようになったと言っても過言ではありません。大塩ディレクターに感謝でした。心残りは、リスナーの作品を朗読したコーナー「童話になりきれなかった童話」を本にできなかったことです。

1977年から3年間と、1984年からの2年間の合計5年担当しました。今でも朗読の依頼があると嬉しくなって、いそいそ出かけていく自分がいます。

《SBSポピュラーベストテン》

2回のトークカプセルと重なった時期を持つ「SBSポピュラーベストテン」も忘れられません。ケッタウェイズの母体番組「ぶっちゃけスタジオCut in！～フリーステーション1. 2. 0」とは、ほぼ時期を同じくし並行して放送していました。

もともとシャナナしづおかで洋邦楽ベストテンをやっていましたし、デンリクでも

リクエスト集計はしていて、音楽情報誌オリコン（オリジナルコンフィデンス）などへの情報提供は継続してやっていました。

独立した番組になったのは、TBSテレビの「ザ・ベストテン」開始に合わせて「SBS歌謡ベストテン」が立ち上げられることになったためで、やはり大塩ディレクターの発案でした。大塩ディレクターは歌謡ベストテン、ポピュラーベストテン両方のディレクターを務めました。

ホール＆オーツ、クイーン、REOスピードワゴン、ビリー・ジョエル、バグルス、ブルース・スプリングスティーン、スリードッグナイト、オリビア・ニュートン・ジョン、ルベツなどなど忘れないアーティストがたくさんいます。

1979年から6年続きました。

《静岡駅前ゴールデン地下街ガス爆発事故》

1980年8月16日（土）午前、静岡駅前にある紺屋町ゴールデン地下街でガス爆発事故が起きました。爆発は2回あり、1回目は午前9時半過ぎの溜まっていたメタンガスによるものと思われる小爆発。2回目は小爆発によって損傷した都市ガス管から漏れた都市ガスによる午前10時の大爆発でした。15人が死亡、223人が負傷する大惨事となりました。

その日、私はポピュラーベストテンの取材で横浜へ出張することになっていました。目的は、横浜スタジアムで開催される「Japan Jam 2」というイベント。スタジアムのような大きな会場で複数のアーティストがライブコンサートを開催するのは非常に珍しかった頃です。参加アーティストは、海外から「チープトリック」「カラパナ」「アトランタリズムセクション」、日本からは「ザザンオールスターーズ」「スペクトラム」「RCサクセション」。番組取材としては海外アーティストのステージ取材がメインでしたが、ザザンやスペクトラム、RCのステージも楽しみにしていました。

出社途中、静岡駅北側の繁華街で黒い煙のようなものが上がるのを見て「何だろう？」と思いながら会社に着くと、報道部員が出かける支度をしていました。「何があったの？」

「駅前で爆発があつたらしいんだ。まだ詳しいことは分からんんだけど」
その様子から「大したことはなきそうだ」と勝手に想像した私は、
「きょうこれから横浜へ出張なんだ。駅前まで行くのなら乗せていいってくれない？」
「いいよ。」

便乗して駅前まで行きました。爆発のあった場所は静岡市の中心繁華街です。爆發現場から少し離れた位置に取材車を置き、取材クルーが現場に向かいいます。私はそのまま駅の改札に向かう予定でしたが、様子だけでも確認しておこうと取材クルーについて行きました。

現場が良く見えるところに着いた途端、爆発の規模の大きさに戦慄しました。中心と思われるビルは大きくえぐれています。通りは、吹き飛ばされたコンクリートなどが散乱しています。近くのビルの窓ガラスは跡形もありません。少し離れたデパートもショーウィンドウが大きく割れています。上を見上げると窓の上の棧にかろうじてくっついているガラスがゆらゆらしています。

「あ～っ、くんちゃん！ 来てくれたんだね。ありがとう！」

先行していた社員でした。

「じゃ、これとこれ渡すね。はい！」

渡されたのは、取材用のヘルメットと腕章。

「あ、あの…」

「多分TBS・ニッポン・文化からも入り中要請があると思うので、よろしくね！」

その時点で横浜行きは諦めました。本社に連絡を取り、関係先に事情説明と詫びを入れるよう頼んで取材態勢に入りました。

まずは、本社報道部で把握している事実の確認。現場では全体のことが分かりません。公の発表を含め、全体については本社が一番把握しています。そして、先行して取材していた記者にその時点までの現場情報を確認。情報を整理しながら、付近にいる方にインタビューして回ります。

そうこうしているうちに上空が騒がしくなってきました。取材ヘリコプターです。かなり低空をホバリング（その場にとどまる飛び方）しながら撮影しています。1機ではありません。各社が競うように撮影しています。かなり大きな音です。

そばにガラスが落ちてきて碎けました。ヘリの音にかき消されて割れる音は聞こえません。ヘリの風圧で窓の棧にかろうじてくっついていたガラスが落ちたのです。同じようにブラブラしているガラスの破片はたくさんありました。ヘルメットをしていても直撃されたら肩などに大けがをしそうです。本当に怖いと思いました。

救出活動に伴って運び出されたガレキで繁華街の通りが埋め尽くされています。ガス会社の作業員が地面を掘り起こしてガス管を露わにしています。文字通り「足の踏み場もない」ような状況になりました。そんな中SBSはもちろん、最

初に言わされた通りTBSラジオ・ニッポン放送・文化放送に電話リポートするのがメインの仕事になりました。

無我夢中の一日が過ぎ、午後8時頃本社から帰社するようにという指示。朝から一緒だったクルーと本社に戻りました。会社の建物に入ったところで我に返つたのでしょう。履いていた靴(スニーカー)に違和感を覚えました。小さい何かが入っているような異物感です。「石ころでも入ったんだろう」と脱いでみました。消防作業の水とガレキの混じった泥水の中でしたから靴はグショグショ。もう処分するしかない状態でした。

中を見ると石ころはなく、かすかに盛り上がっているところがあります。ひっくり返して靴底を見て愕然としました。5センチほどの釘が斜めに刺さっていたのです。釘の先が少しだけ足裏に当たる部分に到達していました。

「もし角度がちょっとでも違っていたら…！」

全身から力が抜けていきました。

《里見親利さんとの出会い》

静岡には、静岡放送の他にテレビ静岡、静岡第一テレビ、静岡朝日テレビの3局の民放があります。その頃、静岡の若者の絶大な人気を得たテレビ番組がありました。静岡第一テレビ(SDT)の「JanJanサタデー(ジャンサタ)」です。音楽・ファッション・様々なアイテムなど若者の欲しがる情報を発信する、毎週土曜日夕方の生放送番組でした。

その前身番組「三上寛のJanJan金曜日」を立ち上げ、続く「ジャンサタ」を軌道に乗せたプロデューサー&ディレクターが里見親利さんでした。

1980年のある日、静岡放送編成部に電話が入りました。SDTからでした。「ケッタウェイズを取材したいのですが、いかがでしょう？」との内容。編成部は丁重に「趣旨は分かりましたがちょっと難しいと思います」と返事をしたそうです。

当時としてはその応対は当然だったでしょう。でも私は、無理を承知で電話を掛けてくださったことが嬉しくて、すぐSDTに電話を入れました。

「JanJanの担当の方をお願いします。」

電話口に出たのが、里見さんでした。

「ごめんなさいね。あの電話入れたのボクなんです。ケッタウェイズがものすごく話題になってて、何でケッタウェイズの情報を入れないんだという視聴者からの声がかなりあったもんですから…。」

穏やかな声と紳士的な話しぶりに、里見さんに会ってみたくなりました。すると、そちらに伺いますよとのこと。恐縮しましたが、その日に当時局内にあった喫茶店でお会いしました。

SDTの開局に合わせて日本テレビから来た話。静岡県の放送局の中で一番若いSDTを如何に軌道に乗せ、根付かせるかという話。「JanJan金曜日」にかける思い。熱く語る姿がそこにありました。

「で、里見さんて何年生まれ？」

「昭和24年ですよ。」

「えっ？ 同い年だ！」

「なんと！（笑い）」

すっかり意気投合してしまったのです。

何度となく電話で話をする仲となったある日、里見さんから

「くんちやん、今度ケッタウェイズの3rdコンサートがあるよね。撮影だけでもできないかな？ SBSのテレビクルーは来るの？」

「分かった。制作の上司に聞いてみるよ。SBSテレビ取材はないし。」

そこで制作総責任者だった平山プロデューサーに相談してみました。平山さんはホットな方で、番組作りやイベント企画進行で先頭に立って突き進んでいくタイプです。1stコンサートの舞台挨拶もしてくださった方で、ケッタウェイズに理解がありました。

「向こうがやりたいと言うのなら、いいんじゃないの。ぼくは面白いと思うよ。」

驚きを感じながらも、すぐに電話しました。平山さんのあの一言が、後で大きな変化を生むことになります。

《ケッタウェイズ3rdコンサート》

1981年5月31日（日）。焼津市民センターでの3rdコンサート当日、静岡第一テレビの撮影クルーが会場にいました。SBSラジオのイベントに「SDT」のロゴ入りカメラが回ったのです。感慨深い光景でした。すべては里見さんの大いなるチャレンジ精神のたまものでした。

その翌週の「JanJan金曜日」の中でコンサートの一部が情報の一つとして放送されたのです。当然担当番組「ぶっちゃけスタジオ Cut in！」にも大変な反響がありました。奇跡のオンオアとして、ハガキがSDTにもSBSにも殺到しました。「仕掛け、大成功だね。」と、いたずらっぽく笑う里見さんの顔が忘れられませ

ん。

その後の、ファーストブレイクコンサート、4thコンサートと「事前告知とコンサート模様」はセットで放送してくれたのです。

《夕やけかわら版 ’81》

ケッタウェイズのコンサートにSBSのカメラが入ることはませんでしたが、応援してくれる制作マンはいました。SBSプロモーションの大山峻おおやましゅんプロデューサー＆ディレクターです。

「夕やけかわら版 ’81」という月～金17:30～17:45から15分のテレビ情報番組を制作していました。パーソナリティは持丸初栄アナもちまるはつえ、のちの荻島夫人です。私は週1で洋楽クリップ情報を担当していました。サードコンサートが近付いてきたある日、大山さんが

「コンサートの事前告知を含めて、ケッタウェイズのミュージック・クリップを作ってみようか？」

と提案してきたのです。喜び勇んで、すぐさまOKしました。

基本的にはスタジオでの演奏シーン。間奏部分で屋外撮影シーンをインサートするというものでした。曲は作詞ケッタウェイズ、作曲荻島正己の「トゥナイト・ザ・ナイト」。屋外シーンは、家康の祀られている久能山東照宮といちご狩りで有名な静岡市久能海岸が舞台。ビートルズの映画「ア・ハード・デイズ・ナイト」の「キャント・バイ・ミー・ラヴ」のシーンを意識して撮影しました。

スタジオでの演奏シーンは、通しで2回ほど演奏し収録しました。バック映像や俯瞰映像も撮りたかったためですが、今見ると不思議なことがあります。当時は誰も気付かなかつたのですが、荻島アナが使用しているギターが途中で替わっているのです。彼の本来のギターの色はブルー。ところが収録ビデオの演奏開始時はイエローのギターを使用しています。実はそれは私のギターです。私は、というとこの時はキーボードを担当していましたから不都合はありません。

そして、別撮りの俯瞰映像。そこでは本来のブルーを使っているのです。で続く全体映像ではイエローに戻っています。荻島アナもどうしてそうなったのか覚えていないと言っていました。一番考えられるのは、ギターの弦が切れた事態ですが何とも確証がありません。

1981年5月29日(金)に放送されました。

《テレビ番組「親の目子の目」サウンドトラック担当》

この年10月24日(土)に民教協(民間放送教育協会)のテレビ企画番組「親の目子の目」の第443回「僕の友達はラジオ」が放送されました。主人公は「ぶつちやけスタジオCut in！」リスナーの高校生たち。私の番組をキーに展開しました。平山プロデューサー、^{ひじかた やすたろう}土方康太郎ディレクターの制作でした。

その時代を生きる若者たちが何を考え何をしようとしているのか、核心に迫ろうとした番組。音楽をケッタウェイズでいこうということになりました。「風よ翼に」という曲をインストゥルメンタル収録してメインテーマとしてタイトルバックに、その他何曲かをBGMとして使用してもらえたのです。「風よ翼に」のインストゥルメンタル化ではストリング・シンセサイザーを使ったのですが、何せ一発録り。手が足りません。そこで録音を担当して下さった制作技術の江成博行さんが、ミキシングをしながらメロディーを弾くという役割を担って下さいました。江成さんは「静岡フィルハーモニー管弦楽団」のバイオリニストであり、音楽的に非常に高いものをお持ちだったので可能だったのです。

《幻のレコード化》

この頃、ケッタウェイズのオリジナル曲をレコードにしようという企画を考えていました。その矢先のサントラ担当だったのです。江成さんにお願いしてとりあえず、ステレオ録音しようということになりました。曲は「トウナイト・ザ・ナイト」「シーズン・オブ・ラブ」「風よ翼に」の3曲。例によって平山プロデューサーに相談しました。

「面白いね。よし、何とか頑張ってみるよ。」

テレビスタジオを使ってレコード用に3曲録音しました。終わったところで、せっかくマイクセッティングもしたんだから、と何曲かステレオ収録してみました。当然すべて一発録りです。「初期のビートルズみたい！」と訳の分からないことを言ってはしゃいだものです。

今か今かと待ちましたが、レコード化のゴーサインは出ません。そしてある日、平山さんが

「悪いな。あの話はボツになったよ。ごめんな…。」

詳しい話はあえて聞きませんでした。

《自主制作レコード化》

市販レコードは夢と消えましたが、その5年後、後述するケッタウェイズ解散の2年後、自主制作を考えてくれた方がいました。番組制作プロダクション(株)クラフトの山田三郎社長と、当時はまだ学生だった高鳥真さんです。山田さんは、ケッタウェイズのライブ映像を撮り続けてくださった方。高鳥さんはのちに東宝のクレイジー・キャッツ映画や若大将シリーズの映画用に収録されたサウンドトラック・テープの掘り起こしに携わったり、その音源を使った市販CD「クレイジー・キャッツ・トラックス」「若大将トラックス」や、またゴジラ映画のサウンドトラック盤制作などに深く関わった人です。

音源は私たちが用意し、高鳥さんが山田さんのアドバイスのもとLPレコード制作を手掛けました。結果、A面8曲・B面9曲。計17曲のLPレコードとなりました。ジングルと呼ばれる番組内で区切りとして使われた短い8曲は1トラックにまとめたため、曲数にすると正確には24曲でした。LPには4人のメッセージや曲解説を載せた解説書までもついていたのです。高鳥さんの制作姿勢がうかがえます。

このLPが完成した直後の1987年3月26日、完成記念イベントをすみやのオレンジホールで開催しました。山田さん撮影のライブ映像を使ってのビデオコンサート。ケッタウェイズ4人も解散以来はじめて全員揃い、ビデオコンサートのあとステージでカラオケにあわせて数曲歌いました。そこでLPの販売をしたのです。

販売と言っても実費販売です。すべては「形にしたかった」という純粹な思いで作られた、収益無しのレコードでした。レコードが予定通り販売できなければ赤字…。高鳥さんは「当時の仲間にお金を借りて、LPの売り上げで返却するということをして何とか乗り切りました。」とおっしゃっています。頭が下がりました。

そのあともケッタウェイズを応援してくださっていた皆さんとの口コミで販売されていきました。

私は、AMゆえにモノラルでしか放送されない曲を、レコードのステレオ音源で楽しんでもらえる、という大きな喜びを感じていました。

なおこのレコードはCD時代を迎えた1999年、高鳥さんの手でCD-Rとして生まれ変わります。やはり後述する「再結成コンサート」の翌々年のことでした。曲もレコードでは時間の関係で収録出来なかつたものに、荻島正己作詞作曲の一曲を加え、29曲構成でした。4人全員のサインをディスク1枚1枚に書き、レコード同様に実費販売されました。なるべくお金を掛けないために、CD-Rに

は解説書は付けず、代わりに高鳥さんはケッタウェイズのホームページ(現在は、<http://www.kettaways.com/>)を立ち上げています。

山田さんと高鳥さんには深く感謝しています。特に高鳥さんには、この本執筆の際にも、当時の記録をベースにしたさまざまな助言をいただきました。高鳥さんは現在、煎茶道「黄櫻弘風流」家元、高鳥真堂さんとして活躍していらっしゃいます。

《ミスターK》

「JanJan金曜日」から「ジャンサタ」に放送曜日は変わりましたが、メインは変わらず三上寛氏、そしてやはり最初からのレギュラーに「ミスターK」という大人気のパーソナリティがいました。本名は北島興おうばくこうさん、SDTの局アナふうりゅうでした。局アナである以上ニュースも読むわけですから、イメージを分離させ思い切ったしゃべりをさせるために里見さんが作ったキャラクターでした。ケッタウェイズのことを番組内で一所懸命紹介してくれていたのも彼だったのです。

里見さんから電話が入りました。

「お願いがあるんだけど。」

「どうしたの？」

「北島のことなんだけど、彼はもともとラジオ志向の人間なんだ。で、ぼくはかねて一度でいいからラジオで思いっきりしゃべらせてやりたいと思っていたんだ。彼をくんちやんの番組ゲストとして入れ込めないかな。頼むよ。」

北島さんには話してはいないとのこと。また平山さんに相談です。

「ケッタウェイズで世話になっているもんな。一回だけだったらいいんじやないか。」

欣喜雀躍、すぐ電話しました。里見さんは大喜びでした。あまり時をおかずには北島くんはラジオスタジオにきました。1983年12月ワンツーオーでした。

当時私の担当番組名は「フリーステーション1. 2. 0」、通称「フリスト」。毎週金曜日21:00~22:20の生放送番組でした。「遠慮なしでいこう！」と約束し番組スタート。結果、しゃべった！しゃべった！ 1時間20分、目一杯しゃべり倒しました。本当に好きだったんですね。

コンビを組んだら面白いものができるだろうな、と思いました。1回しかできないことが残念でなりませんでした。

《ケッタウェイズファーストブレイクコンサート》

ケッタウェイズの練習は週2～3回、深夜0時過ぎから午前5時頃までの間テレビスタジオで行いました。自分たちのルーティンワークである夜勤の終わる時間から早番勤務の始まるまでの時間です。新曲を作ったり、コンサート内でのギャグやコントの練習などやらなければならないことはヤマほどありました。

そのケッタウェイズにも区切りの時が訪れます。荻島アナがTBSから請われて朝ワイド番組「朝のホットライン」のメイン司会を担当することになり、静岡を離れことになったのです。1982年のことでした。当然ながら練習を含めて継続が難しくなります。休止符としてのコンサート「ファーストブレイクコンサート」を企画しました。ひょっとして、本当の区切りになってしまふかも…という思いは、我々だけでなく集まってくれた皆さんのお胸を一杯にしていました。3月25日、清水市民会館でファーストブレイクコンサートは悲鳴に近い歓声で終わりました。

《30時間ラジソン》

この年、SBSは開局30周年を迎えることを記念した「30時間ラジオマラソン ふるさと再発見～わが町に緑を」が企画されました。我々若者番組担当班も何か企画を出そうと毎日議論していました。特に「深夜の時間帯はすべて任せよ」と言われ張り切っていました。

話し合っていく中で、深夜の時間帯だけでなく全時間を通してのイベント企画を立てようという機運が持ち上がりました。番組サブタイトルは「わが町に緑を」、つまりグリーンキャンペーンです。

「そうだ！ キャンペーンカーを走らせよう！」

「ただ走らせたってダメだろう。クイズにしよう。」

「どんな？」

「走行総距離とか…。」

「当たり前すぎてつまんないよ。」

「じゃ、ステッカー作戦はどうだ？」

「ステッカーをどうするわけ？」

「各地を回りながら、みんなに貼っていってもらうのさ。そして30時間後に何枚のステッカーがキャンペーンカーに貼られたかを全編を通してのクイズにするっていうの、どう？」

「でもスクーピーに貼ったら、スクーピーの折角のロゴマークなんかが隠れち

やうし、後ではがすの大変だよ。毎日稼働しているんだから。」

「じゃあ、それ用にレンタカーを借りたらどう？」

「でもどこのを借りる？ 番組本体にはいろんな会社が提供に付くよ。」

「そうだ！ 二手に分かれよう。提供に付いてくれた自動車会社2社に協力を仰ぎ車を借りて、静岡県の東西の端からスタートする訳。そしてそれぞれ中継点を決めて、各中継地でイベントをしながらステッカーを貼ってもらい、

静岡市登呂のSBS本社を目指す！」

結局、トヨタとニッサンのレンタカー会社が格安で貸してくださることになり、愛称を「グリーンランナー」と名付けました。屋根には愛称を書いた看板をセットしたルーフキャリアを付けることも決まりました。

「でもバラバラに貼られていくわけだから、数えるのは大変だね。」

「何言ってんの。残りを数えれば、分かるじゃん。」

「そうか！ 頭いい！」

馬鹿馬鹿しい会話をしながら、楽しく準備していきました。出発地は東は下田
西は新居、中継担当は東が伊藤圭介アナいとうけいすけアナ、西は私となりました。中継地は新聞に地図付きで掲載し、各地ではじょんけん大会を実施しながら展開していくことも決まりました。

1982年10月30日(土)～31日(日)30時間ラジソン(ラジオマラソン)は放送されました。

じょんけん大会、この企画は私に大いなる試練を課しました。元来張り切り屋の私は、最初から飛ばしてしまいました。30時間もあるのに…。

その日のうちに声が枯れ、リポーターとしては最悪の状態になってしまったのです。深夜の担当時間の辛かったこと。全体の流れの中でペース配分を考えるという部分が欠けていたのです。

このことは、その後の特番「ビートルズ・フォーエバーⅡ～Ⅳ」(1989～1991)、51時間ラジオ(2002年11月1日～11月3日)など、長期間・長時間にわたる番組で大きな教訓となりました。

《ケッタウェイズ4thコンサート》

荻島アナが東京に旅立って、ケッタウェイズの活動はピタリと止まりました。「ファーストブレイクコンサート」が事実上の解散コンサートになってしまったかと誰しも思った頃、「4thコンサート」の企画が持ち上がりました。1983年春のことです。

荻島アナは大喜びで週末ごとに戻ってきました。ただ新曲は増やせません。ひたすら復習練習でした。

本番の一週間前のことでした。ドラムの鷹森ディレクターから連絡が入りました。虫垂炎で緊急手術したというのです！

虫垂炎の手術そのものは問題なく終了し、経過も順調とのこと。ひとまず安心しましたが、問題はコンサートです。ドラムを叩けるかどうかは聞くまでもありません。途方に暮れていた時、ベースの佐藤ディレクターが

「そうだ！ 後藤悟くんに頼んでみよう！」
と呼びました。^{ごとうさとる}後藤悟さんは、この前年から「フリーステーション1. 2. 0」のパートナリティの一人として活躍している、フリステメンバーでした。そして、ロックバンド「後藤悟とタランチュラ」のリーダーだったのです。^{やがわとしろう}私たちはタランチュラのメンバーとも親交がありました。そのバンドのドラマー矢川淑朗さんにピンチヒッターをお願いしようという提案だったのです。

矢川さんは快く引き受けてくださいましたが、本番の日付を聞いて非常に驚きました。何せケッタウェイズの曲はほとんどオリジナルです。予定は21曲。

「楽譜はありませんか？」
と矢川さん。ある訳ありません。

「じゃ、とにかく音源をください。」
音源テープを渡したのは本番3日前、合わせたのは実に前日でした。
本番を翌日に控えた夜、矢川さんをSBSのAスタジオに迎え最初で最後の練習。譜面を抱えた姿に、

「それは？」
「ドラム譜です。これがないと叩けないもので。」
なんと矢川さんは徹夜でドラム譜におこしたのです。ドラムの講師でもいらしたからこそできたことですが、知らない曲を21曲譜面におこす、気の遠くなるような作業だったに違いありません。頭が下がりました。

細部を詰めながらの合わせ練習。矢川さんの完璧な演奏に、全員の顔に安堵の表情が浮かんできました。

佳境にさしかかった頃、スタジオの電話が鳴りました。

「浜北市民文化会館から電話が入っています。」
本番の会場の方からの電話でした。
「明日のコンサートのために並んでいる若者がいるんですが…。」

「えっ？ 本当ですか？」

スタジオの中に動搖が広がりました。今までそんなことはありませんでした。心配なのは、深夜だけに不測の事態が起こることです。それまで特番などで深夜の公開生放送をしたことがありました。朝までの放送でしたが、放送終了後は電車・バスなど世の中が動き始めるまで若者たちを会場から出さないと決め、私たちも一緒にいたことがあったのを思い出しました。

「すみません。我々がすぐ行けると良いのですが、そもそもいきません。申し訳ありませんが、会場のロビーに彼らを入れていただくわけにはいきませんか？」

電話に出た方は困惑されていましたが、

「そうですよね。心配ですよね。建物に入れるることは難しいかもしれません
が、安全一番で対応しましょう。」

と答えてくださいました。結局その若者たちは帰宅したとのことでしたが、午前3時には再び並ぶ若者がいたため、会館職員の方が朝まで見守って下さったそうです。もうできないかもしれないかったコンサートへの思いが、それだけ強かつたのでしょう。集まってくれた1500人の若者たちと、温かく対応してくださった会館職員の方に今でも感謝しています。

1983年5月1日(日)13:00、無事コンサートは始まりました。矢川さんの力強く正確なドラムに支えられ、スムーズに進行。鷹森ディレクターは会場には来られませんでしたが、病室で録音した声を会場に流しました。

「皆さん…申し訳ありません。今はこういう状態ですのでしばらく休養させて
いただきます。」

切ない声が響きます。そして最後に、

「病床からこの苦しみと痛さを皆さんに分けてあげたい」との名セリフを残して声は終わり、会場は爆笑の渦となりました。

《フリステ最終回》

「フリーステーション1. 2. 0」に終わりの時がやってきました。パーソナリティもかなり入れ替わり、当初のメンバーで残っているのは私だけになりました。

「そろそろ昼ワイドをやってもいい年齢になったんじゃないかな。」との声もあってフリステを卒業することになり、同時に番組も終了することになりました。

SDTの里見さんに連絡すると、最終回を撮影するとの申し出。それまでのいきさつもあり、最終回なんだからと上司からの「OK」も出ました。

1984年4月6日(金)、その日は来ました。番組の打合せ段階からSDTのカメラが回っています。東京から荻島アナ、後半のフリステ仲間伊藤圭介アナ、そしてミスターKも駆けつけ、賑やかに放送しました。

「はばたけヤングアワー」「1400デンリクアワー」「ぶっちやけスタジオCut in!」「フリーステーション1. 2. 0」馬車馬のように駆け抜けた7年でした。

SDTは、翌日の4月7日(土)から3週にわたってこの模様を放送してくれました。オンエア2週目の4月14日、「ジャンサタ」は静岡駅ビルパルシェ屋上からの公開生放送。ゲストはチェックカーズ、「涙のリクエスト」「ギザギザハートの子守唄」などを熱唱。それでもきちんとコーナーを作つて放送してくれました。

《ケッタウェイズファイナルコンサート》

母体だったフリステの終了は、当然ながらケッタウェイズの存続に大きな影響を与えることになりました。メンバーが東京と静岡に離れて練習もままならず、再び活動停止状態となっているケッタウェイズ。どう終焉の時を迎えるかを考えなければならないのは目に見えしていました。

本心は「解散」は嫌でした。かなり家庭生活も犠牲にしながら取り組んできたプロジェクトです。練習は決まってスタジオの空く深夜。多い時は毎月ライブがあり、新曲・コント・その進行など準備しなければならなかつた様々なことが浮かんでもくると、同じことは二度とできないのではないかと思え、残念でならなかつたのです。

でも、その2文字から目をそらすことはできませんでした。上司からの問い合わせがあった時、

「分かりました。解散します。ただ区切りを付けさせていただけますか？」

こうして「ファイナルコンサート」の企画に入りました。会場はファーストコンサートをやつた清水市民会館、日取りはフリステが終わった年1984年10月13日(土)に決まりました。4thコンサートから1年と5ヶ月でした。

SDTの里見さんにその旨伝えると、非常に残念がつて

「こっちも何か考えるよ」

と言ってくれました。荻島アナにも、無理のない範囲で(無理のないわけはないのですが)練習に戻つて来て欲しいと話し、練習スケジュールの設定。さらにケ

ツタウェイズの結成から今日までの記録を綴った冊子の製作も決まりました。番組プレゼントだけでなく、希望者には実費で分けようという企画になりました。

《ジャンサタ生出演》

ファイナルが近づいてきたある日、里見さんから電話がかかってきました。

「くんちゃん、ジャンサタに生出演しない？」

「えっ？ 大丈夫なの？」

「こっちは問題ないよ。VTRではもう何度も出てるじゃん。」

上司に相談しました。前述の神村さん、平山さん、その時の制作チーフはせがわゆういち長谷川雄一さん。異口同音に

「SDTが出てくるんなら、出ればいいんじゃないか？ 宣伝になるし、

何と言っても最後だし。」

当時、私は「夕焼け得ダネ情報」という当時は珍しかったテレビショッピングを担当していました。里見さんからの出演提示日はたまたまその収録日と重なってしまったのです。様々な要因から両方とも日は変えられません。SBSのスタッフと相談して、収録時間を工夫しできるだけ早めに向かえるようにすることにしましたが、ジャンサタの放送開始時間17:10に間に合うかどうか微妙でした。里見さんにもその旨連絡、着いたところでそのまま出演ということになりました。

1984年9月29日(土)、ジャンサタ放送日。SDTには17:00少し前に着き、里見さんと面会。でも本番直前でちゃんと打合せができる訳もなく、ましてやリハーサルなどさらさらできる訳がありません。結果、飛び込み出演と何ら変わらぬ本番を迎えることになりました。

SDT玄関でミスターKと出会うところからオンエア。そのままミスターKの案内でJスタジオまでなだれ込み。ファイナルコンサートの告知、そのために作った冊子20冊をジャンサタファンにプレゼントすることなどを話し、無事終了しました。他局生出演は非常に楽しい経験でした。

《里見さんとの約束》

里見さんは頻繁に電話で話をしながら、酒を酌み交わしたことが一回もありませんでした。それだけお互い忙しかったと言えます。

「くんちゃん、俺二徹だよ。素材の編集がつまつててさ。」

二徹(にてつ)とは二日間続けて徹夜することです。

「馬鹿言ってるよ。学生じゃないんだから。そんなことしてると死ぬぞ。」

「大丈夫だよ。俺は、高校以上が原則の駅伝に中学生で出たスプリンターだぜ。身体だけは自信があるんだ。それより、くんちやんたち毎年大晦日から元日にかけてラジオ特番やってるじゃん。」

「ああ、恒例でやってるよ。」

「今度さ、うちで年末年始特番をやる時があったら、どこかで落ち合わない？ 浅間神社あたりで偶然遭遇するってわけ。知らない仲じやないからヤアヤアと挨拶したら、結果ラテ・サイマルってことになるよね？」

「ラテ・サイマル」というのは、ラジオとテレビの同一プログラム同時放送ということです。この場合同一プログラムではありませんが、重なる部分は同一になるという意味では言えなくもないかもしれません。

「SBSでは珍しくないかもしれないけど、うちのようなテレビ単局ではあり得ないし、第一痛快じやん。俺さあ、放送局間の壁というか垣根を取っ払いしたいんだ。普段は別々に番組を作って競争して切磋琢磨。でもある時は手をつけないで静岡県の民放特番をみんなで展開する。夢なんだ…。」

熱っぽく語るその声は、私の心を揺さぶりました。いつかやろう！ 絶対やろう！ そう誓い合って電話を切りました。

《里見さんとの別れ》

1985年10月10日(木)体育の日のことです。何の仕事をしていたのか覚えていません。スタッフが、

「くんちやん、第一から電話が入っているよ。」

「里見ちゃんなんだな。後でかけるって言って。」

「里見さんじゃなくて、中条さんって言っているよ。」

電話を下さったのは中条龍夫さんちゅうじょうりゆう。里見さんの右腕ディレクターでした。

そこから定かではありません。そのまま電話に出たのか、合間を見てかけ直したのか。

「どうしたの？」

「里見が死にました。」

「えっ？ なに？」

「里見が死にました。今朝、奥様が起きたら亡くなっていたそうです。」

…青天の霹靂でした。言葉が出ませんでした。すぐ妻に連絡し、一緒に急い

で彼の自宅に駆け付けました。

奥さんは私の顔を見るなり泣き崩れました。

里見ちゃんは寝ていました。眠っているようでした。生きている姿そのままでした。もう何が何だか分かりません。だって、元気だったじゃん！

しばらくして奥さんがポツポツ話し始めました。昨夜はいつものように二人で焼酎で晩酌を楽しんだこと。翌日は朝からロケに出ることなどを話しながら、夫は午前0時位、自分は午前1時位に床についたこと。

「何も変わったことはなかったんです。私が起きたら布団から足が出てました。入れあげようと触ったら、しが冷たかったんです。あれっと思って頭の方に回つたら…。」

里見さんは自分にできることは自分でやってしまう方でした。「任せるところは任せないと身体がいくつあっても足りないよ。」と言っても「はいはい。」人が信じられないのではなくて、気持ちが先へ先へと行くので待っていられなかつたのだと思います。それが前述の「二徹」につながっていくのでしょうか。後悔は「そんなことしてると死ぬぞ。」と言ってしまったことです。この時から私は誰かに向かつて「生きるの死ぬの」を言うのをやめました。

「ラテ・サイマル」も夢で終わりました。里見さんが生きていたら、きっとやっていたでしょう。それが吉と出たか、凶と出たか。

里見親利さん、享年36でした。

《おめでとうニューイヤーステーション》

里見さんがラテ・サイマルの候補番組として提案したのが「おめでとうニューイヤーステーション」でした。途中抜けた年はありますが、1983年～1989年にかけて元日1:00～7:00の6時間、正月ラジオ特番を放送しました。出演者は、若者向け番組担当者とディレクター。各地からの新春中継、リスナーの新年の抱負と願望、ゲーム、ラジオドラマなどを放送しました。

忘れられないのは、「初日の出」中継でした。静岡市の日の出時刻は6:54。番組内で「初日の出、おめでとう！」をやろうと、何人かがスタジオから飛び出して海岸などいろいろな場所から中継をしました。快晴なのですが水平線の上に雲の層があるので。標高308mの日本平の上から見ても同じでした。番組終了は6:59、間に合いませんでした。冬には避けられない現象のようです。

そこで翌年会社にヘリコプターの使用願いを出しました。ヘリならば見えるの

ではないか、と思ったからです。経費の問題もありましたが、何とか許可がおりました。問題は誰が乗るかです。見渡すと手を挙げる者がいません。恐る恐る「ぼく、乗っていいかな？」と問い合わせてみると、「どうぞ！」との一斉コメント。それから何年か続けて乗ることになりました。

結果は駿河湾上空高度3500mで、放送終了ギリギリの6:58:50過ぎ、

「見えた！ バンザイ！」

で終わった記憶があります。(6:59:00が、正確な終了時刻でした)

中継終了後、帰路パイロットの方が「富士山に寄っていきましょうか。」と言われたので「是非！」と答えました。地上とは全然違う角度で富士山が近づいてきます。富士山と言えば強く印象に残っているのは、前述の「お昼のチャッキリ大放送」で登った時山頂で見た夜空です。時間帯こそ違え、あの時見上げていた場所を今回は見下ろしている…。感動でした。

《またアクロバット？》

富士山に近づくとヘリの機体が揺れ始めました。パイロットが、

「富士山の周りは気流が悪いからね。引き返しましょう。」

安全が一番です。機体が安定したところで再び話しかけました。

「ヘリって飛行機とは大分違うんでしょうね。」

「違いますね。」

「以前、飛行機のアクロバット飛行を経験したことがあるんですが、あんな飛行はヘリには無理なんでしょうね。」

「そんなことはありません。宙返りだってできますよ。今はやりませんけどね。」

「もし、エンジンが止まつたら大変でしょうね。」

「いえいえ、メインとテールの回転翼に異常がなければ問題はありません。止めてみましょうか？」

「いえ、結構です。」

私は皆から「実験くん」と呼ばれるくらい、何でも試してみないと気の済まないたちですが、これは本当に「結構」でした。ヘリコプターに乗るのは嫌いではありません。というか割と好きです。でも実は「高所恐怖症」であることも事実なのです。もしエンジンが掛からなかつたらどうしよう？ そう考えると膝から下の力が抜けてしまいました。「ギャラントメン」のアクロバット飛行の時は、パイロットの方の有無を言わさぬ行動で力が抜けるヒマもなかったというのが正直なところだった

のです。

もしエンジンが止まっても滑空しながらの操縦は可能で、高度の余裕さえあれば安全な場所を見つけて着陸することはできるそうです。そういった事態では飛行機よりも安全と言えるとのことでした。

《チャッキリ大放送》

フリーステーションを終了したあと、1984年4月から担当したのが午後ワイドラジオ番組「チャッキリ大放送」(月～金ベルト)でした。^{うえふじみきよ}上藤美紀代アナウンサーとのコンビでスタート。タイトルも「くんちゃん・みきよの チャッキリ大放送」としました。

それまで私はほとんど一人で放送してきました。スタジオに後輩たちが乱入してくるのはショッちゅうでしたが、レギュラーでコンビしゃべりをするのは、デンリク直前の「お昼のチャッキリ大放送」1年間だけでした。

若者向け番組を卒業した気はありませんでしたが、30代も半ばでしたから午後ワイド番組も今度はやってみたい気持ちも湧いていました。上藤アナとのコンビネーションは抜群でした。私のちょっとした不用意な言葉を彼女は聞き逃しません。どんどん追及します。私は何とかうまく切り抜けようと知っている限りの言葉と理屈ではぐらかそうとします。その「ごまかし」の皮を鋭く剥がし、迫ってくる上藤アナ。追い詰められた私は、最終的に曲かCMに逃げたのでした。コンビネーションの醍醐味を初めて味わいました。

上藤アナの声質は非常につややかで魅力に溢れており、男性営業マンやドライバーの絶大な人気を得ていました。現在は、声で人を癒す手法「ボイス・セラピー」という新領域を拓き「ボイス・セラピー研究家」として活躍されています。なるべくしてそうなった、と言えるのではないかと思っています。

制作チーフは杉山喜徳ディレクター。^{すぎやまとしのり}月～金、すべてを仕切っていました。一週間ほとんど一緒ですから、制作陣とアナウンサーはファミリーのようでした。

その杉山ディレクターとの出会いが、私の人生を大きく変えることになりました。

《パソコンとの出会い》

杉山ディレクターは、当時はまだ一般的ではなかったパソコンに大きな興味を持っていました。チャッキリ大放送を担当して1年が過ぎた頃、

「ねえ、くんちゃん。パソコンってどう思う？」

「そうだね。イメージとしては根暗な人の趣味って感じ。」

「そんなことないんだよ。うちに来て見てみない？」

「まあ、いいよ。」

当時は世間全体の反応もそんなものでした。彼の自宅を訪ねると、NECのPC8801Mark IIというパソコンが待ち受けていました。杉山さんはフロッピーディスクを持ち出し、起動。ゲームが立ち上りました。テーブルゲームのインベーダーなどを始めとするシューティングゲームは知っていましたが、あまり好きではありませんでした。でもそのゲームはその類ではありません。

「これは何？」

「アドベンチャーゲームと言うんだ。」

実際に動かしてみると、アドベンチャー(冒険)というよりは、画面の中を探りながら、ストーリーの展開を楽しむゲームでした。これが実に面白い！

「楽しいでしょ？ 今、このパソコンの新製品が出ていて、絵も音もグレードアップしているんだよ。買ったら、このゲーム貸してあげるんだけどな。」

しばらくして何を血迷ったのか、私は彼の言っていた新製品PC8801Mark II SRを購入してしまったのです。ディスプレイと合わせると40万円以上！

「ザ・デストラップ」「オホーツクに消ゆ」など4本のゲームを楽しんだところで、杉山ディレクターから、

「番組の企画書を書きたいんだけど、くんちゃんの名前入れていいかな？」

「何の番組？」

「パソコンの番組。」

「えっ？ テレビ？」

「うん、ラジオ。」

「無理じゃないの。」

「無理かもしれないけど、出してみたいんだ。」

「何でボク？」

「パソコン持っているアナウンサーは、くんちゃんしかいないじゃん。」

なるほど。まあ、いずれにしろマイナー(当時は)なものだし、画面無しで放送するのは不可能とも思えたので、気軽に「いいよ。」と返事をしていました。

《パソコン・アタック・クラブ》

ところが、通ってしまったのです。未だに不思議です。でも通ってしまったものは仕方ない、やるしかありません。

「パソコンを持っているだけの自分が、どうしゃべればいいのかな？」

「大丈夫さ。やったゲームなんかについてしゃべっていればOK。」

半信半疑です。第一、反応があるのだろうか？ ハガキすら来ないのでないか？ 入社以来、初めてあやふやな気持ちで番組開始を迎えたのです。

冒頭のあいさつで、自分はゲーム4本の経験しかないこと、ゲームの楽しさなどを含めた情報交換の場にしたいことなどを説明し、1985年10月「パソコン・アタック・クラブ」がスタートしました。

開始2週目。それほど多くはないのですがハガキが来ているではありませんか！ 喜んで目を通しました。…が、分からぬのです。内容が分かりません。字は読みます。でも意味が分からぬのです。杉山ディレクターに一枚ずつ見せながら、どう読むかそしてどう反応するかを聞き放送に臨みました。

そして3週目、…やはり内容が分かりません。すでにハガキが来るのが怖い状態に陥っていました。初めて番組を降りたいと思いました。でも始まって間もない番組、他に頼む人もいません。本当に自分でパソコンを持っているアナウンサーはいなかつたのです。ノイローゼになりそうでした。

開始から一月経った11月初旬、杉山ディレクターが私にA4数十枚の束を渡してきました。アルファベットと数字の羅列が印刷されています。

「何？ これ。」

「プログラムだよ。ベイシックという言語で組んである。」

「どうしろと？」

「行き詰まっているみたいだから、気分を変えるためにも打ち込んでみたら？」

「打ち込むって？」

「プログラムをパソコンに入力することさ。」

それが、彼自身の作った住所録のプログラムであること。とにかく何も考えずにキーボードを叩いて、同じ文字列を入力することを提案してきたのです。藁にもすがる思いだった私は、一心不乱に打ち込みました。もちろん一日では終わません。その日にやれたところまでを記録(セーブ)しておくやり方を教わり、およそ一ヶ月で打ち終わりました。

《シンタックス・エラー》

打ち終わった時は、何を打っているのか訳が分かっていないにもかかわらず妙な達成感がありました。

「終わったよ！」

「ご苦労様、頑張ったよね。じゃ、きょう自宅に戻ったら早速走らせてみよう。」

「走らせる？」

「そう、打ち込んだだけじゃ何も始まらないからね。」

「どうやって？」

「ファイルを読み込んだところで、〈RUN〉と打てばいいんだよ。」

仕事が終わり、急いで帰るとパソコンの前に座りました。そして、ワクワクしながら、〈RUN〉と打ちました。

ところが、…何も起きません。5分経っても、10分経っても何も起きません。30分待ったところで彼に電話をしました。

「何も起きないんだけど…。」

「えーっ、ピート音がして〈Syntax Error〉という文字が出てこなかった？」

「何も出てこないよ。」

「おかしいな。〈RUN〉と打った？」

「打ったよ。」

「それで？」

「だから、〈RUN〉と打ったよ。」

「その後は？」

「その後って？」

「リターンキーは？」

「打ってないよ。」

「打たなきやだめじやん！」

そうです。〈RUN〉つまり〈走れ〉と命令しても、その命令を確定してパソコンに伝えるためにはリターンキーを押さなければならなかつたのです。

「プログラムを入力して各行を打ち終わると、必ずリターンキーを押すように言ったでしょ？ それと同じだよ。」

深く考えず儀式のようにリターンキーを押していた自分。本当に無知でした。そして、押しました、リターンキーを…。

すると、ピート音がして、画面に〈Syntax Error〉という文字が！

「バンザイ！ 出た！」

「おめでとう！ というか本当はめでたくないんだけど。」

〈Syntax Error(シンタックス・エラー)〉というのは、文法的エラーを指します。初心者は数字の〈1〉と小文字の〈l〉、大文字の〈I〉を間違えて打ってしまいがちで、一番よく出るエラーだったのです。

《プログラミング》

修正に修正を重ね、数日後画面が初めて見るものに変わりました。プログラムが正常に動作したのです。「住所録」のメニュー画面でした。メニューを見れば操作は分かります。そこで湧いてきたのはプログラムの中身への興味でした。何故アルファベットと数字の組み合わせで住所録が作れるのか。ベイシック言語とは何か。疑問が山のように吹き出てきました。

その翌日から、杉山ディレクターの地獄が始まりました。プログラムの1行目からその意味を聞きまくったのです。容赦しませんでした。精神的にヘトヘトになったと思います。でも彼も我慢強く、強靭でした。丁寧に説明してくれた杉山ディレクターには今でも感謝しています。

意味が分かってきたら、自分なりの住所録に改造したくなりました。ひと月ほどで改造に成功したら、今度は妻のピアノの楽譜のデータベース・プログラムに取り組みました。住所録よりは複雑でしたが、2ヶ月ほどで完成しました。

もう夢中です。次から次へと面白いことが出てきます。いろいろ学ぶにつれてベイシック言語の限界も見えてきました。するとその限界を克服するのはコンピューターに一番近い言語、「マシン語」と教えられました。マシン語の先生を捜します。するとなんと身近にいらしたのです。親しくしていただいていたパソコンショップ「すみやパソコンアイランド」の店長川辺剛さんかわべごうでした。しかも同じマンションにいらしたのです。

コンピューターは基本的に「足し算」しか出来ないこと、「引き算」をするためには「補数」という概念を使うことなど、よく考えられた論理学であることなどなど。毎週水曜日川辺さんのお宅に伺い、みっちり教わりました。本当に奥が深い。

番組では、初代アドバイザーの高倉純たかくらじゅんさんにはベイシックのキモを、2代目アドバイザーの村上清治むらかみせいじさんにはマシン語とコンピューターウィルスについて詳しく教わりました。特に村上さんの経営するコンピューターウィルスのワクチンプログラム開発会社「ジェード」には毎日のように行き、置いてある書籍を読みまくり

ました。そして必要な本をチェックしては書店に走る。我が儘を許して下さったことに感謝しています。

パソコン・アタック・クラブは生涯の友パソコンに出会わせてくれた、かけがえのない番組になりました。

《NEC98パラダイス》

パソコン・アタック・クラブは9年半続きました。その終了を残念に思って下さる方がいました。パソコンメーカーNECに当時お勤めの石原由美さんと電通の竹下卓さんでした。お二人を始めとする方々の尽力でパソコン・アタック・クラブ終了の3ヶ月後、1995年6月「NEC98パラダイス」がスタートしました。

制作は、パソコン・アタック・クラブの途中で杉山ディレクターから引き継いだ大橋善一ディレクターがそのまま担当してくれました。大橋ディレクターは大変だったと思います。パソコンは好きでも嫌いでもなかったからです。担当が決まってから懸命に勉強していました。努力の人でした。出演者は、プログラマーの杉山一樹さんをアドバイザーに迎え、秘書として橋本奈都江アナが加わりました。

担当を告げられた当初、不安だった橋本アナは、

「國本先輩、私は何を勉強しておけばいいんでしょうか？」
と聞いてきました。

「なんにもしなくていいよ。」「えっ？ でも少しごらいはやっておかないとついて行けないのでは…。」「全然知らない方がいいんだよ。そして、ぼくらの言っていることで分からな
いことがあつたら、どんどん質問して欲しいんだ。ラジオを聴いている人の中
のビギナーレスナー代表だと思って。」「全く勉強しなくていいんですか？」
「そう、むしろ勉強しないでくれる？ その方がありがたい。」「安心しました。(笑)」

そう言っていた橋本アナ。番組がスタートして間もなくパソコンを買ってしまつたのです。話を聞いているうちに湧いてくる興味と疑問に耐えられなくなつて買った、と言っていました。時はすでにインターネットの時代。彼女はぐんぐんグレードアップし、あつという間にインターネットのホームページ作成言語「HTML」をマスターしてしまつたのです。HTMLについては、

「橋本先生、これについてはどうなんですかね？」

「あ、原理さえ分かれば簡単ですよ。これはですね…。」

彼女に説明してもらうことも多くなりました。

門前の小僧ならぬ、門の中に飛び込んだ女性アナ。パソコンについて無知な秘書を望んだのに、あっという間に専門家になってしまったので、

「秘書を代えなきやいけないね。」

「断固、阻止します！」

と橋本アナ。彼女にとつてもパソコンは生涯の友になったようです。

このNEC98パラダイスでは、番組自体をリアルオーディオファイルにして番組ホームページに載せました。放送後にインターネットでアクセスしてくれれば、聞き逃した人でも放送を聴くことができたのです。インターネット放送、ストリーム放送などが始まる以前の話です。作成・管理を担当したのは杉山一樹さんでした。

パソコン・アタック・クラブと合わせるとパソコン番組は、合計14年5ヶ月担当しました。

《朝一番！SBSニュースワイド》

1985年、朝6:00からの30分ニュース番組「朝一番！SBSニュースワイド」が始まりました。私は翌年の1986年10月から水木金の3日間を3年間担当しました。午前3:30起床。4:30出社。5:00のラジオニュース担当。6:00からのワイド本番。7:30頃のテレビ天気予報担当がルーティンワークでした。

ストレートニュースだけでなく、現地では夕方の野村證券ニューヨークと電話で繋いでニューヨーク市場の円相場とダウ工業株の情報リポートなども放送し、また違う勉強となりました。^{さのよしひさ}佐野善久^{こうかひろし}デスク、^{こづかひろし}小塙博デスクにいろいろ教わりました。ニュースキャスターの何たるかを学ぶことが出来ました。

《しまった事件》

この番組は、数々のエピソードを生みました。

1987年6月4日。気象協会の猪飼章吾さんから引き取ってCMに移る時、カフ（マイクのオンオフスイッチで、下げたままだと音が出力されない）を上げ忘れてしゃべり始めてしまいました。調整室スタッフがすぐ気付き、強制的にマイクを生かしたのですが、私は分かっていません。しゃべり終わってカフを見た瞬間、

思わず「しまった！」と言ってしまったのです。

放送はしゃべりの頭の部分が欠けた形になった上に、CMに移る時のフィールドカメラ映像(気象情報などで使用される屋外映像)に乗せて「しまった！」が流れてしまいました。

《くしゃみ事件》

1987年7月17日。くしゃみが出そうで困ったプロアディレクター。私の隣の席からそつと離れてスタジオ奥の大道具エリアに行き、押さえたくしゃみをしました。しかし出物腫れ物、いざとなったらコントロールなんかできません。押さえようとしたばかりに、例えは悪いですがウシガエルがゲップをしたような何とも言えない音が響き渡ったのです。

カメラマンの肩が揺れています。スタジオの中に笑いウイルスが蔓延しました。読むのは地獄です。放送はVTRに乗せての行事紹介コーナーで、幸い顔は映りませんが何回もマイクのカフを下げて深呼吸しながら読みました。くしゃみの我慢も大変ですが、笑いの我慢も大変です。過去に担当したフリートークの番組が懐かしくなった瞬間でした。

《違いますかよろしいですか事件》

1989年1月26日。ニュース項目の確認不足で、用意された素材と私の持った原稿の順番が違っていたものです。読み始めた原稿とニュースタイトルのスーパーが違います。しかしカメラと原稿に目をやっている私には分かりません。隣のプロアディレクターが違うことを伝えてきます。では、何を読めば良いのかフロアに尋ねます。フロアは調整室と連絡を取りながら対策に苦慮します。結局私が読み始めてしまったニュースでいくことに決定。もう一度読み直すことになったという顛末です。

「えーっと、ニュースが違いますか？

うなぎ、いきますか？

はい、はい、分かりました。

違いますか？

よろしいですか、このニュース。

失礼しました。」

この回以降、確認作業を厳しくしたのは言うまでもありません。うなぎのニュー

ス項目があつたのかどうかは覚えてません。

《鼻血事件》

自宅の改造工事をしていました。マンションでしたので、当然ながらあまり遅くまで作業することはできません。大工さんはとても丁寧な方で、

「一日でも早く仕上げてあげるね。」

と、翌日の工事のために音の出ない準備作業を毎夜 21 時頃までやってくれていました。その親切で明るい性格に、私もついつい話しながら作業の終わるまで付き合っていました。大工さんが帰宅されてから、夕食とお風呂。就寝するのは深夜0時頃でした。もともと夜型であることと、普段もニュースが気になって0時位までは起きていることが多かったので気にしてはいませんでした。しかし、放送担当曜日の3日間は睡眠時間が3~4時間しかとれませんでしたから、疲れは溜まっていたのでしょう。

1988年8月12日(金)、その日は最初から何か変でした。何か集中力が欠けているような、普段と違うものを感じていました。そして、番組が始まつてまだあまり時間経過していない6:07頃スポーツニュースの最中でした。鼻がムズムズつとしたかと思うと何かが鼻の中から走ったのです。鼻水なら余程ひどい風邪でない限り、割とゆっくり出てきます。風邪の症状もないのに「走った」のです。すぐに鼻血だと分かりました。下を見るとワイシャツとジャケットの一部が赤く染まっています。

その瞬間、画面はプロ野球の結果を表示していて映ってはいませんでしたが、それが終われば天気予報への振り(受け渡しのしゃべり)があります。5~6秒しかないので、どうしようもこうしようもありません。手で鼻を覆うようにした姿で映つてしましました。しかも、しゃべり始めた瞬間その手が鼻の下に触れてしまったのです。赤い筋で済んだものが、横に流れてしまいました。調整室スタッフが素早く気象協会の猪飼さん(何故かこの時も猪飼さん)に切り替えてくれましたが、しっかり映つてしまいました。猪飼さんは精神的に大変だったろうと思います。画面上は別ですが、席は右隣です。何が起こっているかははつきり分かっています。

やっとCMになりました。左隣にフロアディレクターとして座っていた佐野デスクがすぐ叫びます。

「ティッシュ！ くんちやん、上を向いて！」

首の後ろをトントンと軽く叩きます。当時は鼻血が出るとそうしたものでした。ロール状になったティッシュが届きました。ティッシュ？

「ごめん！ ティッシュが無かったからトイレに行って持ってきた！」

別のスタッフが叫びました。トイレットペーパーだろうとなんだろうと、とにかく拭いて鼻血を止めなければいけません。幸い服の赤い跡はテーブルに隠れて見えません。問題は顔に付いた血を拭き取り、さらなる被害を防止するためにペーパーを丸めて右の鼻の穴に入れました。ただ、入れただけでは小鼻が膨らんでいます。小鼻を上から押さえて形を整え、

「佐野さん、形どうですか？」

「大丈夫、普段通りだよ。目立たないと思う！」

1分のCMチャンスの中での出来事でした。放送は再びスタジオへ。何事もなかったかのように番組は進行していきます。後は何とか乗り切り、それ以上鼻血が吹き出ることもなく終了しました。

終わるとみんなが、「大丈夫？」と聞いてくれますが、みんな笑いをこらえています。

「いやあ、いろいろあって疲れが溜まってたもんですから。」

「そうでしょ、そうでしょ。」

妙な相槌を打ってくれます。自分自身の情けなさは頂点に達していました。ところが、それはまだ頂点ではなかったのです。

番組終了後、当然ながらオンエア上はどうだったのか気になり、番組の録画を見ました。想像したとおりの画面に、

「そうだよね。映ってないわけ無いよね。」

そして、CM明け。スタジオ。私が冷静を装ってしゃべっています。

「あ～～っ！！！」

思わず叫びました。

「鼻が、鼻が、鼻の穴が…白い！！！」

普段は何気なく見ているので気が付いていませんでしたが、鼻の穴の中は影になるので黒っぽく見えるのが自然です。詰めたペーパーは白。冷静に考えればかなりの違和感があるのは当然です。でも、あまりの事態に本番では誰も気付かせませんでした。後日のデスクやスタッフとの会話。

「ああいう場合は、ペーパーを黒く塗った方がいいな。」

「でも、入れる前には塗れないし、入れてから慌てて塗ると大宮デン助になつ

ちやうかも…。」

現代は黒いティッシュがありますから、万が一に備えてスタジオに用意しておいてもいいかもしれません(笑)。一世を風靡した大宮デン助も、今となっては分からぬ人が多いでしょうね。

《記録の承諾》

しばらくして、報道の五味和文記者が、

「國本さん、あれ記録に残しておきたいんだけど、ダメ？」

「何を？」

「鼻血…。なかなか無いことだからさ、貴重だと思って。」

「いいよ。好きにして。」

別に私の人間性がさらに落ちるわけも無し、と思って承諾しました。彼は重ねて、その他のハプニングもついでに残して良いかを尋ねましたので「OK」を伝えました。ただ、CM明けの白鼻映像は残されませんでした。五味さんに後で聞いたら、あまりに悲惨であれだけを残すのが精一杯だったと言っていました。

このVTRがその後、TBSテレビで放送されることになるのです。

《TBSの第1回NG大賞特番》

それから何年か経ったある日、五味記者が私の元にやってきました。

「TBSが第1回NG大賞特番をやりたいので、候補を出して欲しいという依頼が来てるんだけど。あれ出していいかな？」

「賑やかに欲しいんだろ。別に今更どうこうないよ。でもさ、あれは生放送なんだから〈NG〉じゃないよ。それでも良ければどうぞ。」

「NG」は「No Good」の略。本来は録画などで失敗してやり直した時の失敗部分を指す言葉です。生放送ではあり得ません。

出品が決まった後、特番への出演依頼もありましたが収録日に仕事が重なり、出演はしませんでした。放送日が数日後に迫ったあたりで「賞を取ったらしい」という話を聞きました。伝えてくれた編成マンも詳しくは知らなかつたようです。

オンエアは1992年4月1日(水)でした。鼻血のシーンでスタジオ中は大笑いです。バラエティ番組のシーンではなくニュース番組の最中だったから可笑しかったんですね。そして番組最後に賞の発表。大賞ではありませんでしたが、JN賞をもらっていました。賞金は30万円、副賞がお米100Kgでした。結構な賞

品でびっくりしました。賞金は、所属する報道制作局の報道部・制作部・アナウンス部で3分配。米は社員食堂に回し、社員全員で食べました。

《TBS、2度目のオンエア》

2001年、制作マンの一人が「TBSでまたあの映像を使いたいって言ってきてるけど、いい？」と聞いてきました。すでに放送されていますし、賞もいただいたので断る理由もありませんでしたからOKしました。

こうして、2001年3月2日「日本列島スクープ映像大賞」で鼻血シーンはTBSテレビで2度目のオンエアを迎えたのです。しかもまた賞をいただきました。今度は「スクープ映像特別賞」でした。賞状とトロフィーが送られてきました。

日付と番組タイトルがしっかりと分かっているのは、賞状とトロフィーがあるのと写真誌「FLASH」の取材を受けて3月27日号に掲載されたからです。賞状とトロフィーと写真誌「FLASH」は大切に保存しております。

それから「鼻血シーン」は何度かTBSの素材として流れました。3度目以降は承諾を求める連絡もなくなりました。そして2011年7月1日「JNN蔵出しSP超ブッ飛び映像祭3」で再び放送されたのです。しかもこの番組内で3回流れました。3回目はエンディングのラストカットでした。

《愛すべき後輩たち》

1987(S62)10月から若者向け番組「くんちゃんのなんでもナイト」が始まりました。パソコン番組も一緒にやっている大橋ディレクターと、岡村智明ディレクターの担当でした。「朝一番！SBSニュースワイド」と2年重なっています。岡村ディレクターはアイディアマンでした。大橋善一ディレクターをキャラクター化した「ぜん(善)ちや～ん大魔王」を作り出し、リスナー参加のラジオゲーム「スペースランナー」の重要ファクターとして位置付けたりもしました。

「スペースランナー」は、「ぜんちや～ん大魔王」の酒池肉林攻撃に負けて捕らわれている宇宙特捜隊の國本隊長を助けるというゲーム。救出するためには5桁の数字キーを探さなければならない。猶予は60秒。隊長を救出出来たら、番組オリジナルグッズがもらえるというものでした。数字キーは、ある時期からアルファベットキーに変わりましたが、ゲーム参加希望ハガキが殺到しました。単純でしたが、抜群に面白いラジオゲームでした。

「くんちゃんのなんでもナイト」は最初、土曜日の22:00からの30分生放送で

した。一人しゃべりの番組だったのですが、直前の番組「ニヨミとミユキのペペーミントタイム」担当の鈴木如巳アナと木曾美雪アナがそのまま残って出演し始めてから、他の後輩たちも放送に参加するようになっていきました。

番組が枠大していき、最終的に21:00～23:00の2時間生放送になりました。レギュラーとして相馬知実アナが加わり、渡辺千晃アナ、吉本寿アナ、宮田晶子アナ、星野由美子アナ、大石岳志アナ、野田靖博アナなど、勤務時間外にもかかわらず(勤務時間外だったからこそ)やってきました。

番組開始30分くらい前になると、なんとなく集まり始めます。番組が始まると全員キラキラした目でしゃべり始めます。日によっては、私がほとんどしゃべる場所が無くなるくらいの時もありました。皆フリートークに飢えていたのです。特に宮田アナはニュース番組「SBSテレビ夕刊」担当で、フリートークの機会がほとんど無いこともあって生き生きとしゃべっていました。結婚時には、「一度やりたかった」と富士急ハイランドの絶叫マシーンリポートをこなして退社していました。

周りでは、「誰の担当だか分からない番組になってていいのか。」という声もありました。でも、後輩たちがこうしてしゃべっていくうちに、新たな可能性が掘り出されて別の番組への道が開けるかもしれません。しゃべる機会が無ければ、可能性を引き出すことも出来ないです。私はこの年、37才。そういうことを考える責任もあるのではないだろうか、と思っていました。

《大沼ヒロノブのWAKUWAKU土曜はパラダイス!!》

現在は、静岡朝日テレビの夕方ワイド「とびっきり！しづおか」のメイン・キャスター大沼啓延さん。20年以上前には、奥さんの相沢早苗さんとSBSラジオの土曜午後ワイド「大沼ヒロノブのWAKUWAKU土曜はパラダイス!!」という番組を担当なさっていました。大沼さんと私は同じ年ということも手伝って非常に気が合い、すぐに打ち解けました。「ウマが合う」とでもいうのでしょうか。番組自体に深く関わることはなかったのですが、番組中の15時のニュースデスクはよく担当しました。

1991年のある土曜日のことです。前年のイラクのクウェート侵攻を機に勃発した「湾岸戦争」が世界のトップニュース。その湾岸戦争の模様を報じるテレビの前で先輩の鈴木昭儀アナと激論を戦わせていました。細かいことは覚えていませんが口角泡を飛ばし、時間を忘れて熱弁をふるい合っていたのです。その最中、誰かに肩をポンポンと叩かれました。

「そうは言いますけど先輩…、ん？ ハイ？」

「くんちゃん、呼んでるよ。」

「呼んでる？ 誰が？」

「ラジオが。」

「ラ…、ラジオ？」

オフィスに流れているラジオに耳を向けると相沢早苗さんが、

「ニューススタジオの國本さん！」

と呼んでいるではありませんか。時間を見ると15時を回っています。昭儀先輩も私も血の気が引きました。先輩が叫びます。

「くんちゃん！走らず急げ！ 誰かニュース項目と原稿をまとめろ！走れ！」

息が上がっては原稿は読めません。心ははやりながらも歩いて報道部のマイクの前に到着。後輩が4項目ほどのニュース原稿を組んでくれていました。

番組は、スタッフが気を利かせて「天気予報」を先にオンエアしていくされました。そして早苗さんが、

「ではもう一度呼んでみましょう。ニューススタジオの國本さん！」

「はいはい。」

「良かった！ どうなさったんですか？」

「いやあ、湾岸戦争に関するニュースが錯綜していました、整理するのに時間がかかってしまいました。申し訳ありません。」

「大変ですね。では、お願ひします。」

「承知しました。ではまずその湾岸戦争関連ですが…。」

私は嘘つきが大嫌いです。平然と嘘をついている國本良博という人間に、どうしようもない情けなさを感じていました。しかし、本当の理由も情けなくて言えたものではありません。ニュース担当なのに放送時間を忘れるなどということは何百歩譲って認められることではありません。

《大沼さんとの友情》

大沼さんご夫妻とはその後も折に触れてはお会いする機会があり、親しくお付き合いさせていただいています。定年を迎える会社を卒業した時、定年記念会をご夫妻と3人でしました。その時、「いつか一緒に何かやりたいね」と話したものでした。

それから1年数ヶ月後の2011年3月11日。あの東北地方太平洋沖地震が発

生。その揺れと大津波、続く大きな余震で大規模地震災害「東日本大震災」となりました。その後明らかになった福島第一原子力発電所爆発事故と放射性物質による汚染災害。心を痛めていた4月。一本の電話が入りました。

「くんちゃん、大沼です。二人でチャリティやらないか？」

「いいよ。大賛成！ どんなことが出来るか分からぬけど、とにかく賛成。」

「場所、その他は大沼企画でやるよ。また連絡するね。」

大沼さんの温かさが胸にしました。

5月19日。静岡県のイベント「県民のつどい」がありました。そこで一緒に司会をしたのが初対面の久保ひとみさんでした。久保さんは静岡第一テレビの夕方ワイド「静岡まるごとワイド」の人気リポーターです。その明るく屈託のない人柄で誰からも好かれる人です。控え室でのひととき、つれづれなるままに大沼さんとのチャリティの話もしました。すると、

「日程が合えば、私も参加していいでしょうか？」

と発言。

「いいんですけど。全員ノーギャラですよ。」

「チャリティでしょ。いいに決まってるじゃありませんか。」

「分かりました。大沼さんに伝えておきますね。」

早速大沼さんに電話をしました。大沼さんは、

「そうか。嬉しいね。みんな何かをやりたいと思っているんだよね。」

と大喜びでした。

大沼さんと久保さんは面識はありません。二人の仕事は、同時刻スタート同時刻終了の完全裏番組という関係です。実現したら楽しいだろうとは思いましたが、本番までの道のりを考えると「実現」に確たる自信は持てませんでした。

《大沼啓延&國本良博★コラボレーションLIVE》

2011年9月18日(日)、浜松市にある大型ショッピングセンター「プレ葉ウォーターハイツ浜北」のイベント広場「プレ葉コート」でコラボライブは開催されました。開始時刻にはコート一杯のお客さん！ ホッとしました。久保さんも予定通り参加。ライブはこのチャリティに賛同して下さった静岡県西部地区のコミュニティFM局「FMハロー」によって生放送されました。

大沼さんはCDを出している歌手でもあります。その歌声がイベントの前半を盛り上げます。オリジナル曲「もう一度逢いたい～小坂路の女よ～」の歌詞にあ

る「白い陽傘の君がいた」に合わせて白い傘をさした「女性」の登場。久保ひとみさんです。一気にイベントは華やかさと勢いを増しました。

中盤では、被災地の一つ宮城県塩釜市のコミュニティFM「ベイウェーブ」ともつなぎ、現状と地元の復興への努力などを紹介。募金を呼びかけます。

終盤は後述する、私が今組んでいるバンドの演奏をバックに会場の皆さんも一緒に全員でザ・ワイルドワンズの名曲「想い出の渚」を大合唱。一体となった歌声がコートの満たした中でイベントは終了しました。

「やれば出来る！」これが関わった全員の感想でした。人のつながりがつながりを呼び、それぞれがそのノウハウを生かして形にしていく。総合司会の野相はるか 悠アナウンサーをはじめ、全面協力して下さった「FMハロー」の皆さん。生放送用本線ミキシングとPAミキシングを同時に担当した磯田弘さんをはじめとする「ランドスケープ」の皆さん。特別協賛して下さった、遠州90店舗による地元再発見企画「遠州バザール」実行委員会の皆さん。素晴らしいプロ集団でした。

そして何よりも、3人ともフリーだからこそ出来た夢のコラボレーション・ライブでした。

《スキーと私》

私はスキーが大好きです。大学のシーズン授業でたまたまスキーを選んだのがきっかけでした。小中にまたがる4年間札幌にいましたが、その時は好きでも何でもなかったのを覚えています。転校生でしたから周りの土地っ子に敵うはずもなく、どちらかと言えば苦手でした。

大学でその面白さにはまってしまった私は、アルバイト代はすべてスキー行きにつき込んでいました。授業は過密だったのですが、冬休みと春休みを利用して、山形県出身のスキー好きの友達と行っていたのです。

就職したのが静岡ですから、スキーはもう諦めなくてはならないと思っていた私に、車で行けないことはないと教えてくれた方がいました。SBSに入社して数年後スキーを再開。年1~2回でしたが、毎年行きました。

1991年、1泊2日のスキーツアー企画が持ち上りました。行き先は長野県の「伊那スキーリゾート」。企画は本決まりとなり、1992年1月18日~19日に実施されました。

60数人のお客様と一緒にです。現地に着くと早速ゲレンデへ。お客様の中には初心者の方も10数人いらっしゃいました。私は添乗員的立場ですから、当

然ながらその方たちを中心としたケアに当たります。

ケアをしているうちに、いつの間にかスキー教室のようになっていきました。そこへツアーパートナーの別の方がいらして、

「あなたは、級かなにか資格を持っていますか？」
と聞いてされました。

「いや、何も持っていないません。」
と答えると、

「無資格な人間が、こんな教室のようなことをしては駄目でしょう。」
愕然としました。ショックでした。スキーは好きでしたが、資格を取ろうなどとは考えたことがなかったのです。でもお客様のケアをするのならそこまで考えねばならないことも事実だと思いました。悔しいけれど、あの方がおっしゃったことは否定できませんでした。また一つスキー企画が持ち上がるか分からぬ。その時のためにも思い切って基礎スキー技能検定を受け、バッジ(級)を取得しようと決心したのです。ところが、一つの問題がありました。級を取得するためのバッジテストは日曜日か祝日に実施されるのです。私は当時土日は仕事で埋まっていました。どうするか？

《恩人》

その時、以前子供たちがお世話になったことのあるスキー学校を思い出しました。今は無くなってしましましたが長野県の姫木平スキー場の「姫木平スキー学校」でした。やまもとかずお小さなスキー場で子供たちが基礎スキーを教わった所でした。校長は山本一雄先生。A級検定員の資格をお持ちの、厳しいけど練習が終わると優しい豪放磊落な先生です。何回か一緒に滑ったこともあります、私の滑りもご存じでした。

電話で顛末をお話しし、講習・検定共に月曜日か火曜日に出来ないだろうか、と無謀なお願いをしたのです。先生は「毎週通えるか？」とお聞きになりました。月曜日なら通える旨を伝えると、「では、毎月曜日に講習をすることにしよう。初回だけは月火の泊まりで来られるかい？」とおっしゃいました。天が味方してくれました。該当の月火の勤務は連休だったのです。

家族に理由を話し、しばらく一人でスキー場に通うことを許して欲しい、と頭を下げました。子供たちには、取れても取れなくても春休みには一緒にスキーに行くことを約束して、バッジテスト講習に向かいました。

何故最初は2日間だったのか分かりました。バッジテストは5級～1級まであります、まず2級を取得しなければ今回の目的を達成することにはならない。集中講習をすることによって2級の効率的取得をはかり1級を目指そう、という計らいでした。

姫木平スキー場、エコーバレースキー場、ブランシュたかやまスキー場の3つのスキー場で、山本先生を含め4人の指導員の皆さんに懇切丁寧、厳格且つみっちり講習していただきました。それまでの滑りが、いかに非効率で無駄な動きの多い我流スキーだったかということを思い知らされました。

月曜朝4:00自宅出発。8:20スキー学校到着・朝食。9:00～12:00午前講習。12:00～13:00昼食。13:00～16:30午後講習。終了後すぐ道具を車に放り込んで帰路。21:00過ぎ自宅到着。道具手入れ、食事、就寝。6週間続きました。

1級が取得できたのは、3月初旬でした。合格証とバッジを助手席に置き、信号で止まる度に目をやっていた帰路が忘れられません。山本先生と指導員の皆さん、本当にありがとうございました。42才の春の思い出です。

《「そこ知り」でスキーを》

「静岡発！そこが知りたい」、通称「そこ知り」というテレビのゴールデンタイムの1時間番組がありました。静岡県ではウインタースポーツは盛んではないと言わっていましたので、それまでスキーの企画など思いもよりませんでした。しかし、SBSの中にも好きな社員がそれなりの数いること、スキー場で静岡県の方に結構お会いすることなどから、「そこ知り」にスキーをテーマにした企画書を出してみました。

土方康太郎プロデューサーが「たまには、こういう毛色の変わったのがあってもいいんじゃないかな。」と制作を許可してくれたのです。制作チーフは松浦康弘ディレクター。その後「お～い！トムソーカ」立ち上げ者でもあります。すぐに静岡市のスポーツ店「ジャンボスポーツアシラトリ」の吉田文良企画室長に連絡を取り、協力をお願いしました。スキー場ともウェアメーカーとも太いパイプを持っている方です。自身もかつてスキーの国体選手で準指導員の資格をお持ちでした。お陰で下準備がスムーズに運んだのです。

ロケは1996年12月～1月中旬にかけて、志賀高原スキー場・菅平高原スキー場・野沢温泉スキー場・戸隠スキー場を舞台に13日間にわたって行われまし

た。

取材は決して順調ではありませんでした。12月初旬の取材ではまだ雪がありません。上ならばあるということで志賀高原の標高2300m横手山スキー場に向かいました。そこでは年に2~3回くらいしか見えないという富士山を見ることが出来ました。それはラッキーでしたが、下山する林間コースはそれなりの斜度がある上に石や岩が露出していたのです。後悔しました。頼み込んで下りのリフトに乗せてもらうべきだったと悔やみましたが、下り初めてしまってはもう引き返せません。スタッフはそれぞれ小さくはない機材を持っています。転んでも機材だけは守ろうとする痛々しい姿がありました。

滑走シーンはどう撮影するか。雪国の放送局ではさもないことも、静岡の放送局には難しいことでした。メインカメラは大きく併走は無理です。基本的にはゲレンデ内固定点で中井秀^{なかいしゅう}カメラマンが三脚使用で構えて撮影。田中淑恭^{たなかとしやす}ディレクターが小型カメラ手持ちで併走撮影しました。二人のスキー技術に負うところ大でした。これをシーンによって使い分けたわけです。

しゃべりの相棒は松本はるなアナでした。松本アナは全くの初心者ではありませんでしたが、初心者から徐々に上達していくという難しい設定を頑張りました。志賀高原のシーンは初心者ですから、起き上がろうとして起き上がれないままスキーが勝手に滑っていくという、演技とも本当ともつかない滑りを見せました。うまくいきすぎて止まらなくなり、映り込みたくはなかった音声担当の大池重貴^{おおいけしげたか}ディレクターのいる場所に突っ込んで行ってしまったのです。そしてそれは大池ディレクターの笑顔と共にオンエアされました。

《五十肩》

この番組の準備を始めた頃、左肩に違和感を覚えていました。手を上げると弱い痛みがあります。そして下見と打合せのため松浦ディレクターと各スキー場を回っている頃、その痛みはだんだん強くなってきました。下見から戻ってすぐ整形外科の門を叩きました。

「五十肩だね。」

「どのくらいで直りますか？」

「すぐは無理だね。早く半年、1年ぐらいかかるかも。」

五十肩の痛みは想像以上でした。腕をある一定の角度まで上げると激痛が走ります。本取材時、肩関節の中にキリが刺さるような痛みの中でのロケになりました。

た。腕を下ろした状態でもやるせない、重い不快な感じがしていました。

スキーを担いで歩くシーンでは、まず肩にスキー板を乗せてもらい、その板に左手をそつと乗せてもらっての撮影でした。一番辛かったのは、菅平高原でのコンビネーション・スキーでした。菅平のインストラクター4人の皆さんと手をつないで、横一列でのウェーデルン(小回りターン)。お互いのスキー板が重なると破綻しますから、少しでも距離を置きたい。となると結果引っ張り合うことになるのです。激痛が走ります。5人全体の映像ですから表情までは分からぬのが幸いでした。

こうして完成した番組は、1997(S62)1月28日(火)20:00~20:54「冬満載・信濃路の旬、寄り道したくなるスキー旅」として放送されたのです。

肩の痛みが完全に無くなったのは、1年後でした。

《ケッタウェイズ再結成コンサート》

その年の秋の「SBSラジオまつり」で懐かしい番組などの復活企画をという声が上がりました。候補の中に「ケッタウェイズ」がありました。

それを耳にしたNECの石原由美さんと電通の竹下卓さんが「<NECプレゼンツ！>でやろう！」と申し出てくださいました。お二人は前述した通り、パソコン番組「NEC98パラダイス」のスポンサーと代理店の方です。パソコン番組とは全く関係ないケッタウェイズですが、できるだけのことをしてやろうという思いやりの表れでした。ありがとうございました。…深い友情を感じました。

佐藤ディレクターと鷹森ディレクターからは「数曲ならできるかも。」と返事がありました。東京の荻島アナからは「もちろんやる。出来ることなら、きちんとワントージやりたい。」との返事。ということは何曲ぐらい？と聞くと「出来る限り。」という返事。どこまで出来るか、とにかく合わせてみることになりました。

忘れていました。情けないぐらいでした。本番までの時間は1ヶ月半。東京から参加する荻島アナのこともあり、5回の練習スケジュールを組むのがやっとでした。死にものぐるいでやるしかありません。

曲数と曲目は大きな問題でした。荻島アナはやれる限り当時の曲をやろうと言いました。集まってくれる人たちの満足を考えれば以前のコンサートに匹敵するものを再現したいと考えたのです。確かにそうですが、間に合うかどうか…。不安が募ります。さらに私にとっては大問題の曲がありました。「おまえだろ」という曲です。1コーラス歌う毎に、客席を指さして「おまえだろ！」と絶叫する曲です。

指さされた客席は盛り上がります。アドリブのきく曲で、コーラス数はいくつでもいけます。ギャグソングとしてうけるのは間違いありませんが、声帯がもつかどうか自信ありません。やはり練習が終わると毎回声が枯れていきました。何回かやめたいと意思表示しましたが認められません。「次があるわけでも無し…。ええいままよ」と曲目に組み入れることにしました。

1997年11月16日(日)、静岡市の呉服町にある青葉シンボルロードで13年と1ヶ月ぶりの「ケッタウェイズ再結成コンサート」が実施されました。

いきなりアクシデントでした。楽器の音が収録出来ないというのです。急いで収録ケーブルを交換していきます。小雨が降っています。お客様は濡れながら待っています。私たちはステージ裏のテントの中でジリジリしていました。

どのくらい経ったでしょうか。やっとOKが出てステージへ。お客様の顔、顔…、当時コンサートのたびに来てくれていた懐かしい顔がいっぱいでした。一体となったコンサート、13曲+番組ジングル4曲、そしてアンコールは13曲の中から2曲をリピートしました。反省はたくさんありましたが、久しぶりにコンサートが出来た充実感でいっぱいでした。

《タバコ》

再結成コンサートの翌日、当然ながら声は枯れていきました。数日で戻るだろう、と思っていましたが1週間経っても2週間経っても戻りません。かすれたままの状態が3ヶ月になろうとした翌年の2月、耳鼻咽喉科を訪問しました。内視鏡検査の結果「声帯ポリープ」が出来ていることが判明したのです。手術すべきかどうか…、専門医を紹介され静岡市立病院へ。医師の意見は手術回避でした。

- ・ポリープの位置が声帯の振動部分から少し離れたところにあること。
- ・私の仕事内容も鑑みると、声質が大きく変わること。

が理由として挙げられました。声が出にくいと力が入り声帯が充血します。充血すると声帯が膨張してポリープが振動部分に近づき、より声の出にくい状態になるという悪循環を繰り返しているのです。余談ですが、ポリープがなくともお酒を飲みながらの大声やカラオケは、この悪循環を起こすため声帯には非常に良くありません。酒焼けの声という名のダミ声はこれでできるとも言えます。

で、先生は、

「大声を出さなければ1年もすれば安定すると思う。場合によっては消えることもあるよ。」

「タバコはどうでしょう？」

私は30年にわたるヘビースモーカーでした。この頃は1日3箱です。どこに行っても灰皿を探している自分。愛用のジッパー(ライター)を手の中で転がしている満足感。オイルの香り。吸っているタバコの箱以外に未開封の予備を持っていないと不安でした。先生は、

「良くはないよね。やめられないのなら、せめて1日5本以内にしたいな。」

考え込んでしまいました。本当に大好きだったのです。でも、この仕事を辞める訳にはいかない。いや、やめる気などさらさらない…。どうする？

ええい、それならば！ 私は1年タバコを中断することを決断しました。その時点ではやめる気はありませんでした。タバコを吸わなければ治りも早いかもしれない、と単純に思つただけです。かすれ声は、そのくらい仕事に差し支えていました。とりあえず病院の廊下にあったゴミ箱に手持ちのタバコを全部捨てました。当然禁断症状とやらが来るんだろうな、と覚悟していました。

1週間が過ぎました。が、それらしきものは何も来ません。

「こちらあたりからだな…。」

2週間経ちました。…やはり何もありません。

その中断2週間後、たまたま人間ドックがありました。その結果に驚きました。それまで必ず記載されていた＜消化器判定C、胃炎＞が＜消化器判定A＞になっていたのです。

「！？」

変わったことと言えば一つだけです。言わずとした、「タ…バ…コ」。

この人間ドックから少しずつ気持ちが変わっていきました。怖かった禁断症状も無い。吸えないからってイライラするわけでもない。唇の寂しさや手持ち無沙汰も心配だったのですが別にどうということはない。胃炎も改善された。どうやら1年は続けられそうだ、と思うようになったのです。

我慢するからしたくなる。これが人間の習性です。「強固な意志を持って禁煙する」、これは我慢です。絶対ストレスが溜ります。私の場合はどうだったのか？ 「諦め」でした。仕事がやりにくくて仕方がないのだから、タバコを一時的にせよ諦めたのです。「諦めホルモン」が出たとでも言いましょうか。そんなホルモンはもちろん存在しないでしょうが、自分自身で一番説明しやすい表現なのです。「我慢ホルモン」は動的でバタバタします。「諦めホルモン」は静的で、時に諦めの対象を忘れている時もあります。

こうして中断は2012年10月現在、14年目の半ばを越えています。

《日本酒とトラウマ》

私は大学時代のトラウマから30代後半まで日本酒がだめでした。そうです。一気飲みという先輩の悪のりの犠牲になったのです。「表面張力！」と言いながら、先輩がグラスに日本酒をみなみと注ぎます。それを「1杯！2杯！」とかけ声を掛けながら新入生に飲むことを強要するわけです。16杯まで記憶がありますがそこから先は全く覚えていません。後で聞くと「トイレに行きたい。」と言って席を立ち、なかなか帰ってこないので見に行くとトイレの前で倒れていたそうです。

気が付いたのは翌朝でした。先輩の下宿です。先輩のベッドで寝ていました。下を見ると4～5人の先輩がゴロ寝していました。一人が私が起きたのに気が付いて、

「國本、起きたのか。大丈夫か？」

「いやあ、大丈夫じゃないです。のどが猛烈に渴いています。」

のどが渴いていますが、水も何も受け付けません。頭もボートとしていて自分が自分じゃないようでした。ふと見ると皆結構汚れています。

「先輩、何か汚れてませんか？」

「冗談じゃない。誰が汚したと思っているんだ！」

水は飲めませんでしたが、事情は飲み込みました。

それから3日間は満足に食事できませんでした。病院に担ぎ込まれてもおかしくない状況だったのです。急性アルコール中毒になったのは間違ひありません。本当に苦しい3日間でした。最初に口に出来たのは豆腐の味噌汁。本当に生き返った気がしたものです。

《河村伝兵衛先生との出会い》

1995年、私はラジオの朝ワイド番組「モーニング・ダイヤル」(月～木 6:30～9:00)を担当していました。政治・経済などを中心に扱う、どちらかというと硬派な番組でした。意外に思われそうですが私はこういう番組は好きでした。ただ夜型でしたので、「朝一番SBSニュースワイド」と同様に早朝起床がネックではありました。

春でした。日本酒の新酒が出てくる季節です。その番組内でラジオカー「スクーピー」の中継が、沼津工業技術センターからあった時のことです。静岡県の

日本酒が全国に広く認められることになった「静岡酵母」の発見者、河村伝
兵衛先生にインタビューしていました。

30代後半、「燗酒を少しだけ飲んでみたい。」という気持ちが湧いてきました。少しだけ大丈夫かもしれない…。近所の酒屋さんで燗向きだという東北地方のお酒を買い、アルコールを飛ばす意味も含めて熱燗で恐る恐る飲んでみました。

「おいしいかも…。」

なんとなくトラウマが薄らいでいくような気がしたのです。それから冬の一時期少しづつ熱燗を楽しむようになり、日本酒に対する抵抗感が薄らいでいた頃の河村先生へのインタビューでした。

日本酒については無知に近い私に、河村先生は一升瓶のお土産をスケーピーに託してくださいました。冷たく冷やしてあります。「冷蔵庫で冷やして飲みなさい。」との伝言。冷酒＝悪酔い。そんな先入観がありましたが、折角河村先生が下さったお酒です。ちょっとだけなら問題ないだろう…。そう結論を出し、自宅に戻ってからちょっとだけ味わってみました。

「？…？、うまい！」

何なんだろう。フルーツのような、えも言われぬ香りと上品な味。これは自分の知っている日本酒ではない！

ちょっとどころか、数日で瓶は空になりました。まだ飲みたい。でも瓶にはラベルが貼ってなかったので銘柄が分からず。どうしようもありません。河村先生に電話してしまいました。

「ははは、美味しかったのかい。良かった、良かった。でもあれは売り物じゃないんだよ。私の研究室で作った試作酒なんだ。だからどこにも売っていない日本酒だよ。」

ショックでした。しばらくして、同期入社で出版局勤務の岡崎俊明さんから日本酒に関するメッセージ原稿を書いてくれないか、という要請がありました。彼本人の希望ではなく、「しづおか地酒研究会」主宰のコピーライター鈴木真弓さんからの依頼だということでした。鈴木さんとお会いすると、「11月開催の静岡市立南部図書館食文化講座『静岡の地酒』の企画をしていて、講座のレジュメに静岡の文化人・知識人・酒類関係者に地酒へのメッセージを掲載しようということになった。人選段階での放送を思い出し、岡崎さんを通じ依頼した。」とのことでした。鈴木さんは静岡県の地酒の本「地酒をもう一杯」(静岡新聞社刊)を作

り上げた人です。

「まったく日本酒が駄目だった僕ごときが書くなんておこがましい。」と一旦はお断りしたのですが、「駄目になった経緯と、河村先生とのエピソードを素直に書いてくだされば結構です。」ということで書くことになりました。

《静岡県の地酒との出会い》

食文化講座『静岡の地酒』は素晴らしいイベントでした。河村先生の講義があり、日本酒造りというのがいかに繊細なものであるかを知りました。米自体には糖分はないわけですから、米の澱粉を麹によって糖に変え、その糖が酵母によって二酸化炭素とアルコールに転化していく。よく発見したものだと思います。そしてさらに酵母によって香りも味も大きく違ってくる。杜氏とうじと呼ばれる造りの責任者や蔵人は、仕込みの期間中2時間くらいずつのインターバル睡眠しか取れない、等々。様々な話を聴いているうちに、日本酒造りに対する尊敬の念が湧いてきました。

最後は利き酒きです。4種類の日本酒を2本ずつ用意し、同じと思われる酒を結ぶというました。とても無理だと思っていたのですが、全員正解でした。そのくらい特徴のはっきり違う酒が用意してあったのです。その中に、あの河村先生の試作酒に似た香りと味を持ったものがありました。

「これだ！」

多少違いはありましたが、あの買いたくても買えない私にとって幻の日本酒に近いものが買えるかもしれない。欣喜雀躍、講座終わりにどういう酒なのかを伺いました。講義で出てきた、静岡酵母を使った純米大吟醸酒でした。

それからです。静岡県の地酒にのめり込んでいったのは。

この年からさかのぼること9年。1986年の全国新酒鑑評会に静岡県内から21蔵が出品し、10蔵が金賞を受賞。金賞の実に1割近くを占めました。また、17蔵が入賞。入賞率日本一に輝いたのです。静岡酵母と「温暖の地静岡県でも絶対美味しい酒が造れる」という酒蔵の真摯な取り組みが成し遂げた快挙と言えるでしょう。

《聖杯の酒器》

静岡県の日本酒に惚れ込んだ私は鈴木真弓さんを通じて、たくさんの酒蔵の方と知り合いました。その造りにかける情熱を伺ってから飲む酒は、またひと味

もふた味も違うような気がしてきます。関係が深まるうちに「静岡県地酒まつり」の司会も担当するようになりました。

日本酒が取り持つ縁は、酒蔵だけにとどまりません。遠州森町の陶芸家、吉筋恵治さんもそうでした。吉筋さんは「焼締め」という釉薬を使わない焼成技法の作品を世に送り出している方で、器だけではなくオブジェも製作する珍しい作家です。と、こう書きながらも私にとって陶芸は全く分からぬ世界の一つ。吉筋さんも「僕の周りで陶芸に関して何も知識を持っていないのはくんちやんだけだよ。」と笑っておっしゃいます。

その吉筋さんが私の還暦を祝って、作品を作ってくださいました。私が12月25日生まれということもあり、「インディ・ジョーンズ/最後の聖戦」に出てくる「イエス・キリストの聖杯」をモチーフにした酒器でした。これが実に手にしつくり…。

私の宝になりました。

《金曜日の午後ワイド》

1996(H8)4月、私にとって久々のラジオ午後ワイド「うわさのワイドくんちやん・香代子のハジけてドン！」(金13:00～16:00)が始まりました。影島かげしま香代子アナ、そしてニューハーフの樹根さんと私の3人のコンビネーション番組でした。

樹根さんは生物学的にはれっきとした男性なのですが、女装すると女性にしか見えません。すごい技だと思いました。女性の身のこなしも実際に良く研究していて、女性よりも女性らしく振る舞うのです。そして時折、言葉遣いなどで男言葉を出しては笑いをとったりします。ニューハーフだからこそ許される毒舌、とうかむしろ毒舌を期待しているリスナー。それに応える樹根さん。歌も本当にうまくて、その中の替え歌がさらに面白さに拍車を掛け、番組の公開生放送には欠かせぬ存在でした。

女性のしゃべり手も、影島アナから植松千尋アナ、角田美保さん、海野圭子さん、高塚奈央子アナとバトンタッチ、樹根さんに楽しくいじられていました。

レギュラーでの3人によるコンビネーション番組。私はこの番組では、自分のキャラクターというより樹根さんや女性アナの良い面を引き出すのが役割と信じて担当しました。そういう意味で、とても勉強になった14年でした。

樹根さんも土曜日に独立した番組を担当するようになり、私自身は2010年4月から、原田亜弥子アナとのコンビしゃべりで今日に至っています。

《お~い！トムソーヤ》

1998年11月1日、「お~い！トムソーヤ テレビに出ようよ！10万円サポート計画」(日10:30~11:00)がスタートしました。ベビーブーマーである団塊の世代を中心とした昭和18年~28年生まれの方たちを「トムソーヤ世代」と名付け、その果たせなかつた夢、ここまで来たからこそチャレンジしてみたいこと、などを叶えようという番組でした。

昭和24年生まれの、まさに団塊の世代である私が担当することになったのです。私の設定は、喫茶店「トムソーヤ俱楽部」のマスター。看板娘と共に、出演者の「夢」と実現への努力とその過程、そして最終的に叶ったかどうかを聞くのが役割でした。

ちんどん屋になりたい、蕎麦打ち名人になりたい、本物の機関車を運転してみたい、スカイダイビングに挑戦、ロッククライミングに挑戦、旅芸人になりたい、など、140人以上の皆さんのお夢を追いかけました。

記念すべき1回目の放送は「ビートルズの曲でアナログレコードをつくりたい！」という夢でした。清水にイートルズ(Eatles)というビートルズのコピーバンドがあります。メンバーは塚原満さん、村松道夫さん、田代美巳さん、杉山誌朗さん、いけがわつねみ池川恒美さんの5人。もちろんトムソーヤ世代。

演奏の録音もさることながら、すでにCDの時代。アナログレコードを作ってくれる所があるのかという問題がありました。請け負ってくれるところが東京渋谷にありましたが、何とプレス作業はアメリカの工場でという製作だったのです。そのため完成品が届いたのは、番組収録の前日でした。しかも注文最小単位は、1000枚で165,000円。それだけで10万円をかなりオーバーしてしまいます。スタッフの交渉で500枚10万円にしてもらいました。でもスタジオレコーディングとミックスダウンの費用を加えて、総額16万円。

1回目だから許してもらおう、ということになりました。

《小型船舶操縦免許》

8回目のトムソーヤは、「四級小型船舶操縦免許を取って海釣りを楽しみたい」という静岡市の油井達行さんの夢。湖水限定免許はお持ちでしたが、やはり海に出て自分の操縦で釣りをしたいということで、四級小型船舶操縦免許への挑戦物語でした。免許取得のための学科講習は普通日曜日ですが、油井さんの

職業は理容業、休みは月曜日です。そのため、取得を諦めてきていたといいます。そこで、スタッフは早速清水三保の三保マリーナに相談。月曜日の学科講習開講をお願いしました。

すると「番組企画だということなので特別にOKしますが、受講者一人で講師を呼ぶのはちょっと辛いので、もう一人ぐらい受講してもらえませんか。」という返事。油井さんの受講料は番組予算がサポートしますが、2人分は無理です。誰か自腹で免許を取りたい人を急遽探すことになりました。でも、9万円以上の自腹となるとそうそういません。時間はあまりありません。仕方がないので、最終的に私が手を挙げました。

ロケ当日になりました。三保マリーナの講習用教室で撮影準備です。私は番組では挑戦後の話を聞く喫茶店のマスターですから、そこにおいてはいけません。カメラの後ろに陣取ります。順調に学科講習が終わり、そのまま実地講習です。これはカメラの後ろというわけにはいかないので、帽子をかぶった後ろ姿で静かにしていました。視聴者は先生と油井さんに注目しているはずなので、そう心配はしていました。分かるような映り込みがあればカットする手もありますしね。

もちろん学科試験も実地試験も一緒に受けました。私自身は取得したところで船を持っているわけでもなし、持つ予定があるわけでもなしでしたが、久々の受験勉強は楽しい経験でした。もちろん油井さんは問題なく合格。収録スケジュールも変更なしでスムーズに運びました。

なお、オンエアで私の姿はロケシーンにしっかり映り込んでいましたが、それが分かるのは松浦ディレクターとカメラマンと私の3人だけでした。

《龍ちゃんのカッパ館》

140人余りの方のさまざまな夢のお手伝いをし、放送開始から3年後の2001年3月「10万円サポート計画」は終了することになりました。「お~い！トムソーヤ」は、その翌週から「大人の御用達」シリーズに変わり、局を飛び出して喫茶店の一角をスタジオにして、素敵な大人の趣味や全国の銘菓・名品など逸品を紹介する番組に。私自身リポートもすることになりました。

2002年5月11日放送の「カッパを愛する人々」は、焼津市の北野龍雄さんが主人公でした。北野さんには、小さい頃おじいちゃんと一緒に行った山でカッパらしきものと会った記憶があるそうです。それが大人になっても忘れられず、そ

のせいかどうかは分かりませんが、カッパの絵、焼き物、木彫りにおもちゃ、文献、などカッパに関するあらゆる物を集めようになりました。ご自宅にお邪魔しての取材。この時点でのコレクションは約5000点！23台のショーケースは家の中に入りきらず、庭の片隅を占領するほどです。全国の河童愛好家仲間の間でも有名な存在になっていました。そんな北野さんに私が、

「これではいつか自宅からあふれ出てしまうんじゃありませんか？」
と問うと、

「いやあ、そなんだよ。いずれ自宅前にカッパの展示館を作ろうかと思ってるんだ。」

「その時は、また取材に来ますよ。」

それは現実になりました。北野さんは2005年10月17日「龍ちゃんのカッパ館」をオープンさせたのです。そしてその当日、私はトムソーヤではなく、テレビ夕方ワイド「とく報！4時ら」中継担当アナとして再びおじやましました。約束を果たせたのです。北野さんのコレクションはさらにパワーアップし、7000点を超えていました。以前は「うちの中がカッパに占領されて困る！」と笑いながらおっしゃっていた奥様も、とても満足な様子。

「龍ちゃん、カッパ館ができたから満足でしょ？」

「いやいや、いずれはギネスブックに載りたいと思っていますよ。」

何ということでしょう！ 実は、それも現実となったのです！ 2009年6月3日、イギリスのギネス・ワールド・レコーズ社により、その年の1月1日現在のカッパに関するコレクション数、7845点が「ギネス世界記録」に認定されました。

一途に思い込むことの素晴らしいさを教えていただきました。

《2回目のアノンシスト賞最優秀賞受賞》

トムソーヤ「大人の御用達」シリーズが1年半続いた後、サブタイトルを「20世紀少年俱楽部」として、休日の遊び方の提案「休日充実プロジェクト」を半年放送。旅、釣り、ラーメン食べ歩き、紙漉き、カヌー下りなど、体験を交えながらリポートしました。

その後の最終シリーズは、サブタイトルはそのまま「20世紀少年俱楽部」でしたが、番組テイストはがらりと変わり、良き昭和を探す15分のドキュメンタリー番組になりました。かねてやりたかった、落ち着いてじっくり語りかけるナレーションを担当できたのです。それまでは、どちらかというと私のキャラクターイメージか

ら「明るい、テンポの早い」ナレーションを求められることが多く、ゆったりしたナレーションはあまり読んでいませんでした。

そのシリーズが始まって間もなく、どれかを選んでアノンシスト賞審査に出品して欲しいという要請がきました。鍛治屋、醤油造りなどいくつか候補を絞り、松浦ディレクターとこの時のチーフ浦田明宏プロデューサーに相談をしたところ、2003年12月21日放送の「いくつになっても野球小僧」が良かろうということになったのです。

静岡商業高校出身の鈴木彰さん(当時77才)^{すずきあきら}成岡慧一さん(当時59才)^{なるおかけいいち}(当時59才)の思い出話。物がない中での野球。縫い目の糸が切れたボールは、自分で縫い直したという成岡さん。そんな糸すらなくてそのまま破れたボールを投げるしかなかつたという鈴木さん。「シュルシュル」と音がしたといいます。

鈴木さんが大事にお持ちになった風呂敷包みの中には古くて小さいグローブが入っていました。戦死した同級生の形見です。そしてもう一つ、昭和15年に作ったという鈴木さん自身のユニフォームも。静岡商業が県大会の決勝戦に進んだ時には、今でもそのユニフォームを着て応援するのだそうです。

番組最後のシーンはそのユニフォームを着て、形見のグローブを手に成岡さんとキャッチボールする姿がありました。感動しました。

その番組で、JNN・JRN系列のアナウンサー対象の賞「第29回(2003年度)アノンシスト賞 テレビ「読み・ナレーション」部門 最優秀賞」を受賞することが出来ました。やりたくてもやれなかつた「ゆっくりじっくりナレーション」で受賞できただことが最大の喜びでした。

「テレビに出ようよ」シリーズでコンビを組んだのは、林恵子アナ^{はやしけいこ}、田中未花アナ^{たなかみか}、上田朋子アナ^{うえだともこ}、鈴木康子アナ^{すずきやすこ}。「大人の御用達」シリーズは、鈴木アナが秘書役でタレントの鈴森さとみさんが逸品リポーター。大人の遊び提案「20世紀少年俱楽部」シリーズは、植松千尋アナ^{うえまつちひろ}、原田亜弥子アナ^{はらだあやこ}が外ロケと一緒に頑張ってくれました。

《エレキの若大将のロケ地を訪ねて》

「大人の御用達」シリーズに入る前に、放送150回記念企画が検討されました。企画の際、平尾由佳ディレクターが、

「くんちゃんの夢を叶えてあげよう！」
と切り出しました。私が口を開こうとした瞬間、

「そうだ。くんちゃんは若大将の大ファンだから、若大将でいたらどう？」
さらに畳み掛けて、

「そうだ！これこれ！くんちゃんが大きな影響を受けたって言ってる映画
(エレキの若大将)のロケ地を訪ねる旅、これでいきましょう！」

あつという間に決まりました。一世を風靡した加山雄三さんの若大将シリーズ。その中でも(エレキの若大将)は、当時の男の子をノックアウトした映画でした。かくいう私もゴジラ映画を見に行つたはずなのに、併映されていたこの映画にノックアウトされた一人です。高校1年生でした。私はゴジラ映画大好き人間ですので、ゴジラ、ラドン、キングギドラが登場する(怪獣大戦争)を見に行つたわけです。実はこちらが表プログラムでもありました。入った時間はちょうど(エレキの若大将)の回が始まるところでした。「エレキブームに乗って作られた映画。どうせ映画スターが、ギターを弾くシーンは吹き替えで作っているんだろう。」くらいにしか思っていなかつたのが、加山雄三さん本人が弾いているのにびっくりしたこと。しかも途中から、見たことのないヤマハのギターと、それに続いてベンチャーズが弾いていたはずのパールホワイトのモズライトギターを弾いているのです。何だこの映画は…。思わず2回見てしまいました。後でモズライトは加山さんがベンチャーズ自身から譲り受けたものと知り、本物だったんだと納得しました。

それからパールホワイトのモズライトギターは私の憧れとなりました。当時、耳にした値段は約30万円。大卒初任給2万円の時代です。夢のまた夢のギターで、私たち世代には誰言うどもなく(若大将モズライト)と呼ばされました。

《若大将モズライト》

私一人だけでなく、もう一人若大将ファンの方と同行したらということになり、1回目の放送に出演された池川さんに白羽の矢が立ちました。池川さんは前年のトムソーヤXmasパーティに、あの(若大将モズライト)のレプリカを持って現れ見事な腕を披露していました。平尾ディレクターはそれを覚えていたのです。

この放送で一番のエピソードは、西伊豆堂ヶ島にある加山雄三ミュージアムでのシーンでしょう。当初ここでは展示紹介と、加山さんへのインタビューを撮影する予定でした。ところが加山さん側の事情があつてインタビュー出来なくなつたのです。仕方ありません。とにかく池川さんと展示を見ながら懐かしんでいる風景の撮影です。若大将シリーズの映画のポスター、エレキ合戦シーンに使われたテスコ製ギターの展示コーナーを通り、レコードジャケットのコーナーに続

いて…、ありました！あのパールホワイトの〈若大将モズライト〉が！

ガラス戸の展示棚の中にそれはありました。もちろん鍵がかかっています。池川さんと私の興奮は一気に頂点に達しました。

「触りたいな！触りたいな！」

を連発する我々に根負けした係の方が、何と「特別ですよ。」と鍵を開けてくださいました。それは加山さんへのインタビューが出来なくなつたことへの係の方の心遣いだったと思います。

次の瞬間、〈若大将モズライト〉は私の手の中にありました。

「思ったより軽い！」

池川さんは〈若大将モズライト〉のあのレプリカを抱えています。それを係の方に渡すと私から〈若大将モズライト〉を受け取り、何とチューニングを始めました。そして弾き始めてしまったのです。「夜空の星」のイントロでした。もう止まりません。そのまま二人は1コーラスを歌いきってしまいました。感動を通り越して心は宙を舞っていました。

《君といつまでも》

ロケの舞台は、日光中禅寺湖へ。そこで若大将・青大将・澄ちゃんの恋のさや当てが繰り広げられます。若大将とブルージーンズが演奏した「レイクサイドホテル」はそれまで言っていた「金谷ホテル」ではなく、その名の通り改裝前の「日光レイクサイドホテル」だったこと。若大将が澄ちゃんにあの名セリフ「幸せだなあ、僕は君といる時が一番幸せなんだ。」を言った場所のすぐ隣にある「愛染堂」が加山さんの父上原謙さん主演の映画「愛染かつら」のロケ地でもあったことなどを紹介していきます。

若大将と澄ちゃんが「君といつまでも」をデュエットしたのが日光戦場ヶ原と愛染堂脇。池川さんと私はそれぞれフォークギターを手に、日光戦場ヶ原に向かいました。二人が歌った場所は、現在は残念ながら入れません。代わりに展望台が設置されています。私たちは展望台の手すりに腰掛け「君といつまでも」を歌い出しました。完全に高校生に戻ってしまいました。コーラス終わりの「♪いつまでも」のメロディーはレコードと映画では違います。当然映画バージョンのメロディーで歌います。我々を知る由もない他県の観光客の皆さんのが、最初は驚きながらも、そのうち手や足でリズムを取ったり、歌を口ずさんだりしながらニコニコ聴いてくださっていたのが忘れられません。

このシーンは、フルコーラスで番組のラストを飾りました。〈エレキの若大将のロケ地を訪ねて〉は、2001年10月27日に放送されました。

《「ニュージーランドの若大将」の特典映像》

このロケは3つのエピソードを生みました。1つ目は、撮影に当たった植田 裕^{うえだ ゆたか}カメラマンが、収録直後エレキギターを購入、そして池川さんのお宅に通っては教わったのです。しばらく続いたそうです。エレキおやじ二人に触発されたと嬉しいことを言ってくれました。

2つ目は、私自身とうとうパールホワイトのモズライトを購入してしまったこと。そしてその流れで、ベンチャーズ・GS・加山サウンドを中心としたバンドを結成したことです。モズライト購入については後述します。

3つ目は、DVD化された「ニュージーランドの若大将」の特典映像「続・コリドー通りの若大将」に出演できることです。きっかけは、番組に登場したおそらく日本最大の加山グッズコレクターで、東京神田神保町の中古レコード店「ミュージックガーデン(現在は閉店)」店主でいらっしゃる鈴木啓之さんでした。鈴木さんが東宝の方や若大将シリーズのDVD化に当たっているスタッフ皆さんに、あの番組をお見せになって、その熱心さに特典映像出演を依頼しようということになったそうなのです。

パールホワイトのモズライトを手に東京日比谷の東宝本社に行き、一室でインタビューを受けます。エレキの若大将にのめり込んだそもそももの話から、〈南太平洋の若大将〉の柔道大会シーンの観客の一人として武道館ロケを行ったこと。その時、集まった人に御礼として加山雄三ライブが行われたことなどを話しました。後で完成DVDを見たところ、その時のバックはランチャーズが務めていたことが写真と共に紹介されていました。その他モズライトギターの話、そして〈エレキの若大将のロケ地を訪ねて〉についてもいろいろ語りました。そして、銀座コリドー通りにある「ケネディハウス銀座」で定期的に行われる「加山雄三&ハイパーランチャーズ」のライブ会場での撮影。1部と2部の間の休憩時間にステージ裏の休憩スペースにいらっしゃる加山さんとお会いするシーンも収録されました。

「ギターを持って来ているんだね。2部で一緒にやろうか？」
と加山さん。リップサービスということは分かっていましたが、嬉しくて涙が出ました。この時点で物理的なタイムリミット。そのまま、静岡止まりの最終新幹線で帰

路に着きました。DVD化された「ニュージーランドの若大将」の特典映像をご覧いただけたら幸いです。

《モズライト購入》

富士市に「文化屋楽器店」という楽器専門店があります。店主は五十棲淑朗さん。いそず みよしろう 寺内タケシさんに憧れてギターを始めたという方で、「テリーズ」というプロバンドのリーダーでもいらっしゃいます。寺内タケシさん手書きの「寺内流初代師範代」免状をお持ちの、弾けば寺内サウンドそのままというギターの達人です。

その五十棲さんとお話しする機会があり、番組の話や憧れのモズライトの話などをしました。その時五十棲さんが、

「くんちゃん、ベンチャーズ・ロゴマークの権利関係がゴタゴタしているので、今買わないと若大将モズライトのレプリカを手に入れるのは難しくなるかも。」

という話をされました。悩みました。当たり前ですが高額な買い物です。どのくらい考えたでしょう。結論は「購入」でした。

そこからです。購入を決めてから頭をよぎることは「買ってどうする？」。部屋に置いてただ飾つておくのか、折角だからと止めていたギターを再開するのか、でもただ練習するだけではすぐ挫折してしまうだろう。さまざまな思いが湧き上がります。やっぱり注文を取り消そうか、とまで考えました。

《バンド結成》

考えに考えた挙げ句、「やはりバンドを作ろう」という方向に傾いていったのです。そこで思い出したのが〈エレキの若大将のロケ地を訪ねて〉で同行していた池川さんでした。バンドに参加してくれそうな方を紹介してもらおうと思った訳です。すると池川さんは、

「なんでぼくを誘わないんだい。」
ときました。

「だってすでに所属バンドがあるのだから考えなかつたよ。」
「それはそれ。バンド作るのなら参加するよ。」
思いがけない展開でした。さらに〈パソコンアタッククラブ〉のアドバイザーだった村上さんが学生時代軽音楽部でドラム担当だったという話を思い出し、誘いをかけました。しばらくは渋っていらっしゃいましたが、最終的には説得できまし

た。残りはベースです。〈お~い！トムソーヤ〉で「パイプオルガンを弾いてみたい」という挑戦をなさった清水のジャズ系ライブ・レストラン「もでらあと」のオーナーでキーボード奏者の山梨悟さん^{やまなしとる}にご紹介いただいた堀喜代志さん^{ほりきよし}にお願いすることが決まり、2003年8月末、エレキバンド「クレイドルズ」が結成されました。

そこから人生後半の大きな柱の一つが出来上がっていくことになりました。

《発表の場》

製作をお願いして半年後、念願のモズライトギターが届きました。届いたその日、自宅で眺め、様々な思いに浸りながらグラスを傾けたことが忘れられません。さあ、念願のギターは手に入った。さらに一所懸命練習しなきや。

決意を新たにしたもの、目標がありません。ケッタウェイズとは大違いです。あの時はイベント要請が先にありました。今回は自分の「バンドを作りたい」が先です。練習をしても張り合いがなくては続きません。そんな時、堀さんをご紹介いただいた山梨さんが「もでらあと」でのライブをどうか、と声を掛けてくださったのです。張り切りました。練習にも熱が入ります。

2003年11月24日デビューライブが実現したのです。練習している最中にトムソーヤ俱楽部Xmasパーティでの演奏も決まり、発表の場であると同時に、トムパーティ予行演習の場にもなりました。

それから私はバンド演奏が出来そうな場所に行くたびに、「ライブをやりませんか」と声をかけました。それが実を結び、毎年恒例で呼んでいただく会場も出来てきました。

《ミニチュア刃物工芸作家、鈴木茂樹さん》

そんな中に、西伊豆の松崎町があります。そもそも、金曜昼ワイドのラジオカー中継で松崎町のミニチュア刃物工芸作家、鈴木茂樹さんのお店からのリポートがありました。数センチ大の各種包丁、ノミ、カンナ、ノコギリなどを作ついらっしゃる鈴木さん。そしてキャスター・ライバー（ラジオカー・リポーター）が、

「ただ小さいだけじゃないんです。全部道具として使えるんです。」

「えっ？ ジャンク? 切れるということ？」

「そうです。切れ味も抜群です。」

にわかには信じがたく、現物が見たくなつたので、放送の中でミニチュア包丁

を1本購入して来てくれるよう頼みました。届いた包丁を見て驚きました。その精巧さ、刃の鋭い輝き、そして切れ味。紙がすっと切れました。最初は、板前さんや大工さんの店内装飾品としての需要が多かったのですが、実際に使えることからドールハウスを作る方からの注文も増えたそうです。その包丁は鈴木さんからのプレゼントと聞き、御礼を兼ねて松崎にお邪魔しました。1997年のことでした。以来今までのお付き合いが始まったのです。

2008年7月松崎にお邪魔した折、話が偶然バンド活動のことになりました。ライブの模様などをお話ししていくうちに、松崎町で開催することは難しいだろうかと聞かれました。そんなことはない、と答えると

「今年の12月にクリスマスコンサートなんて企画できるでしょうか？」

こうして、2008年12月20日(土)松崎町の環境改善センターで「クリスマスエレキナイト」が開催されました。鈴木さんご夫妻と仲間の皆さんのが努力で、400人を越える皆さんをお迎えしてのライブになりました。

私は知りませんでしたが、実はこの時すでに鈴木さんはガンに蝕まれていたのです。鈴木さんは翌2009年9月21日(月)にも松崎ライブを企画してくださいました。体調が優れない様子が私たちにも感じられ、そんな状態でライブの企画とお客様集めに奔走してくださったことに胸が痛くなりました。鈴木さんは残された時間が少ないことをご存じだったのでしょうか。だからこそ頑張ったのだと思う、と奥様の加代子さんはおっしゃっていました。

翌2010年4月10日、鈴木茂樹さんは永眠されました。78才でした。

「松崎町の宝物だった。」

周りの皆さんの言葉が忘れられません。ミニチュア刃物の注文は3年先まであったそうです。

《バンド活動の喜び》

この年の9月25日仲間の皆さんの尽力で追悼ライブが開かれ、「鈴木さんの遺志は私たちが継ぎます。」と定期的にライブを企画するとおっしゃっています。

バンド活動のお陰で、お付き合いの場がどんどん広がります。清水「もでらあと」、清水「プティ・パリ・ド・ラ・ターブル」、牧之原市細江「榛夢ときどき」、駿東郡清水町「ナチュラル・ビレッジ」、掛川の音楽グループ「ライト・ミュージック・メッセージジャーズ」、袋井の女性グループ「木蓮の会」、…。レストランあれば芸術家集

団の発表の場、店舗のコミュニティ、ジャズミュージシャンの集まり、ボランティア・グループ、一時メンバーとして活躍して下さった柳生登さん(ギター)八木保男さん(ギター)、さまざまな皆さんと知り合うことが出来、自分の枠が広がっていくことの喜びが更なる生き甲斐につながっていることは間違ひありません。

音楽を通したつながりは、言葉だけではない部分があります。バンド活動は指と声帯が動く限り、続けたいと思っています。

いろいろな変遷を経て、現在はバンド名「ザ・レジェンド(<http://www.thelegend.jp/>)」、内藤光一さん(ドラム)竹島躍さん(ベース)竹林裕二さん(ギター)渡邊徳三さん(キーボード、ギター)の4人の方とバンド活動を続けています。本業は全員別々です。

《50代半ばのTV中継リポート》

言い続けながら叶わなかつた仕事に、2005年3月、55才と3ヶ月で声がかかりました。生中継リポートです。テレビの夕方ワイド「とく報！4時ら」(月～金16:00～17:00)内中継コーナーの4月からの担当でした。

当初周りは同情的でした。

「普通は若手が担当する外からの中継、その年齢では大変じゃない？」

「けっこうスタミナいるよ。」

「体調の管理、気を付けてね。」

でも私はウキウキでした。素直にそれを言うと、

「無理しないで。」

と言われ、ちょっとガッカリでした。何で皆年齢でしか考えないんだろう？

スタジオは大石吾朗さん、形にとらわれない素直なしゃべりで好きでした。

ある時、

「あつ、くんちゃん！ 僕、それ知ってるよ。以前取材した！」

「吾朗さん。ちょっと黙っててくれない？ それって中継のキモなの！」

「アハハ、ごめんねーっ！」

本当に楽しい中継でした。知らない振りをした演技のやりとりをするよりも、はるかに人間的で説得力のある放送になると思います。

嘘はどこかでバレます。ボロが出ます。知っていることは知っている、知らないことは知らない。楽しいことは本気で楽しんで伝える。楽しくないことは、楽しいことがどこかにないかを探す。やっている方が楽しくなければ、見ている(聴いて

いる)方も楽しいはずはない。これはどんな放送も鉄則だと思います。

真面目に訴えなければならない放送もあります。悲しい放送だってあります。しかし、基本的には楽しい放送の中にあるからこそ、そういう番組も生きてくるのです。

最高のしゃべりは「自然体」だと思います。いかに普通に聞こえるか。ある時、別部署の先輩の一人が昼ワイドを聴いて

「いいなあ君は。くだらない井戸端会議をそのまま放送に乗せて給料もらつているんだから。」

「本当にそうですか？」

「えっ？ 怒った？」

「いえ、本当にそう聞こえたら本望です。ありがとうございます。」

「へえっ、怒らないんだ。」

「マイクの前で普段を出すことは、とても難しいことです。井戸端会議はマイクの前ではやりませんからね。」

その先輩は放送現場は知りませんし、マイクの前がどんな特殊な状況かが分かっていない人です。そのマイクの後ろに何万人の人がいることを意識した途端、普通ではいられないものです。それが意識できない人は不用意な言葉を吐いて大失敗します。

マイクの前で、普通のしゃべりに聞こえる、自然な言葉に聞こえる。私の大きな目標です。自然なしゃべりは警戒を解きます。

さらに「笑い」です。「笑い」は人を幸せにすると同時に、鎧を脱がし胸襟を開かせます。警戒を解き、胸襟を開いた人の心に飛び込んで、一番伝えたい言葉を自然なしゃべりで届ける。それが心に響く言葉だったら、より胸深くに届くでしょう。これが私の目標としている究極のしゃべりです。

《農業妖精サイちゃん》

とく報！4時ら中継の思い出もたくさんありますが、JA静岡青壯年連盟オリジナルキャラクター「農業妖精サイちゃん」との出会いが忘れられません。

「サイちゃん」は、そのキャラクターデザインの作者山城忠昭さん本人が演じています。いえ、なりきっています。分身といった方が良いかもしれません。名前を出すのを恥ずかしがっていますので、どうしようかと思いましたがここだけの話と言うことでお許しください。山城さん自身も天城のワサビ農家で、素晴らしいワサ

ビを育てていらっしゃいます。JA関連の中継の時は必ず来て、中継の導入部ギヤグを考えてくれました。間に合えば、手作りの小道具で効果アップを図ってくれたのです。毎回笑顔のこぼれる中継となりました。

《全身筋肉痛》

2005年9月のトランポリン中継では、大失敗をしてしまいました。実は学生時代、体育館で跳び箱からトランポリンに飛び込んだら反対側に飛び出て痛い思いをしたという経験がありました。その学生時代のトラウマが、事前に要領を掴んでおきたいという気持ちにさせたのです。

教わりながらだんだん見えて来始めたところで止めるべきでした。ところが面白くなってしまったのです。かなり高い位置まで飛び上がったとしても、ベッド(布部分)で膝を屈伸すれば安全に着地出来ることも分かったから、さあ大変。調子に乗っちゃいました。やり過ぎてしまったのです。

本番。身体が動きません。すぐ息が上がってしまいます。何とかしゃべりはしましたが、体験シーンがさんざんでした。そしてそれから一週間。全身筋肉痛です。脇腹の筋肉などにも激痛が走り、周りからは笑われ通しでした。

何でもやり過ぎはよくありません。…当たり前ですね。

《3回目のアノンシスト賞最優秀賞受賞》

2006年7月17日放送の「驚きの世界ダンボールアート」の回が、「第32回(2006年度)アノンシスト賞 テレビ「フリートーク」部門 最優秀賞」を受賞しました。これで、アノンシスト賞の最優秀賞は3つ頂いたことになります。

ペーパークラフト作家檜山永次さんのダンボールアート作品の展示会場(焼津ディスカバリーパーク)からの生中継で、置物、照明飾り、人形や、大きな物ではシーソー、草食恐竜トリケラトプスの形をした滑り台など、素晴らしい作品が並んでいました。夏休みの宿題への提案も含めて、夏休み直前の中継として楽しい放送になりました。

かねてしたかった「落ち着いたナレーション」と「生中継リポート」。いずれも50代半ばで担当でき、両方共アノンシスト賞最優秀賞を受賞できたことは、アナウンサー人生後半の大きな喜びでした。

とく報！4時ら中継は途中から週2回担当し、定年退社の年まで356回放送しました。

《さようなら平ちゃん》

ケッタウェイズを応援してくださった平山豊チーフプロデューサー。私たちは「平ちゃん」と呼んでいました。平ちゃんは情熱家で、何事にも全力でぶつかる人でした。特に「フェスタしずおか」など大きなイベントになると俄然張り切って、先頭に立って働きます。故に、ちょっとでももたついた動きがあると誰彼かまわず叱咤しました。それが時に誤解を生むことも多くありました。

「平ちゃん、きょうは怒鳴っちゃだめだよ。」

「分かつて、分かつて。」

何度この会話を繰り返したでしょうか。でも結果はいつも同じでした。

「平ちゃん、あれだけ言ったのに…。」

「いやあ、悪い悪い。渦中に身を投ずるとついつい…。」

反省もする平ちゃんでした。

その平ちゃんは、ケッタウェイズの1stコンサートでは開演前の舞台挨拶をしてくださいました。チーフプロデューサーが自ら舞台挨拶というのは前例がありません。感動しました。それにとどまらず、陰になり日向になりながら応援してくださいました。平ちゃんと神さん(神村敏行チーフアナウンサー)のお二人がいらしたからこそケッタウェイズは6年間活動できたと言っても過言ではありません。

平ちゃんは55才の時体調を崩されて、入退院を繰り返されるようになりました。ある時、病院へお見舞いに伺ったら病室に平ちゃんの姿が見えません。どうなつかが、病院の建物の外に出ているかもしれないと教えてくださいました。外を探すと確かに平ちゃんの姿がありました。…タバコを片手に。

「平ちゃん、タバコは駄目なんじゃないの？」

「しっ！ 内緒、内緒！」

まさに駄々っ子のようでした。その正直さが平ちゃんの魅力でもありました、どんなにドクターストップがかかってもタバコを止めようとしない姿には大きな不安を感じたものです。

平ちゃんが退社されたのは、2005年11月30日。その直前に平ちゃんを囲む会がありました。たくさん的人が集まりました。私の顔を見た平ちゃんは、

「くんちゃん、ケッタウェイズは愉快だったな。本当に愉快だった。」
と満面に笑みを浮かべておっしゃいました。

その翌年、2006年3月29日永眠されました。65才でした。

《言の葉磨き講座》

総務局長でいらした小塚博さんこづかひろしが、自局他局問わず言葉で伝える仕事をしているのに未熟で不適切な表現が無くならないとして、2003年4月社内講座「放送と言葉勉強会」を立ち上げました。

そして、2005年4月からは名称を「言の葉磨き講座」に変え、再スタート。私はそこから講座終了の2009年6月まで携わりました。講座直近の実際にあった「放送における誤用・勘違い・思い込み」の具体例を取り上げ、その理由と、正しくはどう言うべきかについての講座でした。いくつか例を挙げてみましょう。

◎是非お出掛けになってみてはいかがでしょうか

店紹介などで多く見られる間違い。「是非」はいらないし「なってみてはいかがでしょうか」も回りくどい。「お出掛けになってはいかがでしょうか」「お出掛けになってみて下さい」が適切。「是非」を使うなら「是非お出掛けになって下さい」「是非お出掛け下さい」

◎非常階段に残されたソクセキが犯人のものとみて

○○大学の校舎内で○○教授が殺害された事件でのナレーションコメント。「足跡」の読みの問題。「足跡」は「あしあと」と「そくせき」の2つの読みがあるが、意味に違いがある。「あしあと」は、歩いたあとに残る足や履物のうらの形。「そくせき」は、「放送界に大きな足跡を残す」のように、業績や歴史を指す。どの辞書もどちらの読みにも両方の意味が記載されているが、放送コメントとしてははつきり区別したい。同じ漢字・熟語に複数の読みがある場合、例えば「大家」は「おおや」「たいかい」「たいけ」と3つの読みがあるが、それぞれ「店子に対するおおや」「その道に特にすぐれた人」「社会的に地位の高い家柄」を指すように、意味を区別するためと考えるほうが自然である。この場合は当然「あしあと」。

◎可能性の乱用が収まらない

栃木県○○市で起きた女性銃撃事件をめぐって「顔見知りによる犯行の可能性」「待ち伏せしていた可能性」「改造銃の可能性」といった具合に「可能性」が並んだ。可能性はそれ以降にできる見込みがあるときに使うもので、過去のこ

とにはなじまない。ここに挙げた3例はいずれも「可能性」といえるものではなく、「疑い」で全て解決する。

◎テレビカメラが初めて潜入しました

岐阜県飛騨市の宇宙素粒子観測施設スーパーカミオカンデ取材リポートでのナレーションコメント。テレビカメラ初取材を強調したくてのコメントだとは理解できるが「潜入」はいただけない。「潜入」は、人に知られないようにこっそり入ること。カメラが地下1000mに潜ったのは事実だが、こっそり潜ったわけではない。「テレビカメラが初めて入りました」と普通に表現すれば良い。

◎大型連休で各地、悲喜こもごも

大型連休とそれに伴うETC割引を当て込んだ各地の、思惑通り・思惑外れのさまざまな表情を特集リポート。画面左上の特集タイトルに「悲喜こもごも」の文字。コメントにも登場した。「悲喜交々」とは一人の中で悲しみと喜びが入り交じることを表す語。ここでは悲しむ人がいるが、あそこには喜ぶ人がいるという状態を表現するのに適切な語ではない。「さまざまな表情」ぐらいで良いのでは。

◎自民党内でも意見が真っ二つに分かれた

日本郵政社長の進退問題についての総務大臣の姿勢に対して、自民党内でも賛否が拮抗しているというコメント。別番組でも「名古屋市の道路建設による姫ボタル生息地の危機」の話題の中で、総合司会者が「住民の意見も真っ二つに分かれた」と言っていた。「真っ二つ」とは、勢い鋭く二つに切り割るさま、真ん中から二つに割れること。「二つに」とくれば「分かれた」でも良いが、「真っ二つに」とくれば「割れた」が常套句。

◎中継リポートなどで謙譲語を尊敬語として使ってしまっている例をいくつか

・私たちをご案内してくださるのは

「お(ご)～する」という謙譲表現を尊敬語として誤用する典型例。正しくは「ご案内くださるのは」。中継ではないが「お電話してください」なども間違い。

・500円でお求めできます

「お(ご)～できる」という謙譲表現を尊敬語として誤用する典型例。正しく

は「500円でお求めになれます」。「500円で買えます」で良い。

・お求めやすいお値段です

どちらの「お」もいらない。「求めやすい値段です」、もしくは「手頃な値段です」

・美味しいいただけますよ。

「いただく」は謙譲語。自分が食べるなら「いただく」だが、他人なら「召し上がる」。尊敬表現なら「美味しい召し上がれますよ」だが、尊敬でも謙譲でもない普通の表現「美味しい食べられますよ」で良い。

・教えていただくのはこの道一筋40年の〇〇さんです

「教えていただく」のはリポートしている本人。立てるべき相手を謙譲表現の中に入れてしまった例。正しくは「教えてくださるのは〇〇さん」或いは「〇〇さんに教えていただきます」。

・会長が申された

「申す」は謙譲語。尊敬の「される」は付けたくても付かない。正しくは「会長がおっしゃった」

このような内容で、毎月1時間ずつの講座を全51回開催しました。

《局アナ最後の日》

2009年12月31日(木)、大晦日。局アナとしての最終日。SBSの仕事仲間は、最高のプレゼントをくれました。22:00～元日1:00までの3時間特番を作ってくれたのです。この時の金曜午後ワイド番組「GOGOワイドくんちやんのらぶらじ」メンバー3人(樹根さん、高塚アナ、私)の進行です。

最初の1時間は、年末風景中継など。23時からの50分が「噂を検証！國本良博37年の軌跡」と題した、私のSBS入社からの卒業までの振り返りコーナーでした。かつてのケッタウェイズメンバー(荻島・佐藤・鷹森の各氏)との電話、ケッタウェイズの曲、初鳴き音源の再生、パソコン番組・午後ワイドの思い出などなど、盛りだくさんの50分でした。

しかも、金曜午後ワイドの2代目女性アナ植松千尋さんが東京から駆けつけてくれたのです。驚いたのと同時に感謝の気持ちで一杯になりました。

もう一つ。ケッタウェイズを熱心に応援してくれていた当時のリスナーの皆さん、放送しているSBSのスタジオα近くのカラオケ店に集まってくれたこと。皆さ

んはカラオケ店なのにカラオケをするわけではなく、ずっと放送を聴いていてくれたのです。放送終了直後、皆さんはSBSに駆けつけ「お疲れさん！」と声をかけてくれました。そうしたかったからこそ、SBS近くに集まつたのだとおっしゃっていました。感動でした。

「くんちゃんはこれでフリーになるんだよね。午前0時から1時までの1時間のギャラはどうする？」

スタッフの一言にスタジオが笑いの渦になりました。

定年退社の日の最後の時間に生放送ができるなんて、本当に夢のようでした。最高に幸せでした。

《ケッタウェイズぶっちゃけ同窓会コンサート》

人間、いつ何が起こるか分かりません。ケッタウェイズです。再結成とは言ったものの、そこからさらに14年以上経過してまさか再びコンサートを開催することになろうとは夢にも思っていませんでした。私がSBSを卒業して2年経過しようとしていた時のことです。

ケッタウェイズのドラマーだった鷹森泉さんは、静岡放送のカルチャースクール「SBS学苑パルシェ校」に勤務していらっしゃいます。

そこでかつてをご存じの同僚の皆さんから、

「ケッタウェイズの同窓会コンサートを企画しましょう！」

という提案を受けたのです。

「もう過去のものだから…」

と最初は固辞したそうですが、あまりの熱心さに相談の電話を私にかけてきました。私は、

「でも、学苑なんだから<講座>でしょ？ コンサートなんてできるの？」

と問い合わせます。

「それが<特別講座>として十分成立する、と皆言うんだよ。」

と鷹森さん。

「…で、タカ（プライベートではこう呼んでいます）自身はどうなの？」

「仲間が本当に熱心なものだから…、くんちゃんがやる気があるならやっても良いかと…。」

「分かった！ とにかく荻島・佐藤に気持ちを聞いてみなくちゃね。」

すぐに二人に連絡を取りました。荻島正己さんは、

「いやあ、驚いたな。ぼく再結成から全然ギターを触っていないんだ。唄も歌つていないし…。でも引っ張り出して練習してみるよ」
と承諾してくれました。

佐藤信雄さんは、

「ケッタウェイズは。ぼくにとってとても良い思い出。かけがえのないもの。宝物だよ。でも、…もう弾けない…。今からかつてのベースフレーズを思い出すのは厳しいと思う。いや、絶対厳しい。…申し訳ないけど、やるなら3人ケッタウェイズでやってくれないかな。ごめん」

鷹森さん、荻島さんも何回か説得の電話を入れましたが、同じ回答でした。無理強いはできません。やはり過ぎた年月は短いものではなかったのです。

いろいろ考えた末、私の今のバンド「ザ・レジェンド」のベーシスト竹島躍さんにお願いすることにしました。竹島さんも辛かったと思います。何曲かは聴いたことのある曲があったものの、ほとんどすべてがオリジナル曲。4thコンサートでの矢川淑朗さんと同じような状態でした。でも私たちの真剣な願いに根負けして引き受けくださいました。

2012年1月22日(日)、14年と2ヶ月ぶりにSBSのAスタジオに集まってリハーサル。当然ながら演奏はボロボロです。何より忘れていました。私にとって過ぎた年月は短いものではなかったのです。

「あの時、どうやっていたんだろう？」

頼りは、前回の「再結成コンサート」で撮影したリハーサル映像と本番映像です。何度も見直しながらトレースしました。許されたリハーサル日数は4日。記憶掘り起こしに明け暮れた41日間でした。

2012年3月4日(日)、「ケッタウェイズぶっちゃけ同窓会～あの時ラジオは若かった～」と銘打ったケッタウェイズのコンサートが静岡市葵区にあるライブハウス「ケントス」で開催されました。演奏の質は、言うまでもなく全コンサートを通じて最も低レベルでした。しかし集まってくれた皆さんのは思いは最も熱かったかもしれません。集まってくれた皆さんと、機会を与えてくれたSBS学苑の皆さん、そして竹島さんに深く感謝いたします。

《アナウンサーを目指す皆さんへ》

日本語ほど、時代と共に変化していく言語はないかもしれません。本来は「しらない」だった言葉が「だらしない」になり、「消耗」が「しょうこう」という読みに

なり、きわめがき極書(鑑定書)の付いたものを指すことから、定評のある確かなものの意である「極め付き」が、「最高」とか「果ては」という使われ方をしています。

また濁音半濁音の区別があいまいで、特に外来語では顕著です。例えば「○ジャンパー→×ジャンバー」「○ギプス→×キブス」など。「グルメ」も本来は食通、美食家を指す言葉ですが、美味しい食べ物そのものを指す言葉になってきています。

考えようによつては、こだわりのない柔軟な民族と言えるのかもしれません、アナウンサーはそうはいきません。どんな原稿、台本が来ようと「最後の砦」「言葉の関所」としてのチェック機能を果たせなければなりません。言葉に敏感な方はたくさんいらっしゃいます。些細な間違いに注意が行って、本来伝えたい中身の理解がおそろかになるようではいけません。できるだけ現在認められている「日本語としての正しい表現」を心がけ、内容の信憑性を高める努力をするのがアナウンサーのあるべき姿だと思っています。

1冊の辞書で調べただけで安心していくはいけません。あくまで辞書編纂者の意見なのです。数冊の辞書を調べることで本当の意味が掴めると思った方が良いと思います。「重複」を「ちょうふく」だけでなく「じゅうふく」項目でも載せていく辞書があります。美味しくて舌を鼓のように鳴らすから「舌鼓」、でも「シタツヅミの転」として「したづみ」を載せている辞書もあります。「したづみ」を耳で聞いただけでは漢字と意味が具体化しません。

「辞書に載っているから正しいんだ。」と思い込んではいけないです。誤用であっても使っている人が多くなれば項目として取り上げる辞書が多いのです。それがまた誤用の正当化を生んでいくという流れを作ります。逆転の例が前述の「だらしない」です。今は「だらしない」では通じません。

私自身、こう言いながら日々の放送では間違いを結構やってきてています。入社当時は当然ながら知らないことだらけ。少しずつ学んできたというのが事実です。添付DVDの中でも日本語としておかしな、もしくは間違っている表現も使っています。ジャンサタ出演映像の中でも無意識に「ラ抜き表現」を使ったりしています。言語形成期に神戸にいて、関西言語圏の影響を色濃く受けたことが大きな原因です。

無意識に出る言葉も、現在正しいとされている日本語表現の約束事に沿ったものが自然に使えるようにする。それが日頃の訓練なのだと思います。フリートークの場合はいちいち熟慮していられません。相手がいる場合は特にです。

不用意な思いがけない一言が大きな波紋を呼ぶかもしれませんのです。

重ねて言います。だからこそ日頃の訓練が大事なのです。

原稿読みの場合だって、油断はできません。アナウンサーはその原稿の最終チェック者でもあるのです。「完全な原稿はないのだ」という気持ちで下読みをすることが大事です。事実、作家やディレクターが推敲を重ねた原稿であっても思いがけない穴があることは珍しくありません。

「この表現で良いのだろうか？」

「何かフィットしないな。」

はっきり誤りだと分からなくても「何かヘンだ」と感じる勘を養うのも、日頃の訓練からなのです。そう感じたら調べる。調べた結果がどちらであっても記憶に刻み込まれます。

人間、終生「学習」です。私も一つでも誤用や勘違いを減らしたい、というのが正直な気持ちです。国語辞書が3~4冊入っている電子辞書が欲しいと思っている今日この頃です。

《あとがき》

1973年アナウンサーとして静岡放送に入社。以来36年9ヶ月の出来事をまとめるのは、大変で苦しい作業でした。

でも今は本当に書いて良かったと思っています。自分の生き様を客観的に見るとても良い機会を持てました。そして改めて周りの人たちに恵まれていたということを思い知らされました。自分の力で切り開いてきたかのような錯覚がどこかにあったことは否めません。しかし自分と真っ直ぐに向き合うと、素直に謙虚にならざるを得ません。

「あの時にあの上司が盾になってくれなかつたら…」

「あの時に彼がこう動いてくれなかつたら…」

鮮明に思い出せば思い出すほど、感謝の気持ちで一杯になりました。

人生で一番大切なことは「人間関係に尽きる」と良く言われます。その通りかもしれませんね。佐野編集長との出会いもそうです。

この本は最初に話をいただいた出版社からは出ませんでした。書き上げた翌年(2012年)7月、人伝てに出版社マイルスタッフの佐野正佳編集長から「<静岡のバカ100人>の1人になりませんか」と誘いがありました。「PONZO」という

男性を意識したムック本を9月に創刊すること。柱の企画が＜愛すべき静岡のバカ100人＞だったのです。

光栄としか言いようがありません。「インタビューに伺います」とおっしゃったので、「時間が許せばインタビュー材料としてお読み下さい。」と、この原稿をお送りしました。

すべてはそこから始ましたのです。

インタビューはとても和やかに始まりました。大好きなギターを抱えてニコニコしている、明らかに「オバカッショ」な私を優しい眼差しで見つめながらカメラのシャッターを押す佐野さん。

率直なインタビュー姿勢にとても好感が持てると同時に、信頼できる人柄を感じたものです。

「原稿ですが全部読みましたよ。もし良ければマイルスタッフから出しましょうか？」

最初に声をかけていただいた出版社のこともあり即答はできませんでしたが、10月半ば過ぎお任せすることになりました。御尽力いただいた佐野編集長に深く感謝いたします。

これから放送がどう変わっていくのか。それに伴ってアナウンサーという職業もどう変わっていくのか。私には分かりません。でも、さまざまな情報を正確に伝えると共に、番組トークではその情報に関わる人間の息遣いを伝えるアナログ的存在であるアナウンサーの基本は変わらないと思っています。そして日本語の本来ある姿を伝える最後の関所であることも変わらないと信じています。

執筆真っ最中だった2011年9月16日、私のホームページ宛に一通のメールをいただきました。「大沼啓延&國本良博★コラボレーションLIVE」の二日前でした。ご本人の許可を得ましたので、最後にそのメールを掲載し筆を置きます。

國本良博様 いえくんちゃん

過去に葉書を送ったことは多々ありますが、電子メールという形でご連絡させていただくのは初めてです。浜松生まれ、現在も浜松市内在住の、フリステ、ポピュラーベストテンの頃は「ぴっぷ」のペンネームで何回か葉書を読んでいただ

いた者です。

先日家族で訪れたプレ葉ウォーク浜北で、近々くんちゃんと大沼さんのイベントがあることを知りました。浜北はあの伝説のケッタウェイズ 4th コンサートが開かれた町ですね。感慨深いです。中学2年生の僕は友人と朝から並んで、「ラジオの向こうにいる人たちが目の前で歌っている」状況に感動したのを今でも鮮明に覚えています。

くんちゃんの近況をネット検索したところ、SBSを退職されて起業されたのを知りました。時代の流れを感じます。そういう僕も、國本さんに憧れてアナウンサーを目指していた中学時代から糸余曲折を経て、現在は勤務医として日々過ごしております。地元の医大を卒業後、県内の研修を経て首都圏で修行し、10年前にまた静岡県内に戻ってきました。レポーターとして現場からニュースを届けるくんちゃんの姿を見て、静岡に戻ったのを実感しましたよ。

こうしたメールを送りたいと思ったのは、昨今の天変地異やモラルの低下など、憂うことの多い現代社会の中でも「変わらない大切な物」があり、それを次の世代に受け継いでいくことの重要さに気づいたことと、僕はまさにそのことを中学時代にくんちゃんから教わっていたことに気づいたからです。あの頃のくんちゃんは、おちやらけた番組の中でも決して年下のリスナーに対しても敬意を払うことを忘れませんでした。いま自分が人の親になり、「大人」と呼ばれる世代になってみてそのことの重要さに気づいたのです。その場しのぎの取り繕いや、偽善的な言い訳ではなく、物事の善悪を見つめた本質的な取り組みの大切さを、僕はあの頃ラジオやイベントを通じてくんちゃんに教えてもらっていたのです。人生の最も多感な時期に。

僕は外科医です。手術で病を取り除くことで役に立ちたいと願っている職種です。その医療を取り巻く環境もこの数年で大変なことになってきました。誠実に職務を遂行しているつもりでも、心外な横やりや思わぬ偶発事項などにも遭遇します。そんなときに心の拠り所になるのはこれまでに培われた経験から、「何が真摯か」と考える姿勢です。勿論両親を始め亡くなった祖父母、もっと昔のご先祖様達や友人、妻や子供達にも教わるところは多いですが、中学時代に触れたくんちゃんの誠実な人柄にも随分助けられています。本当に有り難うございます。

このアドレスはこうした個人的な意思表示に使われるものではないと思いつつ、メールさせていただきました。すいません。これからも末永くご活躍下さい。言わ

れるまでもなく、くんちゃんは「ぶれない」とは思いますが、ご自分の信念を貫いて、僕らの世代に残して下さったような道しるべを今後も数多く残して行って下さい。

しゃべり手冥利に尽きる言葉です。

2012. 10. 22

國本良博